

聞寄事珍

# 譚笑林

157  
155

先生著並畫

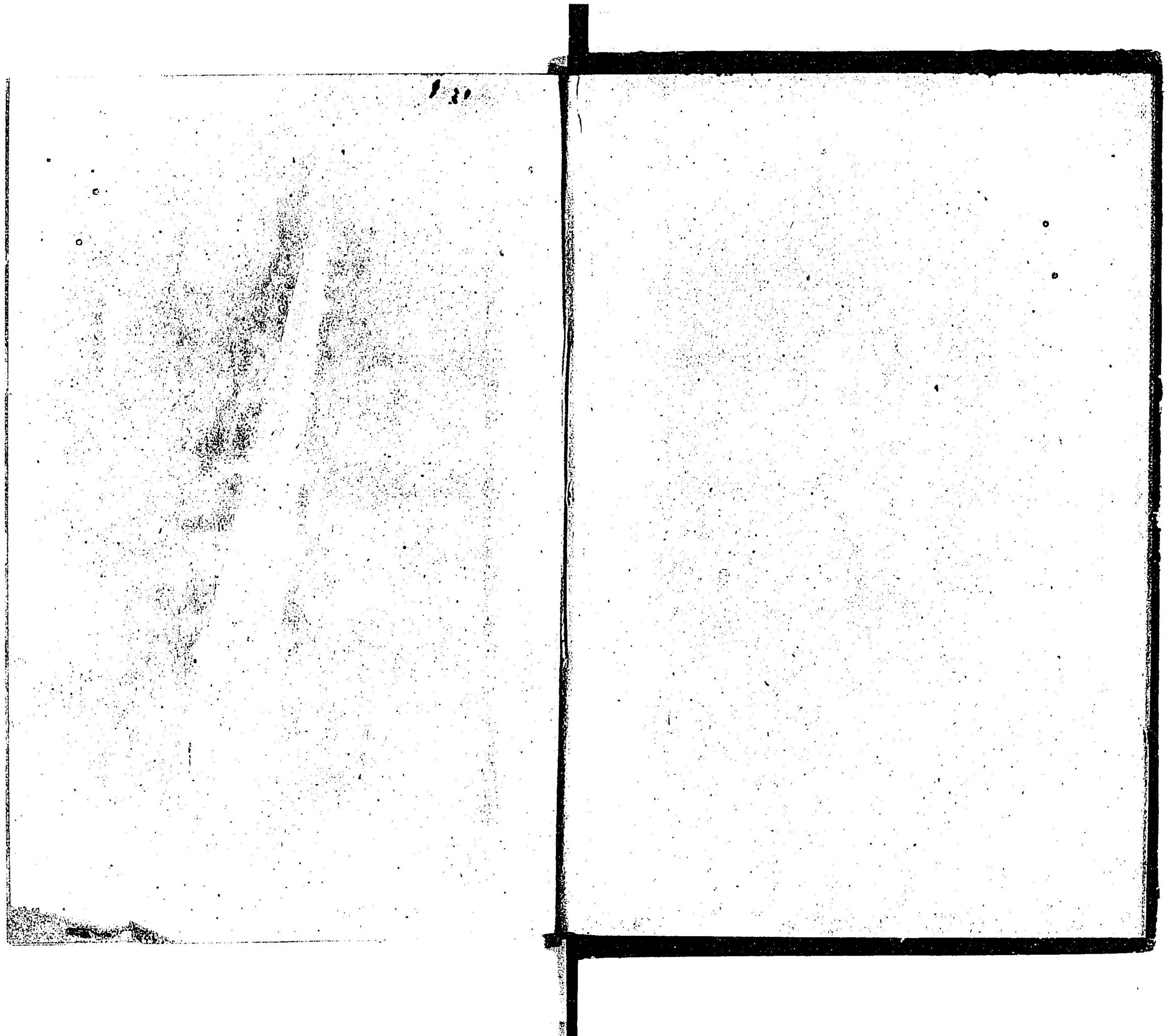
因島任天居士序

羅雅堂

魁真樓藏









珍事 一休笑譚叙

奇人ニシテ奇語アルニ非ズ。異人ニシテ奇行アルニ非ズ。出世大觀者ノ行爲。俗流見テ以テ之ヲ已レニ比シ。而ソ織カニ奇語奇行トナスノミ。是ヲ以テ惠果ハ靜修ヲ奇人トセズ。阮籍ハ劉倫ヲ異人トナサズ。虎溪竹林相會シ以テ大ニ樂シム。蓋シ其言其行出世大觀者ハ怪訝セズシテ尋常トナセバナリ。然バ則チ奇語奇行ナル者ハ出世大觀者ノ眼中ニナクシテ只マ俗流ノ所見ニアル歟。吾一休天心獨朗神機活達。天地ノ上ニ遺逸シ。乾坤ノ外ニ放縱シ。滄海ヲ以テ深シトセズ。須彌山ヲ望ンテ高シトセズ。芥子ノ裡ニ隱レ大千見一界ヲ左右シ。日月ヲ握リテ蚊子ノ毛孔ニ藏ム。誰カ其道力ヲ贊嘆セザランヤ。然ルニ當時禪門ノ僧徒戒定惠ヲ假飾シテ權門ニ銜ヒ。寺觀壯嚴ニ汲々シテ徒ヲニ法威ヲ張リ。未ダ曾テ枯萃微笑ノ絶對門ヲ打破セズ。空ク大擅那ヲシテ達摩ノ所謂無枯功德ニ陥ラシム。一休之ヲ見テ憫笑シ則チ之ヲ矯正セント試ミ。禪門ノ面





目ハ此ニ在マシテ彼ニ存シ。佛祖ノ遺跡ハ金碧殿堂ニ在ズシテ樹下石上ニ在チ知シ  
メント欲シ放誕縱橫禪味ヲ言行ノ上ニ發ス。諸山諸寺之ガ爲ニ戰慄。道俗之ガ爲ニ自  
警。大ニ驕奢ノ宿弊ヲ洗フ其功德豈ニ寶塔建立ノ比ノミナランヤ。後世之ヲ解サマル  
者其言行ヲ以テ奇異トシ口ニ藉々シ冊書又之ヲ傳フ。頌口書林之ヲ蒐輯シ鉛ニ列シ  
顔シテ一休笑譚ト云フ。今ヤ佛教再興シ禪學亦々旺盛矣。斑此ノ書ヲ讀者。一休ノ言  
行ヲ以テ猶ホ奇且ツ異ト爲ス歟。余此ノ如何ヲ以テ禪門ノ盛ト衰トサトサント欲ス  
ルナリ之ヲ叙ト爲ス

明治二十三年十一月十二日

任天居士識於刀利天寺







奇實事 一休珍話全集目錄

- 一休根元記序 (一丁)
- 一休蟬川初めて問答 (全)
- 蟬川皮房に隙を遣す事 (四丁)
- 一休蟬川五戒問答 (五丁)
- 一休話則を許玄給ふ事 (八丁)
- 一休へ蟬川雨中に見廻の事 (全)
- 蟬川彌陀の化生を射る事 (十丁)
- 一休幼少の時旦那と問答 (十三丁)
- 一休御影の讚の事 (十六丁)
- 酒宴講浮世誦誦文の事 (十七丁)
- 法性の月明な釋迦の書捨の事 (十八丁)
- 善惡の種至極の道利の事 (三十丁)



縁と無縁は三ツの品自問答  
 因果の差別目前の道利の事  
 善を見て羨へ過去の二ツの事  
 一休旦那の智恵を計る事  
 命を滅す河豚汁の事  
 大名の引導阿云の二字の事  
 年の始の鬻骸の事  
 百性の訴訟狂歌の威徳の事  
 關の地藏開眼の事  
 一休山伏行力鼓の事  
 唐僧醉眠の返答一句の事  
 雙か早合点一生の徳身の事  
 因果歴然修羅の二ツの事

(二十三丁)  
 (二十四丁)  
 (二十七丁)  
 (三十丁)  
 (三十一丁)  
 (三十三丁)  
 (三十四丁)  
 (三十六丁)  
 (三十七丁)  
 (三十九丁)  
 (四十一丁)  
 (四十二丁)  
 (四十四丁)

一寸の虫にも五分の魂の事  
 親子を知ぬ魚鳥の姿の事  
 土佐が掛絵に敵の事  
 羅漢の名も頓智の返答の事  
 諸宗の佛繪に敵の事  
 堅田の浦魚釣の事  
 大内灯籠の狂詩の事  
 女の死骸加茂川に流す事  
 四十雀引導を受成佛の事  
 沙門の繪像に敵の事  
 蝸牛南極物語の事  
 一休女房に濡衣の事  
 神變自在を語る事

(四十五丁)  
 (四十八丁)  
 (五十丁)  
 (五十二丁)  
 (五十三丁)  
 (五十六丁)  
 (五十八丁)  
 (六十丁)  
 (六十一丁)  
 (六十二丁)  
 (六十三丁)  
 (六十五丁)  
 (六十七丁)



愚癡成者話則を乞事  
 閑居の姿不思議の事  
 詩歌を作て蛸を服す事  
 遊山雲井の雁の事  
 秘薬を習ふて世間へ傳授の事  
 堅田の船頭引導を受る事  
 所家名は是謎言葉の事  
 偽喰魚類の高札の事  
 當座の難句答話の事  
 眼は五生の徒見るに品有事  
 維摩文珠即座問答の事  
 世界の女房は禍の山神  
 御手洗の流で染る人心の事

四

- (六十九丁)
- (七十丁)
- (七十二丁)
- (七十三丁)
- (七十四丁)
- (七十六丁)
- (七十七丁)
- (七十九丁)
- (八十丁)
- (八十二丁)
- (八十四丁)
- (八十七丁)
- (八十八丁)

報も早き女敵の太刀の事  
 智恵に纏絆し女の徒の事  
 男女御評判柳の枝に雪折の無  
 賢悪の女心の持川の事  
 戀の源は澄と濁との戦事  
 恵心僧の都名利二ツの事  
 現の物真似曾我の夜打の事  
 山椒に墮る奴が頬髯の事  
 妄語の罪佛の誹謗の後世の大事  
 武士の謀計の出世の本意  
 一休鯉を服し引導の事  
 四休居士の事  
 一休しの字の掛物の事

五

- (九十一丁)
- (九十七丁)
- (九十九丁)
- (百一丁)
- (百五丁)
- (百八丁)
- (百十一丁)
- (百十三丁)
- (百十四丁)
- (百十九丁)
- (百廿一丁)
- (百廿三丁)
- (百廿六丁)

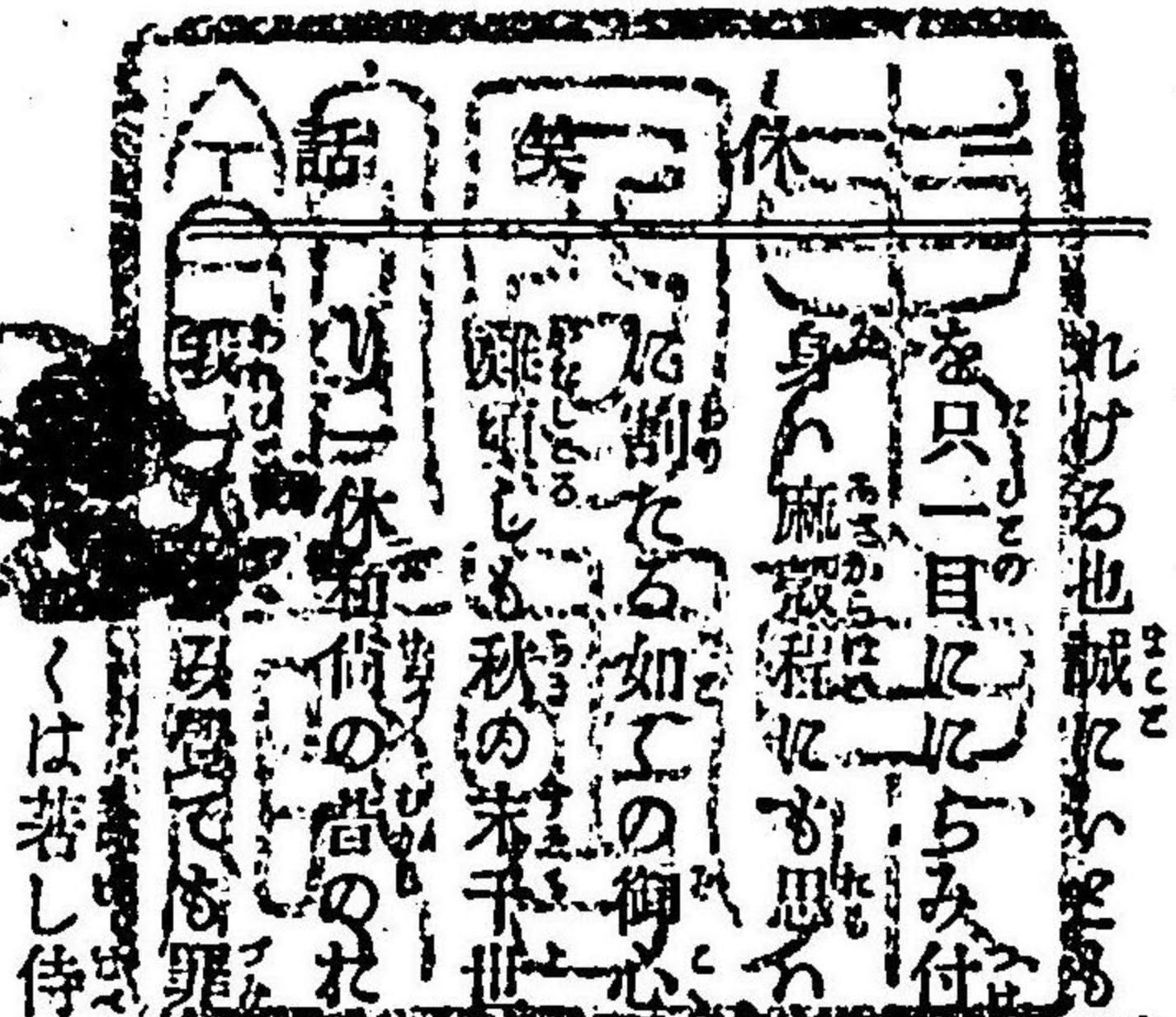


特に  
436

珍事 一休笑譚

奇聞 一休根元記

元橋年丸著



それ一休和尚は後小松院の二の宮也世の人の口に有歌にも後の小松の二葉とも詠せられける也誠たゞも賢き人にて坐々けるか高き高位をふみ散し内裏をめぐり出て十宗を只二目にてちみ付達一宗とあり玉ひて九年面壁を盗人の跡の棒ちざり木を見立て其身麻痺にも思ひ浮世をひようたんより軽く持てあしよこし生成萌もなく竹二つは削たる如くの御心なり路人の口碑に有は舌の先の障とし侍ると仰せられしは彌有難し秋の末千世を一夜の長々しさを獨かも寝られ間敷紫野の庵に來り煎茶を玉ひり一休和尚の首のたどけ咄しひた物語玉ふを聞程有がたく面白く忘れての大事と聞覺みても罪深し是を人に見せぬもいと口惜と櫻木にちりばめ世人の眠たなくくは若し侍る

一休蟻川初めて問答  
蟻川新右衛門親當と云武士有けるが常に禪法に身をやつし座禪工風成けるが一休の獲

一休狗子佛生の狂歌の事  
一休追劔の事

(百廿七丁)

牧溪の繪に一休體を書事

(百廿八丁)

一休御袋に御勸の事

(百三十丁)

夫婦諍世常の損耻の事

(百卅一丁)

一休遺言自書自跋の事

(百卅二丁)

一休弟子林月が事

(百卅五丁)

林月餅を服し絶入の事

(百卅七丁)

林月坊冥途の旅の事

(百卅九丁)

頓死靱猿の事

(百四十三丁)

一休往生の道歌の事

(百四十三丁)

一休水鏡増注

(百四十六丁)

(百五十二丁)



明なるを聞及ひて導師とたのみ奉るべしと思ひ或時一休の座室へ尋ね行て柴の扉をば  
 叩く折節一休出玉ひていか成人そと問玉へばいやくるしうも候はず佛法修行  
 りて候と申されければ一休はや問ての玉はく汝は何國の人ぞ答曰和尚と同國  
 事か侍らぬか答鴉のかうかう雀のちうちう爰は何國をかしるや紫に染たる野  
 邊如何としてか染けるや答尾花紅菊紫蘭、散ての後は如何答宮城野が原々には何事か  
 侍る答水は流れて沈々風吹て颯々よきかなや是へ是へと請し茶をまいれとて一首よ  
 めり

何をかままいらせたくは思へ共達尸宗には一物もなし

蜷川返歌に

一物もなきをたまひる心社本來空の妙味なりけり

と申されける一休の玉ひけるの聞及びしより蜷川殿道心けんご成とてかんじ玉ひ心  
 打解四方山の咄過て親當申様邪正一如と云心はいか成かよく侍候也一休問玉ひ其方  
 歌すきなれば歌にて答へ侍らん邪正一如の其心の

生れても死ぬる也けりおしなへて釋迦も達尸も猫もしやくしも  
 又とふ空即是色とは如何一休答曰

白露のたのが姿に其まゝに紅葉に置くくれなゐの玉

又とふ色即是空の心は前の歌心を返してみべきや答歌

花をみよ色香も共に散果て心なくても春は來にけり

又とふ佛法といいか成心得をよしとし侍るや答てよめり

佛法はあべのさかやき石のひげ繪に書竹の共すれの聲

又とふ世法はいかにこたへてよめり

よの中へくふてはこしてねて起て扱も其後の死る計よ

と一々問ふ言葉の下に歌にて答へさとりを教玉ふ蜷川も舌をふるはし扱々聞及びしよ  
 りの御心たけき活僧かなと頼母敷思ひ彌々道をしめし玉のれいつ迄語侍ふ共濱の眞砂  
 の數々なればたいと申せとてしをり戸迄出玉ふが手をはつたと訂立歸り一大じの事  
 の安心をわそれたり傍には如何してか成けるぞと申されける一休きやつの一利屈有者



と思召それ何よりいと易き事なりとて其身をふんぞりかへりて目口をひろげてかくして佛には成よと宣へば親當驚き活大禪師かなと心空泣涕してこそ歸りける

新右衛門女房に隙を遣す事

蜷川か最愛の妻幼時より萬に心みぢかくたけくしかりければ悲しき者にもまひのめぐみなく召使童にも哀憐の情薄かりけりされ人の似を友とする習成に悟道の居士になれ添て尊き教へをまらざりける事いかさまむくひの耻成べしと皆人ごとにさげしみける新右衛門明春是を不敏に思ひて元より道者の事なれ魂を碎柔和の教へをすゝめける然れ共女房露随ふ氣色見へざりけり或時あまりいたく制しければ女房顔を赤めて歌一首よめり

麻糸の長し短かしむづかしやうむの二つにいつか放ん

とかやうに詠て音もせず親當驚き日頃のじやけんとは相違して歌の心餘りに殊勝なりければ耻かしく思ひ我教ゆるに及ずとて肝にめいじかんまけるさればにや女房今迄放逸じやけんを任せければ誠に聞き愚人成と覺はしが扱は我より先に悟有物をと舌

をまきける其後の夫婦むつまじくひよくの契深りしかば上下水魚の心をなしけるにづらき物の言成しにて有けん密に別妻を重二心有よし誠しやかに蜷川に告知せればもとより新右衛門譎りをまんとする者に有ざりければ共思ひ當りし事有とてまばしの延引もなく離別して親里へ送りける女房折節懷妊の心有なやみければうらみの心淺からずつるぎをのみはのふをやきかうふらんと種々もたへ悲しみけれ共更に請引なければ力無も我里へかへる無實の程いふ斗なし然れ共跡かたもなき偽なれついに誠があらはれ諷言の所業と知にける新右衛門後悔して又呼むかねんとて我あやまり數々いひ遣しければ女房つらく思ひ歌一首またよめり

秋風の人の心に立ならば實のらぬ先にいねといわさる

とかく書て返事して再歸らざりし女房の心たぐひなくいささよきふるまひ蜷川には勝りしとはめぬものなかりし

一休蜷川五戒問答

或時新右衛門一休庵室に來り佛法はれしなどし遊ひけるに一休仰せられしは先今時の





出家は心ざし薄く佛の五百戒をさへ保ち玉ふにせめてハ其數取の五戒をば保つべき事  
 なりと宣へば新右衛門申されしハ誠に沙門は申に及ず俗の上にもせめて五戒を保ちた  
 き事也と申すに一休問召いや俗人は是非なき事なり出家にはもたせたまき去なから眼に  
 見に耳に聞ゆるもの五戒を保つ事なしわづか成一尺の扇さへ五戒を破るうへはまして  
 僧俗生とし生るものとして五戒を保たざるは斷也と仰られけれハ蜷川問て曰かやう  
 の扇をも五戒を破り申とや中々破りたり是は和尚の出來口にて侍らん然らば五戒を一  
 々とひ奉るへく答て聞しめ玉へ何時もの輕口御頓作承らんと申せばさらは問ひ玉  
 へ答へんとあれハ蜷川問て曰何如是殺生戒答て曰竹切ほねさはなさるや如何是偷盜  
 戒答て曰虚空の風を盗まぬや如何是邪淫戒答て曰要々とあはせずや如何是妄語戒繪空  
 ことを書さるや如何是飲酒戒答て曰開てさゝんと言さるや是扇の破戒ならずやと仰ら  
 れければ新右衛門理をかん玄扱々今に始めぬ御口のしめし偏に有難存する也去ちから  
 五戒の内偷盜戒の御答に不審申度候一休問召それは如何成不審成しぞ新右衛門曰古語  
 曰傳へしハ扇是日本扇風不日本風と聞時は扇こそ日本の扇を動かすらぬ



風は日本の風斗りとはかざるまじ千里同風と有からは盗所いなやと廣放ながら一句申ければ一休是新右衛門と宣ふをやつと答へば一休頓て一首  
音もなく香もなき人の心にて呼は答へるぬしも盗人  
と遊はし玉へは扱もよき返答かな最前よりの問答御六ヶ敷あから一筆書て玉はれと望む一休さらさらと御書なされて蜷川にあたへ玉ふ則ち掛物にせられけると也此掛物都の中に持たる人有是をうつす

一休話則をゆるし玉ふ事

或時新右衛門誰の話をさんじけるに一休しめして曰釋迦彌勤は是他の奴暫時いへ是阿誰と問玉へ新右衛門歌を詠み答へける

誰といふ言葉の下にあらはれて誰と誰と誰は誰なれ

と申ければ一休是をかんじて此一則にて千七百則をゆるし玉ふといへり

蜷川雨中に一休へ見廻の事

頃しも八月下旬の時分大風大雨しきりにして洛中の家堂社塔もそこねければ蜷川取物

も取敢す一休和尚へ御見舞申て御坊御内に坐ますか何と何と殊外の大風雨御寺は何方も損じ申さすやと尋ねられければ一休出合玉ひよく社心付候もの哉誠にめづらしき大風にて侍る去ながら當寺の先何事も御坐なくとて歌一首

我やとは柱も立すふきもせず雨にも濡す風もあたらす

と仰られければ新右衛門其庵は何くの程にて候ぞと尋ねければ一休笑ひせ玉へてされはこそ大事の事を尋ね有

我庵ハ都のたつみまかぞ住世をうち山と人のいふ也

どの玉へければ扱の喜撰法師とあい住候かどたのふれけるいや喜撰にかりて居る也といへり扱の借屋殿にて候かと笑ひしかは一休又一首遊はしける

かりの世に貸たる主も借主も貸と思はそかると思はず

と遊しける新右衛門此歌を感じて扇に書とめめかり造次にまわりても得道の徳侍るとて悦ひて御暇申出けるか門外より立歸り扱々あかしきたはふれ事仰られて浮ふへき思ふ事を打忘れずでに歸らんと仕一首につくり侍る如何候はんとてよめる



吹時はものさひかじき風なるか吹かぬ時に何地成るらん  
と申ける一休其まゝ御返歌

吹時はむべさはがしき山風のふかぬ時に吹ぬ風かな

と速束一首有けれ新右衛門物をも言す點頭て暫時一休を禮拜して歸りしとかや

蟻川彌陀の化生を射る事

蟻川新右衛門親當武士の道くらからず殊に才智發明なれば一休師弟の契約あり禪法に  
參じられ佛心の妙奥を傳へ正法眼藏をさひむ英雄の士と云つべし和尚も心通相叶ひも  
しく思し召ける断也されは定業の期來て寂滅の室に至らんとぞ胎下の昔しよりは是を  
待事年久し思ひまうけたる道なりとて快氣の望み更になし一門はせ集今の限に各々  
各殘を惜したいなけくこと餘所の見目もあひれにて知ぬ袖さへぬらしけるかゝる愁た  
んの折節青々たる西の空より紫雲懸空の中にあはひ音樂聞へ異香薫じ花ふり妙成かな  
三尊二十五の菩薩赫々たる聖衆を引つれまぢかく來迎し玉ふふしきとも又有難き瑞相  
なり疑もなく新右衛門は西方極樂十萬億土の世界に往生せしめて九品上刹のうてな

至らん事ハ掌を見るか如しと銘々感に絶ざるのなしされは落日近老士まだ物なれぬ  
若輩の家族天にあぶき地に伏し共に死なんと狂ひける道理の至極とぞ聞にし其中に惣  
領は新右衛門か膝のもとにより添ひ涙を袖につゝみなからあれ御覽まじませ彌陀來迎  
の御むかひ頼母しく思し召れ往生安全にとげ玉へともびを指して教へける其時親當眠  
れる眼を見開き我子をいたとにらみそれ弓馬の家を生れける者いたとへは安養淨刹に  
至りて九品蓮臺に座す共弓箭のわするへきに非ず出や魔道を得てみせん書院の床に置  
たる重藤のぬりこめに矢そへて持來るべしと宣ふを聞人驚かさるのなしとは如何にと  
見る所に親當弓勢何人張とひしらねともさしも強かるらんと思しきか頼て引くわへ引  
しほり暫時かためてひやうと放てばあやまたず三鉢の中尊光を放ち立玉ふ阿彌陀の胸  
いたを彼方是方射通ければ虚空にあほのき紫雲のよそをい諸々の聖衆と思しきもの暫  
時に消にて影もなし如何成事ぞと了簡すれば所に久しき古貉の化こうを経たるにて有  
覺誠に希有の次第終に一首の辭世を詠殘しかかれし  
生れぬる其曉に死にぬれば今日の夕べは秋風うふく



と書つらね臨終をとけ玉ふ奇成かな空寂の玄妙を會得して邪摩の障碍をはらひ其身の死門に入あから活人の眠を覺されけるの世人の珍事とする所也其後一休を導師と頼奉り御引導を乞ければ一休も此新右衛門にの替かへて引導すへしとたくみすましてかへせしに早速死骸をこしに職來り一休立玉ひかの蟻川が乗りたる龜叩き玉への死たる者が高らかなる聲を出して一首の歌をの一休にかけゝる社不思議なり新右衛門も唯人にてのあらずと今の世迄も言傳ける其歌に

ひとり來て一人歸るも我成を道教んといふそわかしき  
 と高らかに詠しければ一休其詞の下より返歌をし玉ふ一首  
 ひとり來て一人歸るも述ひなり來らず去す道を教へん  
 と宣へ新右衛門も賢もどや思はれん其後の音もせずありけり人皆是を聞て賊に一休和尚は人間に非ず佛菩薩のかりにあらわれ一人來て一人歸るも道といへば來らず去らぬとの玉ふ扱々有かたやと見る人聞人拜まぬのなし老子の曰死てもほろびざる者は命なかしといへるはかゝるためし成べし

一 休 幼 少 の 時 且 那 と 問 答

一休幼稚の時より常の人への替りて利根發明也けり師の坊は養叟和尚と申けることびたる且那ありて日毎に和尚に參學あとし侍りて一休の發明成を心地よく思ひ戯れをいひて問答あとしけり或時彼の且那皮袴を着て來りけるを見て一休門外にてちらと見付内へ走り人へきに書付閉られける此寺の内へ皮の類ひ堅く禁制なり若皮のもの入る時其身に必ずばちあたるべしと書て置れける彼の且那是を見ず皮のたぐひにばちあたるあらへ此寺の大鼓は何と思ひ玉ふそと申ける一休聞玉へさればとよ夜晝三度つゝのばちを當ける其方へも大鼓の通りばちあて申さん皮はかま着れしととけられけり其後彼且那養叟和尚を齊によぶとて一休も御共にと申歸りける彼者の入口の橋の詰に高札をかなにて書立置ける養叟齊の時分よしと一休御供にて彼且那所へ來り玉へば橋の札有よみてみ玉へば此橋渡る事堅禁制也と書付ける和尚御覽じ此橋渡らては内に入る道なし是の如何と宣ふ一休つくづく見ていや此橋渡ることゝかなにて御座有ればまん中を御通候得者くるしからずと真中を打渡り入玉ふ且那出合きん制の札を見なから何と





一 休 笑 話

て橋を渡り玉ふ誰かゆるし御通りでとどかめけるいや我々ハはしを渡らる真中を渡候  
 と仰けれハ亭主も口を閉ける何か小僧に不審をなし困らさんと又曰凡沙門のかたち  
 といつばんにく二鉢の衣を着さいまやうさんげの袈裟を掛けて社僧とは申へきに如  
 何小僧なれハとて俗衣の出立心得かたしと不審なせハ一休もさなければと歌よみて答  
 玉ふ

きて來ぞ本來空のくろ衣袖なかからて人こそはえらねと遊ハし玉ハ且那も養叟も  
 手を打めぎれて感えける扱御齊も出し今一度一休に不審せやと思ひわざと魚頼の膳  
 にてすへけり珍しく思し召ひた物食玉ふ旦那見て人しれぬ衣めしたる御僧のまたハか  
 魚をまいる事よと戯ふれける一休聞玉ハ口録倉海通なれハ貴きも行賤きも過と宣ふ然  
 ハかゝる物も通り候やと刀をすらりと拔出し玉ふ一休さかすてきか身方かと問敵な  
 りと答ゆる然ば通す事成難しいや味方なりといハば其まハけハんけハんとの玉ひくせ  
 物か通るとて俄にせきが居りたりと有は旦那も尙和も此小僧にハ勝たれましと舌の根  
 をふるひてやみぬ



一休御影の贊

一休末期の句とて出る儘に遊はしける世の人の口にまかせけるの其數多し是が實是は  
不實なりと云も不實也有所の御影に曰

隙々耐三十年淡々而三十年隙々淡々六十年末後冀賸捧三梵

天

此句も去所の寶物となり侍る又の語に

借用申 昨月昨日返濟申 今月今日

歌に

借置し五つの物を四つ返し本來空にいまぞもどづく

又 末後とやらんに遊しけるとて又去る人のいへる

生也死也 死也生也 柳の縁 花は紅

喝

柳の不縁

花の不紅

御用心御用心

一休庵題

末期の一句書拾の方々寺家の寶物其數多し書なかしたる筆の跡人の目に見へぬも心に  
くし金銀の耳盲の目にも覺はさせ未知らぬ大人にもまらせん爲かくあらはし侍る

酒宴講浮世誦論文

それつらつらおもみれば分段同居の風俗は陰陽を以てして有爲の捷の夫婦を以て儀  
とす鳥に比翼のかたらひ有木に連理の契り有いはんや人倫に於をや密に思へん容色姍  
姍にして梨花の露をふくむか如く心中柔和にして行水の物に隨ふが如く天生の美麗世  
にたくひなき西施が容貌貴妃か顔色一度笑は百の媚鮮明に見る物思ひを動かし聞士心  
を碎きぬらん春の朝には梅櫻の下陰に亘て三味線を弾し秋の夕への蘭菊のまがきに立  
徘徊てなげぶし吟し翠帳紅閨の中には枕を並密語紅粉翠黛のかほらせ二世の契を結ぶ  
といへ共かきり有浮世の習ひし生者必滅會者定離のみきてなれば一人も止まる者なし  
誠にししかたを思へん徒にくらし空しく曙す喧悔しいかな悲しい哉今此時によき苗を  
種すん何の春か菩提の花を詠めんはやく無明の酒の醉狂をさまさんにとまかすと先  
一塵の小哥をまづめて望む所の講談なり誠は是希代の發菩提心あげて云にたらす此善



根に答て現世にハ長生をし金銀米錢澤山に當來には極樂に往生しえたい事して遊はんのみ依而意趣如件 時に今月今日

施主當國當所 酒宴講 中敬白

次に經文を開て頂き一調子あけて大悲經第三に曰佛阿難に告ての玉は、若衆生有て涅槃をねかひ求めずといへ共まかも佛の所に於て諸々の善根を種つれハ我説此人必き涅槃を得てんと云

法性の月明かな釋迦の書捨

扱今晚歴數講談興起の義ハ諷誦文にも聞けた通り酒宴講中逆修現當安樂の爲め一ハハ笑種の種として勤る所の説法講談侍る或經にもしハ園の中林の中若は白衣の家是中皆應起塔供養と説れて此様なる在家俗諦の白衣の舎の中にも佛の經卷をゐめて宣爾顯説といひて一句にても一偈にても演説時は譬は汚らしき所も則ち三世の諸佛來迎影現の道場といふ物なれば信心を決定して聽聞有へき事が肝要にて侍る次に愚僧が儀ハ何もまらざる瓢金坊主物知り顔に子細らしきと必驕慢の心を起し玉ふか大惡心じやそれ

はなせにと不審あらん涅槃經には依法不依人と説て其人にはよらす能所の法によれと教玉へ成實論にハ經を引て我意にあらま共各正理に順するをハ聖教とすへしどもあり狼か衣を着たりとも法の道を説よき所か有ハ敬ひ慎みて聞とるべし其釋し譬は未曾有經法像決疑父母恩重經等を佛説にあらずといひ共如何にしても其理佛の御心に叶ふが故に諸の祖師を是用ひて證文とする如く我等ごときもの者も教化し説法せん時は佛も我も敬ふ様に沙門を恭々せよとも宣玉へぬれば信心の手前からは慮外ながら某かしを未世の佛じや共思召すかよく侍る諸只今披露の經文ハ訓讀の如く大悲經第三の卷なり惣して經を講するには來意釋名入門判釋など、いふ事御座あれども淺學の某がしなれば萬端差置て只經文の表に因りて一言申談すへし今の文の意ハ釋迦如來阿難尊者に對して仰せらるゝやうハ末世の衆生等下根下劣にして直に涅槃妙心の理をさとらず其利を願求る程の事はなく共何となく佛の所に於てよき心指を種れは必き涅槃に至るべしとの文で御座るが佛のみもと、いふハ釋迦はすでに入滅なり後佛の彌勒ハ時いまた至らず何國をさして佛の所と定べきと思へは文字ハ是法身の氣命といひて遠からず此金句



の説法を一度聞て永く忘れぬ阿難尊者如來滅後に獅々座に登一代の法藏を結集し一千の阿羅漢是を貝多羅葉に記すに少しも佛説にたがはず此時大衆ふたつの疑ひをなして如來重て世に出玉へるや又阿難今變えて佛となり玉ふかど倒を以て讃じたる所の經は義を究め理を詮め生を度し物を化す中にも大悲經別而殊勝千萬なる此等の文義を談する此所が則ち三乘開會の即世道場全く諸佛來現の所といふ物也實より涅槃をば求めざれ共座興にもたどげにも名利にもうそにも佛語論談を聞心が其まゝの善根を種るといふ物なれハ佛説に偽りなく未來成佛ハ歴然の道理なり諸逆修は七分の善徳全く得て現世安隱の朝に榮花の春をうたひ命期修終の夕に法性の月を詠せん事ハ疑ひもなき經論の旨にて御座ある程に頼母しう思ひ玉ひてねがはくハ眞實に涅槃を求め給ひて一遍の南無阿彌南無法花を唱へ給ハ往生成佛ハ決定で御座る先是で經の句面はざらりと聞けました

善惡の種至極の道利

今の文の中に涅槃といふハ天竺の詞なり爰には滅度と翻じて空寂の理に歸する旨なれ

共只成佛至極の處と覺へ玉へ扱此經の中の要ハ然も佛の所に於て善根を種つればと説種るといふ文字が法譬に叶ふ聞所にて侍れハ耳を片ぶけて講談を聞玉ふべし此種の字ハうもるとも種共くさ共讀諭ハは草木のたねの如く瓜をうめれば瓜を得豆を取にも同じく善根を蒔ばよき菓をとるを因果ともいへり世間にハ仕合のよき事を果報といひ宜しからざるを因果といふハ誤れり因果も果報も皆むくひといふ心にて文字に善惡の差別ハなげれどもか様なる誤りの世に數多にて侍る弘明集に纖芥の惡は劫を歴どもほろびず毫釐の善ハ世々にも滅せずとて微塵髮筋程の因も果ならずといふ事なければ仮にも惡事の種をこぼすべからず生べきハ治定にて侍るされハ法苑殊林に經を引て曰惡癡成人因果をしらす見だりに邪見を起し三寶四諦もなく禍もなく福もなく善もなく惡もなし衆生の業因もなく惡果もなしと誘る者は決定として阿鼻地獄に墮へしといふ文にて御座有程に何もたしなみ玉へて因果撥無して佛法といふ者は無者やなどハ搔破成事はかまひていはしまるるをされ共今時の人多く僻みて地獄も極樂も有とハ聞と見て來る者なし適見るハ探に紫の雲を空より糸にて釣下箱の光りを放佛弘誓の舟に二十五



の菩薩一度に尺八を吹三味線を弾せてつかふ上手にて又可笑鬼と云も虎の皮のふんどしをたるが濃たる角を振立し傀儡師のもて遊か怖しき物なれよい加減成事を佛もたくまれて子共だましの戯れを仕出し玉へけるよといふ者もありいやはや某の法師の地獄に往て有し皇の苦痛を見奉りて歸り唐土の僧も那落のくるしみを思ひ出して日に三度血の涙をながす共書こしたるはといへは嘘つきの未弟共がいふ事なれは何を証據にすべしなど嘲る人こそ淺ましけれ同じ論に曰無に陥て因果を問する者は譬萬牛挽共永劫地獄門を出しと書て是を悲しみ玉ひてこそ三世の諸佛も十方の如來も世々番々に出世し玉へ此まどひをやめさせ一切衆生我ごとく一佛成道ならしめんと五十年の間聲を枯して説法教化し給ひけるを倒に心得るは悪の中の極悪なれば眞に那羅延力の牛の數も悪趣を引出事は難かるべし此等の人の墮る所の地獄の苦患を受るに間なきが故に無間地獄と名作其舛相は往生要集因果經等に具に有る只今申事に及ひませぬ何と悼しき事での侍らぬか愚僧などは先いやで御座る爰に一つの不審か是有自問自答をして聞せ申さん

縁と無縁は三つの品自問自答  
問如來は是實に一切衆生の父母にて大慈大悲あまねく覆て更に倦時なく影の身に添如く護念し給ふあらは其佛の力にて衆生も悉く悪を止め善を修すべき善あり何ぞ日夜に悪業を作事如何かふ申雜問は無ふて叶はぬ所で侍る此答へは尤佛の大慈の平等にして差別なく一味の雨の如く日月の光りの如く何方に分隔なけれ共受る所の衆生が同からず縁と無縁との相違ある事は釋迦如來舍衛國に於て説法遊したるにて合点がまゐるそれの如何成事と申佛此舍衛國の祇樹精舎に二十五年たひしにして説法なされたる時殊勝のあまりに猿鳥狐狸のあらゆる群類迄悉く如來の説法を聞て頭をうなだれ事終れば皆たのが住栖に歸りし然るに此國に住人の數九億ある中の三億の衆生は視釋迦如來を拜奉り音聲を聞て得道し又三億の衆生は只佛の此國にて説法し給ふと斗聞又三億の衆生は佛といふ名も知らず是を見給ひ同國に住同時に逢ながら縁の有と無といひ此三つの品の替り有佛の手前よりは少しも隔はなけれ共爰は力に及はぬ所也又醫者の藥をもるに何卒して人の病を本服させ只茶匙加減に心を盡してみたふといへ共飲ねば醫者の



答にあらす全く斯の如く佛は八萬四千の煩惱の病を癒す大醫王なりとの譬へ是にてよく聞け侍るとすれば始めの難問はすみました此上の随分迷ひを退く所の彌陀念佛や法花題目などの良薬を飲て安樂世界寂光淨土に往生成佛をさげ給ふへきが一大事にて侍る最一つ因といひ果といふに人の疑をなす事は是有程に次手に講談して聞せませう

因果の差別目前の道利

唐士の子才と士嫌と云ものの問答にて侍る夫をふまへては論せね共少し因果の道利を聞はつりたる者が申事には因果といふ者が種と木の實の如くならば同じ田地に蒔く茄子小角豆の中にも枝葉の茂りたるも有瘦たる枝に出の附て見苦しきが有と其肥たる枝へ前世にていか成善根あり哉瘦たる枝へ何成惡業をかなして是程の差があるにて侍らん其上松の木が後生願て櫻に成たるためし有や天地間に生する者は萬物自前理にて種は同じけれ共所によりて大小高下の有の別而よき事えたる瓜の惡しき事えたる豆の葉といふ様なる訝き事あらんや恐らくは佛法誤て因果の差別を説なるべし是如何々々是を士嫌が答へて是不類の談なり變化の心による木たる事豈心あらんやと云り此心の

不類の談との耳を取て鼻をかむが如く山を舟に乗るに似る不審といふ事也夫をいかにと申に成實論にもいへる様に前世の妄執の今四大を招虛空を圍て假名の身と成前世の業因に仍て法界の五大假和合して五身と成と釋して善惡因果を論ずるは有情の群生心の有者の上にとぞさたずる事なれ誰か非情草木の心なきうへに後世を祈善をなせといふべき故に變化は心による木たる事豈心あらんやといへり變化の品形の替るといふ事也然れば有情非情心有と無との差別を合点すれば今の難問皆のれ申で侍ずや但し石のものいひ花叢會上の樹神の偈の甚深の子細ある事あれん爰にて論ずる事でなし誠に昨日あれは今日有今年あれは來年あり誰か明日の日をつげ來る事勿れ共今日が暮れは明日も有如く現在有は未來有り因有は果なふて叶はぬ道理極るあらひ薩婆多論に曰昔牛呬比丘といふ人の常に牛の呬かむやうに口を動すと云られたるは先世牛の中より生を受られたと申又獨の比丘有假初にも鏡を以て我面を見られしは過去傾城の生れ替りなり木遊尊者の神通を得給へ共常に戯れ踊歩行かれたるは前世猿の中より生れ來ると示されし又佛弟子の中に夜塗分ず眠たる僧あり佛に此緣因を尋ね奉れば千歳の間



辛螺むかての生を請たる者なりとの給ひしをハづかしく思ひ晝夜陶もせず七日の間眼を開て居たりしかば忽ち明盲に成しを耆婆に見せければこれいもべからず病にて潰たらんには薬あれども生たる目には眠りて休むるが食物なるを此數日閉ざれば渴かし殺したる目なり薬り叶はずとてさすかの名醫袖を拂つて去につき其時世尊これを隣み給ひて金色の御手をのべて双眼をなて給へば即時に開晴て明眼にされる事も有生とし生る者三界二十五有の生老病死遷流間隔五道四生形をことにし果報ひとしからるゝ事は皆先業の習氣によれ共一切の凡夫業障ふかくして因果を知らず自ら苦の因を作りて自ら苦の果を受ける蚕の我身をまはり飛蛾の焰に焦るゝたくひ皆自業と自得誰に訴たへん去る歌に

奥山の杉の村立ともすれ己か身よりぞ火を出しける

とも詠嘆功苦海に漂論し多生業火に焼る共

こりもせず浮世の闇に迷ふかな身を思ぬは心なりけり

終に其苦みに飽すかへつて五塵六欲に溺れて恩愛に縛れし龜鶴の契も命の消さるうち

無常のふすまを重ぬるも身軀の破れざる間大梵高靈の闇も火血力の苦を悲しみ阿育の七寶も壽命を買す悉絶ぬれ又三途八難の古巢に歸り犬と生れ鳥となり不淨の肉に樂しむ蒼蠅糞中にまろぶ蛆と變し角をいたゝき毛を被り生々世々の其間四足にてやあらん無足にてやあらん覺にす浮つ沈みつ紅蓮の水八寒に落られ八熱に蒸られ漸々餓鬼に經めぐり當生にさまよい修羅に移り不思議や過去遠々功少しき所縁にひかれぬらん適人間に生を受値かたき佛法に遇寶の山に入なから現世後生をぶらりと暮したらうと明しうやまうべき三寶をも信せず放逸に惡業を工み手を空しうして又三惡道に歸るべき事へ扱も々々淺ましく悲しき事と思ひ給ひて日頃願奉りし念佛題目や夫々の宗旨の方便に取付て此度へせめて少しの善因をまいてなり共生死の家を放れ末來ハ淨殺の臺に至るべしと大願の誓を立偏に後世の道に身命を擲給が肝要て御座る又様々申談じ度事侍れ共へたの法師が辨舌を笑ひ草の種もしや此次御望ならば明晚講談して聞せま

まようとおひり侍る  
善を見て羨は過去の二つ



昨晚大悲經の文の中種の字に付因果の二字を有増し講談致し其次を只今申に付因といひ果といひ善と惡との二つに生れ苦と樂とを身に請さずる者何ぞと穿鑿して見れん皆我一身より作りなす事我心がさせるといふ事逸名々覺ながらよき方への移らす惡きこといへは先進む我人過去の惡業が多く残りて又五道六道に引戻さんと心の鬼が身を放れず日夜付添て少しにても惡念か起れん便を得て善必をさまたげぬ類を以て集る六賊といふ六の盜人めが目と鼻と口と耳と身と意とに入かり美しき物を見れば人の親たる者はあの様なる衣類染物を我子にして着せたり孫めに拵へてとらせたりと罪を作又子持ぬ女はそんじよ其娘子のけふ花見の衣物見れば扱も風流な摸樣當世の染出し帯は何々儘ひな形の内に有たのかと覺る指櫛の結構されれもあの様にして寺參をするならば是程醜く共よく見られん者惜しやほしやと欲をふこさせ扱又一盃なる親父も伊丹瀧の池菰かぶりの樽片荷の辨當旦那殿の早や向へ往てゐるやると久三郎が急しげに通るを見ては何とよい物が行着か無と大事有まいと思ひ其外若い男共の色有女を見るに煩悩たまに行袖の形振にいや心浮され跡をもまたひ摺ちがひ百度も見歸りたるも見

ぐるし殊更坊主の其方願ける程淺ましきはなし是皆眼に彼の色欲の盜人か入替りて其心をうばふより仙人も通を夫なひける具にいひ八十八使見惑有其外聲に耳を聞てなづみ化粧物ごしに形に見ねと氣を動かしかかる穢土をいとひ淨土を欣ふ念佛の音聲をさへ面白きこわねやと後世の心の餘所になりて聲の戀慕をさし鼻に假の物と思ひあがら袂に留し蕪物にも心をときめかし舌に味はひ身にふれ心に縁し口にいふ一日一夜八億四千年々に思ふ事は皆惡道に引れとす媒也邂逅に起る善心も此六塵の盜人に盜み取るゝに仍てよい心早く現て惡しき形にのみ羈れ今宵の講談をも只何となふ聞給ふべけれど中々御法の聞惡ひ事でなし一眼の龜のたとへ大海の針の事は方々に聴聞有事も只今此法問を聞うち成共せめて意の駒に轡をいめ意の猿を繋とめて聞給ひ觀念觀法はならず身に暇なく世路にさへられ親の命日にも寺詣さへならぬ世の中況や聖教に眼を晒す事も暇を得ず然れば聞と云事が一つの樂しみ原より聞法の得益甚深と甚だ深ければ只一詞も佛の教とあらは疎かに聞ぬやうに先心を落し付べし聞といふに三つの品有事法苑殊林是有其内耳を以て聞が三の中には下成と示され然ら何を以て



聞ぞといへば心を以て聞が誠の聞様故に心爰に有されの聞とも聞はず食へども其味ひ  
を知すと儒書にもものべたり莊子にも神を凝して寂に聽といひ前漢書賈山が傳に天下目  
を載て視耳を傾けて聽と有もうつかりと見ぞうつかりとは聞ぬといふ事然併なから惡  
業煩腦の塵に酔ふて聞事碌くに濟す只佛法とあら有難やと計り信じたるがよし萬  
物の理醒すといふの智恵かなければ成ぬと知るべし

一 休 且 那 の 智 恵 を 計 る 事

都に大分限成者大事の吊をなし奉るべき導師は如何成人をか請し奉らんと思案區々成  
けるに其頃名高き智識數多有る中にも紫きの一休和尚に及へあらじ佛事は明日の事な  
れは急ぎ人をと遣へしける折節和尚の庵の塵を拂庭の掃除して坐々少しもなつまぬ御  
僧心やすく量情し給ひけるが何と思しけん頼て淺ましき小遣人に身をやつし手足に煤  
を摺り付腐菝をまどひ藻くすの中より出たる鉢に成果て彼門に立給ひ非人の罾る如く  
御供養の御施行を給はれ御慈悲を下されよと様々に宣ひける主邪見腹を立見苦しきや  
つあれ逐出と下知しけるに下男二三人走出供養明日の事なるに今日來りておめく癖者

と誰と知り知す散々に打着し踏たねしてぞ入にけるいたのしや一休幸き命を漸々助かり  
て無題仕業と思し召紫野へぞ歸り給ふ其日にも成ければ昨日のさまに引替漸に湯浴し  
給ひ衣を振て召れける七装の袈裟を禪ながに引掛金らん交りに取繕ひもどより殊勝に  
見へ給ふ一休御越と有けれの且那大きに悦ひ佛前へ請じけるされ共一休進み給はずい  
やそれ迄の參るまじ愚僧は是に侍らんと礎に成てにをり玉はを且那は悶て是は先何  
事にぬはしますあれいまはしや爰の下の居所なり是非此方へ通らせ給ひと手を引  
立奉れば一休御覽じ然ら此衣に料供を給へるべし愚僧が給へるべき子細をしとて一  
首の狂歌をよみて給ふ

黄檗の三十棒を當られて身にはれ來る蟬の抜から

と詠給へて乞食も愚僧も同じ火と水なれ共昨日の棒をくらい今日の御齋を給はる事偏  
に御衣の色が光る故なり迎ぬき捨てこそかへられける

命を滅す河豚の汁

一休和尚へ常に出入し心安く御意得たる又次郎とて堺の町人有ける或時河豚汁を煮た



いかに飲て殊の外に酔て終に其口の内に死しけるか今この時に申置けるは我世に有し時の死する時は何時の頃ぞやと思ひけれの後世とて願ひ置し事もなしされ共一休和尚へ常に伺公中御物語など受給りし結縁有の引導をも頼奉れかゝる不慮成死を仕けるとき社あるれにも思し召らめ必ずといひ置て終に空く成にけり妻子眷屬あげき悲しみ遺言の通り具に一休和尚へ申上げればいと安き事也扱々不便の仕合せと仰せられける然る所へ早時分にもよく候間御出を仰き奉ると再三人を越けれ一休聞し召彌々我等罷出に及ぬす引導を具に書て遣りすべし誰にても讀て葬よと仰せければ妻子嘆て遺言にて候間平に御出下被度此度の御慈悲と様々にくとぎけれ一休宣ける我等が出れば却而彼がまよひとある也則ち書付遣すべしとて遊ばしける

海中有毒魚名云河豚魚面服白背班人不食此魚

嗚呼痛哉又次郎食之急死矣彼年五十四彼年五十四

合せて珠數一連百八煩腦の絆をふつと截て行度方へつつとゆけ

木曾十七寅の年角のなほこそ添よけれ

と遊ばして遣されける各肝を潰れれとも仰せなれば其如くに行ひける其引導の書たるを其子供秘藏して其家の寶と成又も無黒跡にて今の世代迄所持あるとかや

大名に引導阿の二字

西國の何某身まかりける今はの時一家中を召され我死して後種々の佛事を營むへからす紫野一休禪師を請して引導を頼み申せ是從外に望みなしとて死し玉ふ人々嘆て遺言されば迎急ぎ都へ使者を立一休を頼み奉れば折節居合玉ひて安き事とて彼の使者と打連て下り玉ふ葬禮の日限極しかは此國の何某の引導こそ音に聞けし紫野一休御下向有しと風聞有を國々島々より開程の人足を空にまどふて貴賤群衆し聽聞せんとぞ謙きけり葬禮の義式天には花を降し地には綿をしき言葉に宣かたき結構を盡ければ數萬の見物彼一休の導師を開べけれと押合へしけると也扱玉のこしをかき居ければ一休立出玉ひて龜の前に一黙し玉ふ諸人今やと耳を傾居るに一言も言ひ玉はず天を見て口を開き地を見て口を閉きてさつと引込玉ひは彼大名の御臺公達を始め一門一家中の人々は如何成御事やらんせめては一句を示し玉はれと御衣の袖に把就諸人の見物は音に聞



しとの逢しと興をさましける一休是非なく一首の歌を讀て人々に渡し都をさして歸り玉ふを開見れり

我いた、後世の教を知らぬなり阿囀の二字の有に任て

と侍り玉ひは皆人は是を聞て天晴成貴僧あともうんともいわれざる御示しかなと黙してかんじあへりし也

年の始の懶骸

元三の歳の始月の始日の始として一天四海の人々賢きも愚なるも愁あるも愁なきも貴も賤きも祝ひかざる事替る事なしとみゆとぞ白散には濁酒なり共鬢につけみか々み居のるとて尻糞あり共つきて夫々の祝ませる有様の誠は昨日も替たるにはあらねとも空の氣色も長閑やかに霞み渡り大路のさまも松立渡し家に長き代の例といふ七五三繩を引廻し昨夜は過るまで人の門叩きて何事にかあらん悉しく足を空にまどふが只一夜明ぬれに引替心も緩々と又とも晦日の來るべき心もなくて野邊の小松に千代萬世を祝ひそめ何時死ぬべき者となしに萬の事忌忍朝の露に名利を貪夕日に子孫を愛し蟻か

茶臼をめくるが如く同じ事をくりくりと五百八十年七廻と祝て世を秋風の心へ露塵程もなき人心を一休可笑く思召し誠にならか成かな朝顔の日影待間をも盛久しき花と詠め蜻蛉の青天に羽を振ひて樂む間もなき世の中にくそにはへぬる正月詞や只時の間の烟ともなりなむと打みるより思はるゝ出物見せん人々よと塔原へ行て鬮を拾ひ來り竹の先に貫頭は正月元日の早天に落中の家々の間口へ如狐々々と彼鬮を差出御用心々々々として歩行き給ふ衆人いまはしく門閉込て居けるより今に正月三日は門戸を鎖しける也或人一休の有様見參らせ御用心とハ尤至極なり祝ても終にハ皆人如是され共世の習ひにてかく祝嬉ふに其むくつけなき鬮を家々へ出さるゝ事違ひ成らずやと申けれはさればよ我も祝ひて此鬮を各々に見するなり目出度といふ事如何心得けるぞや昔天照に御神岩戸を開き給ひしより事起るといへ共此鬮より外に目出度ものはなしとて讀る

にくげなき此鬮穴賢とめでたく可祝是よりハあし

と侍り給ひ見よや人々目出たる穴のみ残りしをば目出度といふ成るぞ皆人ごとくは斯



どいゝるらめと昨日も過し心驚ひに今日を暮しつ明日香川の淵瀬常ならぬ遊ハ目に見ぬかしに風音にも驚かぬ人々に用心せよと思ふ也只人の是に成ねハ目出度事ハ何もなしと宣へハ諸人は是を聞いて偕もかしこき和尚とて拜まぬ人はなかりけし

百性の訴状狂歌の威徳

一休和尚平安のなき木といふ所に折々ハハしましける其邊の村々ハ近衛殿の預地にて有しが左近の尉といひし家老百性ひた物せぶり取けるに百性共是を嘆きて如何せんぞ齋めきめへる其中老人申けるは如何に百性のあたり強しとても武家とハ遙違ふべし御公家の事あれば訴申て見んとて訴状を工ける所へ折節一休鉢を開き出給ふに百性共一休を請入右の咄しを述訴状を御替被下よと頼けれハ安き事也長々敷状までも不可入是を持て近衛殿へ捧よとて歌よみて遣せ給ふ

世の中ハ月江村雲花に風近衛殿には老近く也けり

とよみて是を書遣されければ村々の百性かゝる事にてハ免多く玉はる事思もよらそと申けれハ一休聞し召此歌のみ捧よと仰せられて歸り玉ふ各々せんぞしけれ共素より士

の附たる男其なれば一筆の讀書事ならず是非なく彼の歌を持訴認まける近衛殿御覽おて是は如何成人のまけると仰せ出されける百性申けるは焚水の一休老御作にて候と申上る其放廣物あらでかかる事いはん人は今の世に覺はずと興し給ひて多くの免を被下ける也

開眼は關の地藏

關の地藏始めて作りし時所の人々寄合此開眼をいにか成御僧にか頼むべしと皆口々に評定しけるに其中に一人申けるは我今度都一見仕りし時京童のいひしは今の世には紫野の一体にまさる僧あらじと風聞あるいざや一休和尚を請すべしと世の常の僧頼まんよりハと各談合極り然るべしと都紫野へぞ遣しける折節一休寺に御座有ける關の者共對面して有のよしを委しく申上る一休聞給ひ幸關東修行にいづるなれば立寄開眼して得させんと宣ふ里人祝ひ約束して歸り一休こそ御下り也とて上を下へとて返しなけれと道の塵を取あたきを棒に付き踵を盆のくばにつけて御むかひに出ける一休只一人窓々と來り給ふ皆々悦び先御禮を申せば一休彼の地藏はと宣へばさしも結構成地



蔽を造り供物を備へ香花を手向しやうごん怠す見にける諸開眼して給はれとて一休を  
 請じていか成る事か有やらんと我も我もとのびあがり押合矮ぎ合などして見る所に一  
 休づかゝと走り寄彼の地藏の頭から小便をまかけ給ふ事廬山の灘の如し種々の供物  
 も浮になり流るゝばかりしかけて開眼は是迄也とて束をさして急かれける所の人々是  
 をみてあら勿弊な御事や狂がる瘦法師の物狂を連來りかゝる大事の菩薩に小便まか  
 けさせたる事の服立さよ彼法師めのがすなど我も我もとのびあがりみして追掛けるか尼入道  
 は寄合て扱も勿弊なや一休坊主がまける事はと罵て清水を汲ひ來りて彼地藏にすゝ  
 掛て小便を洗ひ落して又供物をし直しゆるし玉へと禮を成けるが彼の追かけゝる若者  
 も道にたふれ彼の小便を洗ひし者共も慥き振ひ狂亂して口走りけるは天下老和尚一休  
 の開眼さされしを何進洗落しけるぞと罵りて皆々物に狂しかば妻子眷屬驚きてやれ  
 彼の一休和尚を追かけけるに桑名の渡舟に乗給ふ所にて追付けるが彼事段々くはしく  
 申けれ夫の不便の事なれ共從是歸るに不及とて布の下帯八百年ばかりにも成らんと  
 覺しきを取り出し是にて地藏の首を縊ててくゝし忽病の治さべしと宣へは彼の者共勿弊

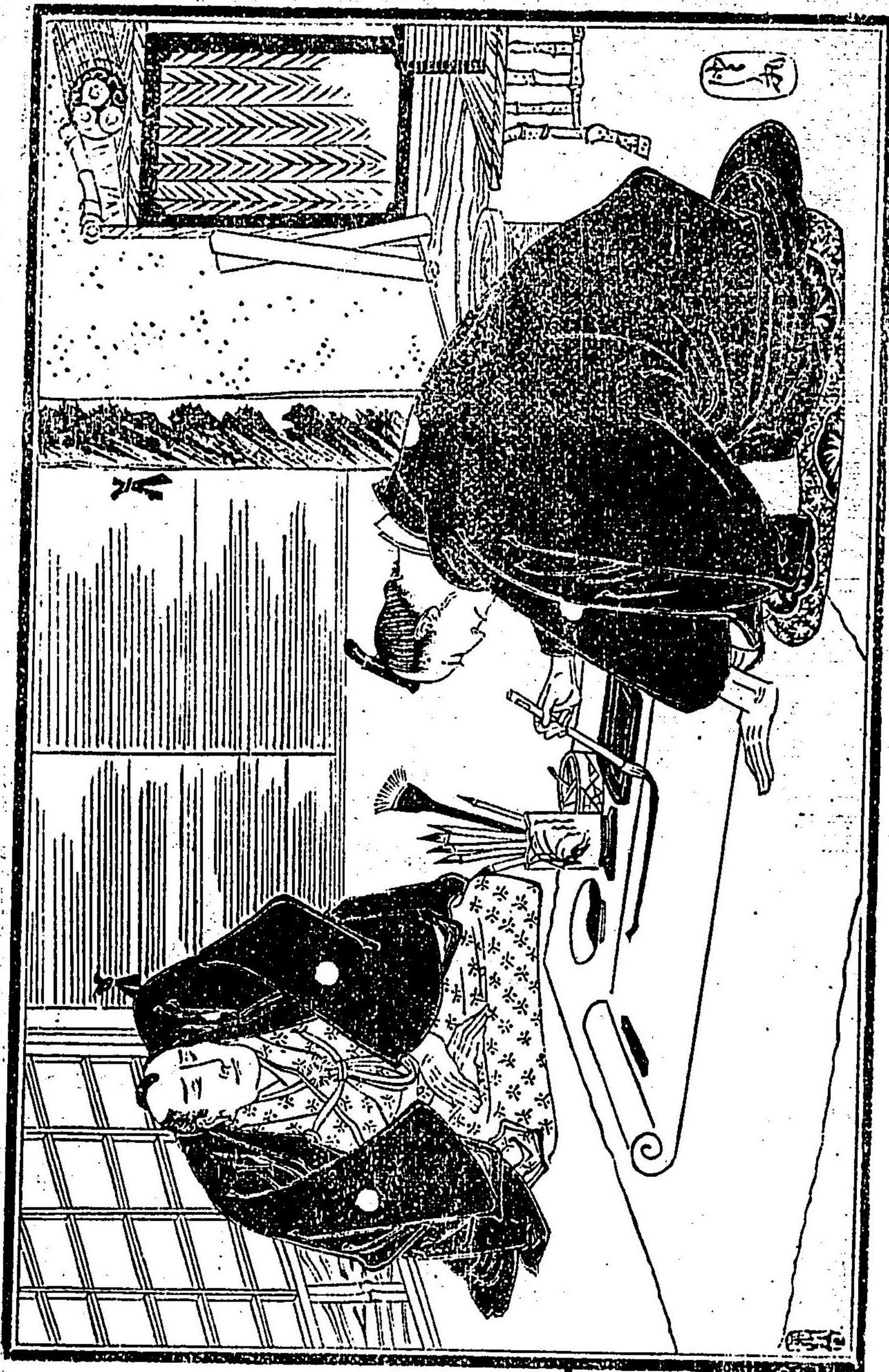
なしと思へ共前のきとくに恐れて恐怖御受申て急ぎ關に歸りければ一休の關東へ急  
 き玉ふ扱里人は歸り仰の如く恐怖地藏の首に彼古下帯をまどふと齋く皆々物の狂退  
 しかば扱も名譽の御事也とて其下帯をはづさざりけるに一休御戻の時又立寄玉ひて彼  
 首の下帯をはづして鐘の緒に掛て都へ上られける夫よりして今の世の佛神のかねの緒  
 を下帯の丈にくらべ六尺に定けるとも不思議成開眼ぞかし

一 休 山 伏 行 方 くらべ

一休和尚塚へ御下りの時淀の川瀬舟に乗り玉ひけるに其舟の乗合に山伏ありけるが御  
 僧の何宗ぞと問一休我は禪宗なりと答られければ禪宗には我ら如きのきとくはあらん  
 といひける一休申さるゝ様いかにもきとく多し其方にも何にてもきとくの有は見え給  
 へと仰せければさあらば我法力にて此舟の艦に不動を祈り出して御見に掛んと一にて  
 矜迦羅二に制吒迦を始め接にもんで祈ければ皆乗合の者共目と目を見合せたる所に  
 めんの如く船の艦に不動の像火焰を放てあらはれたり其時山伏ちうめんを作りて各  
 々拜み給ひたるかと申せば何れも不思議の思ひをなしけれ共一休は更にふしぎになき



休なり山伏せいでいかば禪僧かゝるきどくは如何思はれしとせぐり掛けれのいや我ら  
 がきどくはにの身より水を出してあの火焰を放不動を消して見せん間随分祈りてけさし  
 玉ふなと彼の不動のくわゑんに小便をまかけ玉へは火焰の其まゝ消て山伏の法力つき  
 けれは道中の人々一休を拜して奇異の思ひをなしけるとあり扱舟よりあがりて陸地を  
 打逆行所に向より大きな犬山川にもひく計に吠かゝれば山伏申様何と御坊最前の  
 行くらべに値たり共あのおそろしき犬のいかりを止させて是へよす法力を顯のさんか  
 御僧のいかにと申せば一休聞召是はいと安き事なり先其方祈りて見玉ひ若し來らざる  
 時の愚僧に任せ給ひと答給ふ山伏いらたかの赤木の數珠散落散落と押もみ一祈こそは  
 祈りける一切犬の吠止す手元へ來るねんなかりける縦さま横さまかけて十文字犬の咽  
 喉とめよあびらうんけんそのかといへ共頻つて犬は吠止す一休可笑く思召そこのぎ玉  
 ひ是しきの事にあびらもうんけんそわかも入事にてあらず某犬のいかりを止させ忽と  
 へ來らせんと懷中より晝飯の燗食を取出し彼の犬に一目見せ胡盧くくと呼び給  
 ひばさしも怒りし犬あれ共燒飯一自見しよりくんくんと尾を振て來りける山伏も肝を







消し替人聞て扱も各別成心得がなとかんに絶てぞ別れ危

唐僧醉眠の一句返答

或僧一休の活機成事を聞傳ていか程成道とくが有迎大徳寺へ行て尋ければ折節一休は門前の酒屋の方へ行酒にたべ酔前後もえらず臥給ふ所へ小僧尋來り只今唐僧とかや見はしはや御歸寺と起けれ共御目覺ずおはせしに酒屋の亭主立出御醉めん心よく候か申せは扱もよきさきみやとて一首よみ給ふ

極樂をいつくの程と思ひしに杉葉立たる又六か門

と遊ばしとらせ玉へば亭主悅ける所へ又小僧來て先に申せし僧の待かねたはとしといへ共答す又打かへし高いびきふんぞりかへりて寐給ひしかば小僧歸りて何程起しても起給はそと申せの好々其寐いりて思ひよらぬ時引起して一門掛たらば心指彌々知れ侍るべしと彼唐僧一休の臥し給ふ所へ來り差足して行枕邊へどうと座し何共いわず引ずり起して目もいまた覺給はざるに一起聲を揚て曰來意の祖師の話に俗語ありやと問給へば其息もつきあへぬに一休大音に汝が俗よと答て突とかし給へば彼大禪師も舌根齧

一 休 笑 話



振へて立れける扱も活祖師や聞しに十倍せり汝が俗よとは即時に出ましき答話也とか  
んき肝にめいじ歸り給ひけると也

一合点一生の徳身

譬はかな盤なる者人に何を商まてよからんと問しに迎も聲で合点が幾まじと思ひ耳  
を教て兎角びく次第にて何しても利有といへるを此盤が心に扱へ耳に似たる物を商と  
いふ事と思ひ木ふしを大分買込置がるに折ふし諸方にきれて此者大きに利徳を得て後  
は長者となれり是は人の言葉真直に受て疑す誠の心よりなせる故に利を得たり然れハ  
佛法の一句を聞ても少しも疑す譬ハ愚癡にして法の深理は合点也かす共只有難やと思  
ふ心か則成佛の始めとなる爰を源空上人も一定と思へは一定と仰せられし安心決定の  
所なり歌に

聞時は實にもと思ふ法の道歸る時に忘れこそすれ

と詠る聞た一座ぞり盤にならす置て立人ばかり也耳ハ地獄耳がよし淨土双六にもはう  
ぢん地獄へ一度落ては二度出る事か無故に地獄耳といふ也龍耳は水か止らね共水の中

に浸して置内ハ一ハ有様に此一座に居て聞内は水の有如く聽聞の座を立時溜ると思  
ふ法の水は皆もりて車も無故龍耳といふあり人と生れて覺の強きと弱と利根鈍根上  
根下根ハ有習なれハ是非覺せずとも苦るしからず暫時も法問を保者ハ我則觀喜す諸佛  
も亦然なりと説給ひぬれハ刹那片時の間にても有難御縁に依て佛善の教を承はるは大  
切なる事と信心を起し一遍の後生を底心より申が專一なり譬ハ火といふ物の重寶  
成徳有て大寒小寒の氷面川渡れは手足の切る、如くつめたく五躰縮あがる程の朝夕に  
滑切くべて爰れハ其儘温まり其外食物を煮金物を鑠して自由自在につかふ能あれども  
火事といふ時は盗人よりこの家の五十ハ且時の間に灰となし人も焼殺はすんとこわ  
いハやな物也彼五躰を温め物を煮焚所の火と災の火とハ別々かと思ひば卒度も火に違  
無全く同し大火也只用様に依て善惡の各別ハ一つの心用ひやうにてよくも悪くも成道  
理明白なれハ皆我心を悪くもつなと是に譬て仰せ置れた或は或又生れ子を金銀取て養  
ひ一二ヶ月育し後は我子に乳をあたへ養子はいつしかかつる殺せし科あらハれ遂に及  
にかかりしも惡ひ心の用ひやう故なり現在かくの如く呵責せられたるハ其儘の地獄然



も早くめぐる因果ろかし昔の皿今の針程の事も棒程にむくふの目に見わた通り殊更此殺生戒をば大乘門の時ハじめにをくハ佛ハ大慈大悲のかたまりなれ共物の命を取を別て戒め給ひしなり殺生につめて様々是有程に三世の報ひ様を具に咄談をて聞せませう

因果歴然修羅の二つ

過去の因を知らんと欲せば現在の果を見よ未來の果を知らんと欲せば現在の因を見よといふを畧して現在の果を見て過去未來を知るといへり因果といふは遠事でないし只今の身の上にて皆知るゝ事ぞかし經文多き中に大集經の十來といふ事が有其中に命長者ハ慈悲の中より來り命短き者は殺生の中より來る未來も亦然なり今此悲しき浮身となりたるハ既に造去の業因に依て四苦八苦善に付悪きに付叶はぬ世を歎く近くは成敗に行はれて骸を西龍獄の住居を致を見玉へ其中に重き輕きが有て何れたろかはなければ共人を殺たる者の助かるはなし但し侍の戰場に向て凶徒を知りぞけ盜賊を討て國を治め義を立るをハ佛法には一殺多生とも慈悲の殺生共申侍る其と一つ事では無梵網經に説が如く一切衆生の皆これ累世の六親眷屬たゞ頭を改たぬ面を換るに依て各あいに知らず

と有て六道輪廻の間生々世々生換り死換り或時の父とあり母となり親となり伯父となり従弟となり縁者となり親となり舅姑となり師匠となり弟子となり或ハ侍と生れ百姓と生れ工となり商人となり夫となり妻となりて形は替り所ハ隔つれ共たがひに恩愛の放るゝ時あかりしを凡夫は淺ましく隔生即忘とて胎内より生れ出る時の苦みに過去の有様をを忘れて何成ものか今人に生れ來りしや何としたる因縁に依て親子と成たるやら覺にも知らず少しの利欲に目がくれてハ人を殺え突裂て又夫に敵を求め切も有切らるゝも有まづ未來迄は遠き事或は口論して人を切たり打たりえたる事ハ聞及ばれん其如く現世に修羅道のせめを受る事は扱も淺ましく悲しき事てあらすや扱未來の事は諸經に多く説て曰殺生の罪よく衆生をして地獄餓鬼畜生に落をもし人中に生るれば二種の果報を得一ハ短命二に多病楞加經には殺生の者ハ號叫地獄に墮ると説因果經には衆生を切殺す者死刀三劔樹地獄の内に墮され血に咽せてあらゆるくるしみを受る事其數かぞうるにつくされず

壹寸の虫に五分の魂



四十六

鵜鷹の逍遙を好む者は死して鉄鑿地獄の中に墮る鵜を殺し卵を煮焼するものは灰河地獄に沈み鐵錫獄地に墮て豆を煮る如く尖石地獄にいつて俛に熟鐵の上に臥其背中に尖石を礮石の中より猛火熾進り重して熱き事いふばかりなく堪難皆是殺生の果因より此身を受る扱ハ鳥類肉類を殺すも同じ凡血をふくみ氣を受る者皆是靈地ありせしらざるもの、ほうづき迄悉く死を恐るゝ事を知つて人足音を聞て蚯蚓もちやつと聲を止め蚤の様なる小さき虫も人に取れじと飛ばはり脚なども空に家を作と打落せば死んだ貌して手足を締めすくみざる氣色命を大ににする故なり大唐の交割といふ國の實檢もする人貞觀年中この始めつかた勤めを止て樂々と隱居して居られしか此人自躰から鷹狩か好にてひたと犬を殺して四五十の鷹の餌にかわれしが或時ひよつと風門もとよりつかみ立る様に寒く成大熱がさすやら頭痛がしてくるやら正躰もなく打ふしなやみ醫術も及ばざりしに或夜人沈まりて後班と赤き白き犬五疋來りて兎角其方が命を取ねは成ぬと五躰に取付て責ける時此人思ひ當りて汝を殺せし者は家來の通達が科也我ハ殺さずといハハ犬の曰通達ハそなたの指圖にて殺せり餘の人の仕業に非ず我らずもに他の食

十四七

を盗ず門番のあでかいを喰て命をつなく何の誤り有て殺し給ふぞ此詞につまりて然ハ汝らが爲に後世を吊らはんといふに四つの犬合点せしに一つの白犬かぶりを振て口我既に罪無に殺さるるのみならず未死ざるに生ながら肉を割れし苦痛其時の一念心肝にそみ忘すれずと承引せず爰を四つの犬扱ていふは此人の命を今取たり共我々が命かへる事に非ず思ハ追善菩提を祈り給はらハ誠に苦しみを遁る善根ならずやと理をつくしていふに心を柔げぬるに此人蘇生たる心地して恐れ遁れぬれ共手足叶はず夫より約束の通り犬の爲に追福きたるに此病忽ち平愈したる事も有其外巢を傾け宿鳥を射雞を害す事儒經尤もいましむ況や佛道の大慈悲門に於て戒めざらんや空をかける翼地を走る獸水に住鱗の子を憐むの心入より功成事子持鯨といふを追掛て三尺程ある鎗の様成物にて突時は母成鯨子の鯨の背中に負重なつて我死ぬる迄は突れて終に子を懷きなから釣鐘の如くなる聲を上て鳴て放れず聞に不便ある事いふ斗りなし是畜類の子を思ひ其身が死ぬる逆も子をいいとふ成に人間に生を受ながら已か子を尻の下に敷或は殺したるは世話にいふ熱火子にいらふとい此類の事なり然れば人より畜生はまされり



親子を知らぬ魚鳥の姿

楞伽經に曰く佛衆生を見るに六道に輪廻し同く生死に有て互に相喰くらふ親しき者に非ずといふ事なしと説れて先祖の祖父祖母いか成罪業に依て今嗣に生れ伯父坊か鯨に成て來たやら兄弟が海老雜魚に成て着にまらるゝやら凡夫の眼からい知ぬ事なり出家なる者の肉食をたつハ一つハ是のいわれ又不淨成る者と殺生にも當る故に喰ぬどの事也必味わひにふけて彼魚此肉を殺してやつたらばと思ふ心の起るまい物でなし此故に制むると思ふべし扱今の經文の如く六道輪廻の中は生とし生ける物親しき物で無物でなしといふは彼殷の紂王西伯をさらへて密に西伯が子を殺して身をこまかに切碎き煎て送りしに西伯思はず是を喰て我子といふ事を知す紂王大きに潮り笑て唯か西伯を聖人といふ我子を喰つて知らざる事と彌惡逆盛也と史記の文に有是を合点すれハ此西伯ハ聖人にて子ハ生を替め肉をさへ親しき物と知らず各々は愚智の凡夫又喰鳥類肉類も生をかへたる者なれば正身の母親か生れ替て來り共御存知あるまじ宇治拾遺にも鱈子に生れ替て來る人も有といふ事をかけり近き頃近江國に鮒に成て來る人も有紀伊

の國の人の親たる者那智の犬に生れたる咄其外假名双紙にも是らの証據多き事唐土の書など引て申さは是も一日や二日にて申盡されぬ程澤山に有事也可様に申せば向後常住精進をなされよ魚類でも喰事ならぬやうに申と思し召さんがさにてなし是ハ只經文の有増を申肴賣か持て參るは死んだ者なれば此方の殺生には成らず去ながら因縁は遁れぬ程に只自手に懸て網をはり釣をたれ科無者を殺し給ふは御無用此分ちを能々合点して成る事ならば味ひ事して人にも振舞まぬるがよし併し出家たる者の徳利に鱈を入たるたくひいか成言分も存せず斯申愚僧も知らず惣して畜生の數多なる事五行大義といふ文に有ハ羽のはへたる物三百六十其中に頭は鳳凰毛の生たる物三百六十中に騏驎かつかさなり鱗の有物三百六十龍がつかさなす甲の有物三百六十龜が司裸ある者三百六十人間か頭なり又或經に畜生不同あれ共約て三種有魚鳥獸也此一々に無量あり魚に六千四百種鳥に四千五百種獸に二千四百種有と説正法念經には種數不同して四十億有共いふ或は三十四億の生物ありと説り其大き成食をいはゞ金翅鳥尾頭の間長き事八ヤ由旬兩の翅の横三百六十萬里に博其時ハ垂天の雲の如しと書跋難陀龍王は須彌山



をまどふ事七廻摩訶大魚は長三百由旬七百由旬是蓮子に書鯢といふ魚也少き物の蚤か蚊なり虱なり人の身の毛の中に住八萬の戸虫扱其外へ山に住川に住海に住里に住土の中に住空に住蓋を小虫ねらへは口繩又蓋をふくし又なめくじり猪の鹿に取られ鹿又狩人に打れ強き者の弱きを伏し短者の長きに巻れ吞たり吞まれたり喰たり喰れたり突合差合かみあひて怒りに怒りを重苦しみに苦しみを増幾度か死し幾度か生れ形を替て苦惱を受ける者は何を現世の過去の業因未來又現在の惡心より惡所に生れ我と我身を責る所よくふん別有て少し成共惡心を持まじ人事いへじ物の命を取るまじ何の宗に取付て成共未來を助るべしと底眞實より信心を催し是非此度は此五道六道の火宅を遁るやう偏に佛方經力を頼奉ると一筋に思ひ取て如來の大慈大悲の絆にすがり奉らは漸やく億劫にも遇難身取放と亦元の三途にかへる程に日夜心得有事也只安心決定か一大事の所必ず忘給まふな又殺生につめて鉄輪地獄の尿糞地獄の野狐の身受る事何の彼の酢の蒟蒻の午房大根のと申義數多有共先講談は是にて止めませう

土佐が掛繪に讀の事

或人繪書土佐の守に内々繪を一幅頼けれ共ついに書て遣さず彼人心せきて直に行て申されければ折節太鼓打にあらねとも晝寝をして居けり彼仁常々親しく語る中あれば引ばり起し頼たりけれ共目現す譬一夜寝す其晩に書てまゐらせんとて起す然れ共又晩といは、明日香川の淵瀬心替りもやせん世の中平にといふに是非無筆を取くと廻して刷毛おつ取さつと書て是々迎起りけり望み達ぬと其晝を取てかへりひねくり廻して見れ共何共晝無水を書て其中に一筆くるくるとしたる者有更に見分られず餘に合点行かされへ土佐が方へ持せつかへし何成ると問共我らも知すと云斯る繪を持て何かせん引破らんと思共三國一出來たり兎やせん角や有まをと思ひけるが否々一休和尚に讀を乞いて掛物にせん者と急ぎ大徳寺へ走り行和尚に申上けるに此繪土佐に書せ侍れ共さらば此水の中知ずいか、御覽と申けれはされは何共見分難し贅を望みならば書てとらせんと仰せける悉なしとて讀を乞一休其晝に讀し給ふに

水中に物あり其一物を問へし書し晝工も知らず持主も知らず讀する我は猶知らずと遊ばしける見る人聞人扱も眞直成御心はせや無二にて三國一の掛物成べしといひし



が今に於て其掛物只人の手にはあらずとかや  
羅漢の名も頓智の返答

去寺に五百羅漢を作りて堂供養まけれハ貴賤群衆の參詣有けり法事止て後其寺の僧  
羅漢の前に香花など取て居けるにこびたる男二三人羅漢見物し彼の僧に問けるは此五  
百羅漢に名こそははずらん御坊は定て御存知有らん承 へりたしと申ける此坊主三尊  
の外は一人も名を知らず何共物をいはずして方丈へ逃入ける折節一休其寺に居給ひ何  
事成と問ひ玉への云々と申さる、一休聞し召し入らさる俗のどがめ事問ふて藝にも成  
らさると誰か覺へ侍らん我も知らね共出いふて聞せし迎羅漢堂へ進み出此方へ物  
申さん羅漢達の名を御望みかと仰せられければ恐なから承り度しさらは一問ひ給へ  
先真中成は釋迦无尼左成は迦葉右成ハ阿難扱次なるはと問ひは南無沙淡其次はといへ  
ばすぎやとや其次はと問へばあらち一知り給へね共蓮花沙にて答給ふ五百羅漢ハ  
扱置百貫羅漢を問ふ共何かハ結び給へん彼俗悉く問て扱もよき御覺かなと申せのさも  
なし古は一卷はかり空に覺候得者と仰せられければ笑て皆歸りけると也時に取ての頓

作なる御心入と皆人かんじける問て用に立ぬ覺てても用に立ぬ事をい言ざるに増る目  
出度まよしなき事をすこびて問ひあやすられけるすべて羅漢のみにも有べからず

諸宗佛繪に讀

一休和尚は天下の活僧成しとて諸宗抑並貴み何れの上人長老もあがめ給はずと云事な  
し或時一休黒谷へ參詣有しに寺中の人々一休を見奉り今の世の活佛と人毎にいへるは  
此禪士也よき折柄なれいざや當寺に侍る善導法然の畫像に讀を頼み申彼の念佛無間  
と仰ける日蓮宗に見せて新宗の佛心宗だに此方の祖帥を尊とみ給ふと高言にせばやか  
るき僧なれば定めて讀し給ふべしと申ける各々此義然るべしと相識して頓て一休を方  
丈へ請し申件の畫像を取出し讀を頼み奉るよし申ければあんの如く安き事なりと宣ふ  
則視と畫像を御前に出しけれハ散落りと開き一覽有筆を取給ふ先善導大師に讀して曰  
未法出世名善導一則是彌陀化身也濁世未代導惡人一切衆生  
易往生  
法然上人に



傳聞法然活如來安座蓮花上品臺尼入道同愚痴輩一枚起證  
最奇哉

五十四

と即時に遊ばしければ扱こそ逆各大きに悦び侍りて此兩佛に淨土宗としてかく讚を致さば家の事なれの手ほめにしたる逆又日蓮宗が嘲るべきにかゝる嬉しき事社なけれど彼讚を日蓮宗に見せて大きに威言をそ申ける其頃殊に日蓮宗と淨土宗と仲悪く犬の狐が如くし牛突眼を怒らかしける日蓮宗彼讚を見て大に立服一休を妬み惡みけるが其内に一人申けるハ否々一休の御心は物に限無くすなほ成御事也いさや日蓮大上人の像をか、せ讚を乞て見んぬれ程のほうびは有べしと申けれハ尤も然べしとて急ぎふためき書を書せ頼て一休へ持参り讚を頼むよし素より輕き御僧なれハ安き事なりと宣ひ彼書を開き御覽をけるが此繪ハ扱も少さく書て薄黄なる衣を着けるよと笑ひ給ひハ人々申けるハさん候いかにも結構に大きに書せ度存候得共先日淨土宗法然の讚をしまん申候故口借く候て取物も取敢先ちくり氣に書せ参り候急き讚してたべと申せば心得し逆元の法然の讚を所申直して

傳聞日蓮活如來香座則是妙法臺尼入道同愚痴輩一遍題目  
殊勝哉

となされ其與に

坊主坊主小坊主まめの粉にぬり坊主

と遊ハし、頃永觀堂の住持黒谷の讚のよしを聞てよき寺のかうかつ也と浦山敷思し召か程輕き御僧成に何にかな此方にも讚を頼み申さん迎先一山の人々を呼寄談合せられけれハ其中に一人申けるハ何々と申迄も有まし先宗の祖師あれは當寺に傳る半金色の善導大師の畫像に讚を頼まれよと申せば各々申様實げに是ハ當寺の重物なれば是に増たる物有まさらば其方便僧に成給へと彼金色の善導大師の畫像を持せ一休へ参り彼僧一休に對面し申けるハ黒谷の讚のよし承り餘り浦山敷候ひて是迄参りて候あはれ此方の善導にも讚を遊ばしてたべと申せば夫こそ安き御用とて彼繪を開き御覽有立なから一筆さらさらと書給ひ元の如く認め彼の使僧に渡さるゝ忝なしとて謹んでいたゞき急きやうかん堂に歸り然々の由申ければ扱も輕き御僧かな本望は解たり先一山を呼寄

五十五





知恵に罫絆し女の徒の事



體を拜見せばやとて頓山人を廻しければ名々悦ひ來り扱彼畫像を方丈に掛拜見やけれ  
の如何にも太文字に歌一首有

黒からん衣の裾の黄に成は善導大師のこをたるらん

と遊はしければ皆人どつと笑ひ興をさます人もありかんに堪たる人も有しが今の世迄  
傳て天下に一幅の名物なりけるとや

堅田の浦魚釣の事

一休堅田の浦にみはせし時海端へ出給ひて毎日釣を垂て魚を取服し給ふを御弟子兄弟  
の僧達あざされて是は不律成仕合也連和尚を一間所へ呼入口々に異見しければ一休の曰  
各々道は學文をするとして何事をし給ふや我の古の祖師のまねするを禪宗の學問と心得  
たり然れば益無事の仕らずいで古の例を知らずは見せん連元より畫の奇容也觀子  
の海老を釣給ひて喰し所を在々と繪に書一首の歌をかゝれける

古の賢き祖師の觀を釣し我はあはうて魚を釣てくふ

と遊ひして彼僧達に差付さあらぬ振にて居られける皆々彼の繪をみて扱も奇容なる畫

也見事あるかなの誓ふりやと感じけるが其中に老僧あざ笑ひて古の祖師觀を御釣有て  
貴僧の若き身に於て其魚釣參りし事鶴の眞似して鳥のむといひしたぐひ也扱貴僧の此觀  
子和尙の海老釣りに參りし御心根をしりし召けるか中々及なき事やと思ひければ一休  
少しも厭ず扱々貴僧は愚成心哉觀子の海老を食せし心根合点參るまじ夫人は若きにも  
寄らず老たるにも寄らず道に於ては老若は有まし老たるが悟道せし門外の犬も悟道した  
るや毛も扱端たゝすにじり歩行又若き連悟道せまじきや世尊は三十成道と承我らが達  
広大師の古を承るに或時般若陀羅尊者の來り給ひて光明輝きたる玉を捧げ三人の皇子  
に見せ給ひ心を試さんとて各々此玉を寶とし給はんやと問ひしに御兄二人は此壁にま  
さる寶は又有じと宣ひけるに達広大師の七才にて一の乙皇子なりけれ共此玉は世寶に  
て寶にして寶にあらず知光の玉こそ又なき寶也とて彼珠を投打給ひければ尊者驚きか  
ゝる幼稚き身にして不思議成人かなとて則御名を達磨と附られける初ハ菩提多羅と申  
せしとかや達磨とは萬の事に達し通して磨立たるやうハ人成との心とかや然れば悟道  
の老若には拘わらず連一休手を拍彼老僧を笑ひ給ひの老僧も人中でこみ付られ赤面し



中さるゝの體に任て如何に口かして共心はさもなき者よ實正觀子の海老参りし心  
ねを知り給ふか一休答曰中々存たり老僧中さるゝは各々いかに思し召夫禪宗の以心傳  
心也いかて觀子の御心が知るべき觀子にならずは知り難しと淺笑中されしかは各々尤  
に觀子の御心は凡人の知難き事也觀子にあらではいかで知らんや一休觀子になりて御  
隨ぜしかと口々に笑ひける一休聞し召扱々愚ある事を宣ふ物かな我の觀子に成ね共觀  
子の心根を能知たるとの給へば皆々それの無利也と申けれの先聞玉へ人々よ然の各は  
此一休ねなりまれば一休が觀子の心を知たる心根を得知り給まじとて笑ひ給へば各藤  
咲門にてにげられける

大内灯籠の狂詩

一休和尚の時代迄方々寺々より七月十四日に大内元灯籠を捧げる大徳寺にも開山大  
灯籠師より故有て捧しかば後後逸例に成て止難くぞ有ける一休こむづかしく覺しげん  
時大裏へ灯籠を上る連狂詩を一首綴りて灯籠に相添て捧給ひける  
性靈 今日 出來 迎 雨露 直 供 萬 葉 柵 挑 得 灯 明 天 上 月 松 風 流 水

讀經聲

と遊はしけれの朝廷御詠覽まままして誠に一休の詩成者を用無灯籠を求ける也重て捧  
る事有べからずと抑せ出されけると也世の人は是を聞て扱も扱も名僧かなかゝる御心さ  
しにての定て御寺に性靈祭はあるまじ若有ばさこそ替たる事にてや有べしいざや人  
々一休の御寺へ参りて見物し未代の語句に成すべしと四五人連にて参て一休の御眼に  
懸り此間禁裏へ捧給ひし灯籠の詩洛中にて彼是沙汰仕る定てかゝる御志差にては性靈  
祭も遊ばし申まじくと問ひやいや我等は三界の衆生に思ふ故に有縁無縁のあづきを  
祭て種々の物を手向くる故廣大無邊成靈性祭仕て候と仰られければ皆人あんに相違し  
て此御寺に見へ申さす候が何方に御祭候ぞと尋る是より四五町わきを借りて候と仰せ  
らる人々不審なし迎もの御事見物仕度候御人添られ下され度候へと申ける奇特成心さ  
しをいひ給ふ方々人迄もなし我同道し参らん水向し給へと誠しやかに仰せられける皆  
々悦び御跡に付て行みれば東河原へ連來り是々見給ひとて兩方の御手を緋給ふ皆々こ  
ゝもとにて候ふとよろよろして尋ぬる一休聞し召見給へとくるくと舞手を開給へ共



皆合点せざりける各々は見物の成まじきを言て聞かすべし耳あか取てお聞あれと仰らるれば皆人あきれて立すはり聞に一休子細らしく一調子を上げて曰

山城の瓜や茄子を其まゝに手向になれや賀茂川の水

聞給ひたるか何と大き成性靈棚にては無かと宣ふ皆人興さめ扱も扱もいやといわれぬ仰せ也迎かん絶てたのが家に歸りける

女の死骸賀茂川へ流す事

去有徳人の奥方相果られける今はの時一門子供を呼寄せ言置けるハ我此年迄佛共法共知らずして世を去ぬ殊に女は罪深きよし末の世いと心もとあし聞及ひし紫野一休は今代の達摩殿とやらん云成間我ハ引導をは頼み奉りて得させよと念頭にいひ置し終に死けり祭主泣々一休へ参り此よしかくと申上れば其年頃迄佛共法共知ずば大方の事にてハ浮み難し去あから我一句を授て救ふべき也水葬にせん間鴨川邊へ連行とて其まゝ座を立打連て川の邊に成しかば其死人を出せよとて一休彼の死人の首に繩を付引下て川岸に立て宣はく

川舟をどめて逢瀬の浪枕浮世の夢を見ならハじの驚かぬ身のはかなさよ

逆川へさんぶと投拂てかへせ玉ひける妻や子供驚て和尚は氣も狂し給ふか今の一句は江口を唄給ふ也かゝる事にては浮び難しと彼死骸を引上或寺の上人に引導頼念頭に納めて歸りける其夜より彼夫も子供も散々わなゝふるひ夢見けるは我は一休の引導にて浮みし物をよし無上人の引導にて引戻されて中有の旅に迷ふよ又一休を頼て我を救はせ給はずハ夫子供に取殺し手に手を取三途川を渡らんとまざまざと夢幻しに見ければ是ハと驚き又々一休へ参りて此よし云々と申上れば我よく引導せしに又異人を頼みし故也とて二度願み玉ハねば子供さまさま嘆わびるにそ扱も不便の事や然らば埋みし死骸をほり出して又鴨川へかたげさせ川岸に立て又一首述玉ふ  
大水のさきに流るごちがらも身を捨ころ浮ぶ瀬も有

とて死骸を川へさんぶと投て庵りに歸給ふ其夜より親子の夢にまみへ有難き御引導にて今こそ浮み成佛をけるそと白雲に打乗て西の空行ければ皆人有難くぞ覺ゆれ

四十雀引導を受成佛の事



紫野の邊に常に四十雀を愛し飼けるが生有物なれば死する期有て籠の内にて空しくなれり朝夕手馴し可愛き故とそ外不便に思ひ悲しみて子に別たる思ひをなせり凡非情無心の物をや死出の山三途の川冥途の間へかく有らん然るへき智者を頼み引導渡さばやと思ひ一休の庵りに尋入て云々の事頼み度よし申ければ折節和尚の弟子出合聞ていと安き事出々成佛せさせんとて佛前に向ひて足下に引導渡し候也

昔釋尊八十三つたいがに於て涅槃に入今汝四十雀紫の野に成佛をとぐ

とこそ高らかに授ける彼者頼母敷思ひ頼て葬りぬ是を一休物越に聞し召只今引導のよくでかしたる小僧か風骨によると思し召大きに悦ばせ給ひ機嫌のよき事な、めならず

沙門の繪像に讀の事

一休和尚と等しき沙門有けり我繪像を自から寫し心づから一入よく出來たるよと嬉しくてさもあれ一休に見せばやと思ひ急ぎ紫野へ持て行ける和尚此繪を一目見給ひあな見苦しやとて目閉て大きにあざけり給へばいか成る所存をも頼み給はず笑ひ給ふぞや

と打腹立、言りける其時繪像を取て庭上へ投捨土草履をはきなから散々に踏に悉り一筆かうぞ書れける

世を捨て形を捨て鬚髪を切て煩悩を切すかりに繪像を替てれのか悪業をかつけ置繪像大き成迷惑也

と黒々と讀を書て渡されける沙門熟と感じ頓懷中して歸ける

蝸牛南極物語

陳忽成弟子或時一休へ尋けるは世の中に成程少事を御物語聞せ給へといひければ一休聞し召汝蝸牛といふ虫を見たるやと問答ていかにも見候といふ其蝸牛めが貝が出て這行時に頭に角二本有其右手の角先に國の數五百あり雌手の角先に國の數五百有合て一千の國有然るに此世界の如く日月空に輝山川下に故ち流森羅萬像少しも替る事なし天運の須臾を以て千歳とす然るにたがい國を争ひ右は左を亡し左は右を打とり合戦更に止む事なし或は一年國を保て二年に亡し國も又起り年中の間存亡忽地をかゝる事度々也されの須臾を千歳とする内に蜉游の虫あり夕べに生朝に死る事是より小き



事なしと宣ひける其時弟子然らば世の中に大き成る事何事か侍らんと尋ければ一  
休聞し召れ心得たりと宣ひて北海に水鳥あり名を大鵬といへり嗣の大きき千里あり羽  
の長さ千里あり合せ三千里に足らざりけり此鳥南極を見に行かへやと心指北海より  
思立遙々と飛程に一日に幾千萬里といふ事を知ず昨日も飛今日も飛年をかさねて急ぎ  
けれ共何時行べき共知れざりけりさし物大鵬も疲果不圖有木の枝にとまり暫時羽を休  
め居たりければ下より大聲を上て輕らかに我鬚先にとまりたる何者成ぞと叫ける大  
鵬大きに驚きこはいかに不思議な我は北海の水遊ぶ大鵬といふ鳥成か我形を以て南極  
を見はやと思ひ遙々飛來ると云共勞に及で力無此所に羽休め侍る也ける大木を髭に持  
たる何者にてか渡せ給ふ名のらせ給ひと罵りける其時下よりいふやうは汝が形にて  
南極を見ん事思ひもよらず我は此南海の底に代々年を経たる海老なれ共我だに未見さ  
るぞかし急ぎ是より歸るべしと大いにさけびて怒ける高慢しける大鵬も力及ず欺かれ  
もとの北海に歸りける其時海老怒を起しかゝる小鳥さへ南極を見んと心指思立こそや  
さしけれ我見ん事や有べきと思ひ南海を立出南を指て游ける漫々たる滄海を明暮急ぎ

けれ共廣大無邊の道なれば至りつべうなかりけり海老も程あつくつかれ果て有はらの  
有りければ暫時立入休みけるに虚空より聲を出し何者成也我耳に入しと覺たり急ぎ  
出よと呼りけり海老是を聞よりも我は是の南海の底に代々經たる海老成がが様の子  
細候得て南極へ趣き候といへ共遙々の道なれば暫時爰に休む者也然るに不思議や此は  
らを耳に持給ふ御事は誰成らんと恐れける其時虚空より大千世界にうなり渡る大聲に  
て我の天地開闢より此海に住龜也かのれか身にて南極を見ん事は叶ふ間敷也思ひ立し  
へやさしけれ共心指を空して是より急ぎ歸るへしと呼はる聲天地に響て聞ける扱へ  
海老も叶ふまじとて終に空しく歸りける夫より彼龜又南極に趣き見て歸らんと心指我  
住む海を立出南を指て行けると聞けしが今だに於て歸らず況や何時歸るらんといふ事  
もなしと目覺るやうに仰せられてはなし給ふ

一 休 女房にぬれ衣

頃しも春の半の事成るに花に心を寄せ給ひて幾枝も集め花籠に立まゑへて酒など参り  
心も若々と成ておはしましける所へ一休の旦那の奥方参りけるよくこそ來り給ふ迎御



酒をさす、め可笑き事など咄有てひた物酒香て遊び給へば早西山に遠近のたつ木も  
 らぬ御寺に彼女房もべんと咄ける一休如何思召けん今宵の御泊あれと仰せられける女  
 房申様假初にまわり長遊び仕るさへ何とやらん似合様に侍る一夜泊申さは浮名や立申  
 へし其上夫有身の殊に何に心はさ思ひても叶ひ難く侍る先於暇申とて立歸りしを一休  
 袖にすがり平に今宵のさまり給へと引とめ給ふ女房申やう今迄の一休様は活釋迦のや  
 うに思しがわらはに御心有て止め給ふかと云へば一休笑はせ玉ひて其方へ心懸ればこ  
 そ愚僧も是非共に止申そ心をかけぬ者が御泊り有と申者かと仰せられれば沙汰の限りや  
 夫有身かゝる事侍るべきかと振切てこしに乘立歸りける僧夫に合て一休は佛のやうに  
 思其方もさば思し召さんがいたづら成御坊やわらんに酒をすゝめ給ひ今迄引止め利今  
 宵の一夜とまれとがなに仰せられける必ずあゝの寺へ参り給ふなど二心なき異見を操返  
 し申ける夫は去者にて手を打て笑去とては佛也汝かかくいふも斷よく思ひみよ何成者  
 にて我を頼む旦那の女房に馴々しげに一夜泊れとの中々出家の身にていひ難しよし  
 一休和尚と枕を並は今生後生のうつたへ成べし我らを兼侍らす急ぎ行て一夜かなへ遊

び給へ何々の誓言を妬心なしと申せのさあらに仰せに任せ参るべし御悦び有べしと  
 申せの急ぎ立て一和尚をさぐさめ申さるべし女房悦び一ま所へ立てもり白粉口紅狐の  
 狂たる如く引つくりひ衣裳をかさり輿に打乗一休にこそ参りけれ一休も早寝給ひしに  
 門をほどほどと拓く一休驚き立出玉へば彼女如何にも細々したる聲にて前に是非と  
 仰られけれ共夫の心窺ひしくて振切立歸りしが餘り御殘多て夫に暇乞候へば苦しから  
 じと申させ侍るゆへ泊りがけにて御耻かしをがら参りけるとあれば一休否最早にて有  
 り御歸りあれ先程は此方へ心懸り候が早心に懸らず早々御歸りとて門戸堅く閉て音も  
 せず去とての御廻り候かと申けれ共敢て音もせず是非なく宿に歸り夫に云々と語る左  
 有んと思ひける事よとて笑ひて誠に天下老和尚也心の動く時は動し動かざれは動かし  
 玉のす最否とは短し行水の如く成御心や潔々兎角凡人にてなしと彌々尊みける  
 神變自在を語る事

一休常々活佛にてまじくけると世上に風聞まけるが餘りにいはんとて去人申けるの  
 此回和尚へ参りけれのよく來ると宣ひて虚空に坐し玉ひて御庭の松の枝に御腰を掛ら



六十八  
れ御涼みなされしが不思議成事にあらすやとまげく語りければ皆人夫の偽りならん人間と生を受け斯る自在の成へしやと取沙汰しける事風に一休問召一條の辻に札を立られし案文の

佛法の修行既に道也天眼通を得たり虚空に坐せんとそれは則坐し坐せよと思へば則坐せず通力自在を得たり若疑ふ人あらば見物に来るべしと書

皆人は是を見て此間人の評判まけるが斯せらるゝ上は更に疑ふ所なし去乍魚を喰て如何にして吐と仰られしも誠ならず左ある事にてや有らんと云人も有しが否々夫との違ひたるとてすこびたる仁二三人連立一休の庵室へ來り札の表疑ひ有まじければ直に拜み申度候と是迄參り候と申を和尚出會玉ひ中々の事天眼通を得申たりと仰ければ其中にバびたる者進み出て申けるは是の御偽りにて有べし虚空の事は思ひもよらず此扇の上へあがりて御覽あれと申ければ最安き事也去ながら其扇の上にも乗んと思ふ心出れば乗る今日の早天より乗ふと思ふ心なし虚空へも登らんと思へば上る登らふと思はねば登らず候重て御出あれ上んと思ふ時登りて見せんと仰られける皆人憫て歸りける其中

の一人申けるは如何にしても一休也人の餘りにいはんとて天眼通を得玉ふと云を笑しく思召かく戒めまむる也とて感じて歸りしと也

愚智成者語則を乞

有時旦那紫野へ來り申けるは此御寺へ出入仕候とて人々申けるは話則の一そくもぬけたるかなど、申て我愚痴成を侮り何共迷惑を致し候何にても一そく御慈悲に示し玉へと望む安き事也さらば參じられよと有ければ參ずるとい如何成事にて侍りけるぞいや何にても佛の道に合點の行ぬ事を尋られよ畏て候とて佛殿をさして走る一休可笑く思召せとも見ぬ顔してあれば刹那の間に走り歸る一休何處へ行けると宣へば佛の道に不審有らば申せと仰られし故佛の道は佛殿へ行道なるぞ存一走に見て參り候が如何にも合點の參らぬ事こそ御座候彼の山門の邊の松に巢をかけて候が何の巢とも更に合點參らず大方驚の巢には見へて候得共確乎には辨へずと申せば否々鳥社今時分ハ巢をかくれと宣へばいやとてもの御慈悲に示し玉のれと望む其義わらばとて梯子持出し上り玉へと仰られければ彼者急ぎ登り彼巢を下し見れば中に鳥の子もなく何共見へぬ也一休



何成と問はせ玉へば何も中に侍らずと申せば一休狂歌に  
驚の鼻をわろして見れば鳥にて  
と遊ばし去來是に付見玉へ愛が一そく成はと仰られば彼者中々何共付申へき心の無侍  
ふ一休然らばそこ成ば我も汝に一そく授け知すべき心は無と示し玉へば此男驚き扱の  
一休様も仰難く侍るかと申ければ自心自佛と答へ玉へば横手を打て歸り終に自得まけ  
ると也

閑居の姿不思議の事

一休一大事因縁の工夫なされし時諸旦那或は伴達衆毎日訪ひ來まして妨となりければ  
茲くや思しけん御心地悪しとて一圓人々に逢玉はず皆人心もと無ておわく御見廻  
申せば御長髪ばうくとし玉ひて何共色見へず御腦とのみ仰られける旦那を先とし御  
知音衆も寄合是は氣遣き事也と多の名醫を入替くかけ參らせ御いたはり如何にと尋  
ぬ醫者申されける御脈如何にもよし不思議成御煩と何々も申ける有時旦那知音衆集  
り此御腦様子の如何様疾熱の様にも見へず若き僧の事なれば若や戀などなされて斯思

ひ煩玉ふ事もやあらんと一人咄出す各々此儀も去來知らずと皆免やせん角やと口々に  
評しける否々人多く知たると思召さば明し玉ふまじ私に能中の知音のみ二三人見廻て  
ろと窺ひ玉へ誰と名指有べし然らば誰人にもあれ此者共がかゝりなばなど本意を遂  
られぬ事有べからずと頼も敷云合せて竊に三人參りければ一休も出會四方山の物語す  
みて一人申ける此間様々の御療治にても御脈常に異すと醫者申也平生には違て何と  
て心深く渡らせ玉ふぞや定て戀をなさるゝと見付侍るは僻目か有のまゝに仰られよ叶  
へて參らせんとて打付て申ける一休如何にも嬉しげなる御顔ばせて此上は何をか左  
のみ隠すべし此日比戀説て斯の如く疲果候也能社問のせ玉はりし何とやらん我等に似  
合ぬ事にて侍へ共日比の好なれば偏に沙汰あく叶へて給へ去なから糸による物ならな  
くに心亂れて耻かしや夫と名を面上に云難し一筆書て參らすべし門外へ出給ひ各々  
開き御覽をて我思ひ急ぎ叶へて玉のるへし命存て名々には其替りに能道教へ致さ  
んと奥の間へずんといり一筆さらりと書て引結び彼三人に渡し玉ふ人々悦び御心安く  
思召と門外へ立出さて社中さぬ事かと急ぎ其名の知ま欲しと文開き見れば御歌有



本来の面目坊が立姿一目見しより戀どころなれ

我のみか釋迦も達摩も阿羅漢も此君故に身を獲しけり

と書れたり三人の者共案に相違して横手を打日頃の御心も知ぬ身があらぬ事を思ひけるこそ可笑けれ今に始めぬ御道化に誑れける愚さ誠に有難き御僧哉繪に寫し木に刻めるは多けれどわたもちの釋迦如來也と拜ぬ人のなかりき

詩歌を作りて蝟を服す

或徒然に一休蝟に御好物にて買遣はされけるに折節店に賣切て無使の者爰彼尋ね遅く歸るを待わびさせ一首侍りける

此度の急ぐと云に長袖の蝟の入道みちの遅さよ

と遊しける所へ蝟四五はい買求め來りけるを一休悦びて此蝟むざむざ食もむざんの事も引導の煩なくんと一首

千手觀音蝟手多 斬掛袖酢一如何

佐州一味天然別 他禁戒任老釋迦

やれ引導の濟けるぞ火葬にすべきか土葬にせんか否々水葬にせよとて手取足取手にく沐浴させて袖酢を掛けてひた喰に食て去且方へ行酒あど参りけるが餘りに多く蝟参りければ吐却あされけるに蝟也旦那乘是を見て驚きさて一休の佛の様に思ひしに腥坊やははくと嘲り玉ふ一休騒がせ玉はず否とよ我等の蝟を給ね口より出れぬ詮なし去とて喰はぬとまつくすみになりて争ひ玉ふ口より吐出し玉ふを喰ぬと有は彌々聞へぬ御坊やと跳り上りて笑ふいで一和御前等に喰ね共口より出たる證據見せんとして皆々引連百萬遍に往て善導法然の像を見せてあれ見玉へ人人善導の阿彌陀を喰し事は無難も口より三尊の阿彌陀佛喰ね口より出る彌陀の制し難し況て愚僧喰ね共蝟の出るとと更に爲方なしと頓作なる返答に皆口を閉て歸る

遊山雲井の雁

比は六月の末方或人和尚に伴れ逍遙して山野に遊び見に月間に月ひた物例の輕口を仰られ我も樂み人をも興せさせ玉ふ折節遙の雲井の空雁の友を忍び越路に歸るかと思しくて二羽連なり飛行を彼男一休に問けるは只今空を過る雁何地何國へか下なん御聞せ



あれといへる和尚聞し召され天に銀一は蛇の鬚三筋といへる蛇の鬚の如何はかり  
長からんちやくと申されよと宣ふ彼者云々様なくされば蛇の鬚とやらん未見たる  
事侍らはず知ぬにて候とあれハ一休されは彼雁も奥州へか下りなん筑紫へか下りなん  
終に雁など同心して飛たる事候ハねば不知也と早速答へ玉ふ

秘薬を習ふて世間へ傳授

其比しも都に口瘡の妙薬を覺へて秘藏えける者有一休奇特を聞召如何にもして知ばや  
と思召れやがて尋ね會玉ひて爾々の薬を知らせ玉ふ由承及候は、愚僧に御相傳請度存は  
るく尋ね参りしと申されければ彼人承り中々の事さる妙薬を我等代々傳り來れ共一  
子相傳の秘法なれば他にもらす事思ひもよらず去ながら貴僧も、しき御僧と見奉れば  
いなひかたも社候へ深き御執心にて渡らせ玉は、他に相傳有まじき御起請を書せ玉へ  
然ば許して教へ侍らんと云ける和尚聞召れ我身の大事一代大事の哲文なれ共愚僧に  
教玉へ候ハ、心得候とて墨黒に社書れける頓て習得て庵に歸り冷笑て宣様人の病に藥  
と成可物を秘藏して一人覺へたらんは慈悲の疎き心なり是等の事を秘藏とせば恐ハ

秘しても秘し難き一大事因縁をは如何せん去乍佛神の冥罰空恐しさらば札を書て知ら  
せんとて其表に曰

一口瘡の藥の事若口瘡を病者あらば必密柑の實を黒燒にして吞べじ癒る事速にして二  
度發る事なし是希代の妙薬なり

と書て立られける彼者是を聞以の外に腹を立脊骨をいからかして急ぎ紫野へ走り行一  
休を尋ね出し如何に御僧破戒無慚の賣僧哉何とて大事の秘薬を習得て他に口傳せまじ  
とて起請を書刺高札を立て萬人の目に晒す事何成曲事ぞやと忍びかねたる其風情打果  
しても堪へ難と眞黒に成怒りけるさしもの一休たれ共おめき殺すかどぞ見へけりされ  
共驚き玉はず聞ぬ顔にもてなしあらことくの有様や何事を斯ハ宣ふ起請書しも誠な  
り然るに高札立しも偽あらず去乍口傳せ間敷と書ぬれば口傳ハ一人もせざるなり札を  
立ると書ざれば立たる事が誤りか起請に少も背かざれば佛神の罰も恐しからずとて空  
うそむひて在ける彼者あく迄罵り怒氣に犯されて芳寸にせまりけるが一言の抜句に返  
答を尋ハれ詞もなく歸りける



堅田の船頭引導を受る事

近き江や堅田の浦ばに彌五郎と云船頭有けり已が業乍賤き營に養果一生帆の衾楫の枕をうばだて誠の道に疎くして志さあがら戎也九重の花に遊ぶ輩には遙劣り自ら賤になれていみじかになき事を露知らず頑固に貴き教を耻悔まざれば最淺間敷やすがなりけるが終に身まかりて死にける妻子またひて歎く事限りあし扱有べきにあらざれば火にやせん土にや埋まんと悲みけるせめて如何成智識をも頼みて後世の苦患を助けたきと思ふ折節一休風雲の行ねをたふて浦の方にねまりぬて四方の致景を樂みて在す所に妻子是を見て衣の裾にすがり只今か様の淺間敷者の相果候あられ御慈悲を垂て彼者の後世の苦みを導て玉はり候へ生々の厚恩にて候べしと悲しみける一休不便に思召何か安き事也引導授け得させんとて爲玉ふ様社不思議なれ先々死人を米こもに包めよとて俵に入て繩をかけ丸太船にかき乗せ湖水の波に浮べける沖に至りて聲を上高らかに宣ふ様

此俵は是元來米俵にもあらず豆俵にもあらず汝は堅田の彌五郎俵也江河に沈んで隣

の餌となり佛果を得よ喝と宣ひ水の底にぞ入れ玉ふ是成佛の引導也

所家名は是謎言葉

五月雨の降續き晴間も見えず打まめり四方の景色潤ひ木末深く見に渡る比徒然わびしく思召けん柴の網戸押籠て端然として在す所に三十斗餘りの男と見にて破れ笠を被りつゝれみのを身にまとひ車軸が雨にそぼぬれて如何にも思ひ餘り憂に沈みたる有様に静に物申さんと窺ひける一休誰や此方へと宣ひて柴の網戸を開き玉ふ彼男云様我等は近き渡りに侍ふ者成が明日はさる志の口に相當り候へ共智識を頼奉る方なし恐乍和尚を請じ奉り疎か成齋を參らせたく此迄頼來り候と思ひ入て申ける一休聞召素より出家の營み最安き事なり何處の程ぞと問玉ふ男答てさん候我家路と申は濁川通底抜柄杓の町と申て隠なき所にて侍る也尋渡らせ玉は門に印を置べし必待奉り候とて暇申て歸る一休跡にてつくくと案じ玉ひきやつり不思議成教様を云つる者哉さらば了簡して見ばやとて頼て義理を以て解れける抑濁川と云しは今出川あるべし底抜柄杓町と云し江川町と云事ならん出々尋行て見んとて思ふ當所を問玉へは案に違はず云わ町



と云所に行當らせ玉ひ印と有ハ何やらんと見玉へば表に杓子を釣置ける是ぞ印なり  
 とて頓て内に入り玉へば昨日の男に會玉ふ誠に智慧ぞかし主感に堪かね渴仰する事斜  
 ならず我淺間敷愚なる謎申候へは一々に解分ち道をも迷はず御入社僞もなき天眼通に  
 て在ますとて偏に釋迦の如くに思ひける男も興がる僻ものにて六ヶ敷難問をかけんと  
 思ひけるが法事も過ぬれば膳を出し居たりける其時和尙膳に向ひ殊にハ亡者法味の爲  
 廻向あして三界に手向蓋を開て見玉へば食にはあらで糠を盛て居たりける不思議に思  
 召され汁を取上見玉へば是も同く糠なりけり残りも左ぞ有らんとて横手を打と打ちあ  
 ら痛ハしや扱は亡者の三七日に當り候よとかぶりも振らず宣ひける男彌肝を消恐をな  
 して敬ける其時男云様仰の如く某ハ父を失ひ候て三七日になり侍る佛果にや至りけん  
 若地獄にや落ねらん後生の程覺束無悲しく候と問ければ一休仰けるは何事か有べき只  
 存生の振舞をば他人ハ善と譽るや悪きと誹るや如何云ぞと宣ひけるされば平生ハ常に  
 邪なる事候はず偏に正直路の生なれば他人ハ佛にて有と譽る者多く候と申ければ一  
 休聞召れ然れハ氣遣成事なし是阿彌陀にも非ず觀音にも非ず則正直佛也佛果を得る事

事疑ひなしと事も無げに仰られける男つくつく承り扱ハ心安く候又某兄にて候者三年  
 以前に空くなり常に佛道をも知らず徒に明し暮し耻し乍天性愚鈍に候ひて人の口にぬ  
 かり者と名を得候事口惜き次第也但ハ罪をも作らず候得は佛果を得候ハんやと問ける  
 一休聞召中々罪咎なしと雖佛には成難し左様の者ハ愚僧か許ても人が許さゞれば遣れ  
 ず其落る地獄を則あほう地獄と云なり只今生の如くに後生の事も侍れば佛果と地獄と  
 少も疑事なしと仰られける

偽り喰魚類の高札

一休は生佛にて魚を食て水中へ吐出し玉へば其魚忽生返て元の如くに成と洛中に此事  
 專なりと或人來りて語りければ一休可笑思召洛中の辻々に高札立玉ふ其表に曰  
 來る三月十日下り松の邊り紫野に於て魚を食て其儘元の魚に吐出し水中に躍さる  
 る事也た望の方々御見侍奉る

太夫元 天下老和尙一休禪師

とぞ齊れける洛中の諸人は是を見て虚か實か斯と人の云けれど誠しからず思ひしに扱ハ



疑ふ所なし正しく御自筆にて高札立らるゝ上はゑるしなくては叶ふまじ去來や人々見物し未代の語り句にせよやとて知も知らぬも見るも見ぬも其日の暮るゝを侍かねて門前に市を立ち我見漏さじと轉ぶ迄延上りて洛中の貴賤群集まけり其時にも我しかば大鹽に水を入成程魚を能料理して鹽の邊に御膳を居ける其後一休出玉ひて彼魚をひた物食玉ひて扱半切に向ひせ喝々と有て暫く目などふさぎ玉へは見物の群集御顔を打守り生たる魚を吐出し玉ふかど今や〜と侍居たるに暫有て宣ひけるゝ名々はるゝ御出成程にいづより一際手際に吐へしと種々思案をするに中々吐れ難し是非に及ばず糞になり玉ひりて拾巾さん各々も御歸りあれとて内へ入玉ふ上下萬人肝をつぶし扱もおどけたる御坊と興を醒し歸りし其中に心有者云けるゝ只今参りたる魚の皆生て淵にて躍る也有難き一言哉誠に正法に奇徳なしと承りしに人の餘り云んとて不思議なる事云出一休を譽んがため却て譏るなれゝ其理に示し玉ふ有難し〜と感じける皆人は氣が付合点し知るも知らぬもうなづき歸りける

當座の難句答話

白川の邊に住居し桑門に名譽なる輕口の人侍りけるが一休の輕口聞及ひて何とぞ難句を仕掛けんと常々心掛けるが不斗思ひ當る趣向有ければさらば一休へ参り御知人にもなり扱一句まて見んとはるゝ白川邊より紫野へぞ急がれける折節一休庵に在て御知人になりとか云ふる程にかねて巧みし一句の作も出来れば彼僧申されけるは承り及し御輕口を何にて〜一句遊ませかし付て見侍らんと申されければ一休仰らるゝは客發句亭主脇とこそ申せ先其方成されよと有しかは内々巧み置し事なればさらば申て見んと難句を社出されける此所の何と申紫野と仰らるれば

紫野丹波に近し

とせられければ未息も引入ぬにはや付られける其方は何所の人ぞ白川の者なりとあれば

白川黒谷の隣

と遊ひしける彼僧肝を潰しさしむつかしき章句也一句の内は二つの色字二つの所の名何成へうたんの川流れ成輕口も少は澁りとふり玉はんと思ひしに貝とか海士なら



て息もつきあへず付玉ふ斯る名對有うへにあらこはしとて尻をからけて逃げ歸るとな

眼の五生の徒見るに品有

昨日の邪淫の姿に付て未來現在に報ふ次第をあらう、佛法咄を演ましたが未申度事が  
残つて有を少し申聞ませう扱經文は前に讀ました大悲經第三の卷の中の種と云字に付  
て申事也兎角何の身になるも種がなければならぬ世界の人数如何程有やら知ねど同  
目口鼻に手足は有乍丈の高も有或の疲たも有太たも有目にひもがらの目たれ目  
のまほの目の竹の子奉行といふ目、蕪にらみの事じやげに御座る此種の方等部の中  
經に眼目瞞昧なる者の他の妻女を邪看する者の中より生ると御説なされた此眼目瞞昧  
とはそが目とも横にらみ共讀字なわ他の妻女を邪看する者とは他の女房を邪に看ると  
讀字なり是は何またる經の心と思へは世間に人を横に見る様な人の目が御ざるのいや  
あ此内にも其様な目の人が有か知らぬ此様な目に生れ付て來る人は過去にて人の女  
房のよいのがあれの人と語るうちにもひたと見ぬやうで尻目で横に見たる報によつて

今生にて常住横斗見て居やうな目に生れ付ものなり見度は眞直に見ずしてなぜに又横  
にへ見るぞといへは人に悪ふ思はれまひで已とあやまりて横に見るを他の婦女を邪看  
する者の中より來るとは説せられた斯申たらバ未目をろくに生れつかれたる衆の已が  
目の最早悪い目であゝと思へれて油斷なされたらば未來で又眇になりませうと悪ふ合  
点なざるゝな是の目で斗邪淫してさねはや目が如此兎角目と云やつが徒者千里の行も  
一步より始る如く只一目見ると云より事起りて及はぬ戀の思ひのと罪を作りて果の様  
々のせんさくがあるは昔の人も  
人の身に目斗つらき物あらじ見ずは戀しと思はさらず  
と讀置れたも聞ねたまで然は亦ごせ座頭何事も思はずに暮すかと思へバ見事心を動  
し情の道深く結句目の明かなる人々よりはいかなたゝ其處が塩のからきものの腐り味  
ひがするやら漆に膠の如きものと聞なればあながち目斗が惡ひ物とも定められぬ古人  
の詞に月花もさのみ目にて見る物かむと書置れたは能すませは面白詞を先各々我ら  
は目でなければ物を見ぬやうに心得て居まするをさのみ目で斗見る物かは爾みた物で



更になし心ても見よ見る目さへあれば犬も小判はみるけれ共これは黄金といふ物にて七寶の内の寶とも是さへ持ては何もかも自由自在に買るゝ物じや見たる斗て如何にして其見らるゝ物の正躰を知らぬすれバ目て見た斗が見たと云物でない物ごどに心をつけて其道理を知らねば其方を今殺すがと云書た物を見ても其文字を覺へねばいか成事が書て有やら細長きは蚯蚓と云字にて有らん推量にやつて見れ共合ぬ然ばさのみ目にて見る物かはと云へるが面白ないかさらは目にて見る見ぬの咄を引て聞ませう

維摩文珠即座問答

維摩經の中に文珠大士維摩居士の病を問に御越なされて何と居士御宿にか御見舞のたぬ不來の相を以て來り申たと仰られた此心は不來の相とい來らざる姿を現じて來ると云詞じや何と來てを以てから來らぬ姿を以て來たと何とやら六かしき公事ではござらぬか其時維摩の方一丈の庵室の中に在りました今時寺の長老和尚の御座る處を方丈と云ひ此心じや然に維摩此詞を聞て是はく文珠菩薩よろこそ御出さされたとて維摩の維摩で我不見の相を以て見ると答へられた此心は不見の相とい其方様の不來の姿て

れこしなさるれば我も又見ざる姿を以て見ますると云心じや何と知た同士の出會へ面白問答ではござらぬかさのみ目にて見る物かゝのみ足にて行物かゝと書たを物なれど因に申さうならば鴨長明が海路を隔る戀といふ題にて

思ひ餘りうちぬる雲の幻も波路を分て行き通いけり

是を味へふて見ればねいりたる内にも思ふ人の方へ心が通ふたなれば此行やうでは足いいらぬ然れんさのみ足にて行物かゝと書たいと申が爰じや又松島の法心上人の歌とて

足なくて雲の走るも怪きに何をふまへて霞立らん

と讀玉ふ由沙石集の中に無住法師の書玉ひて是楞嚴經の心に叶へりと有如何様雲が走り霞が立は合点がまいらぬ春立といふ斗にやみ吉野の山も霞とともよまれた斯よんでも同じ事じや歌に

足なくて舟の走るも怪きに何をふまへて浪は立らん

實も楞嚴經の中に釋迦如來と阿難尊者との問答に眼見心見不見の見など云事有をこ



そと殊勝しゅうじやうに有難ありがたふ思ふ事じや此やうな理りに似たる事を申さうならば或者の聯句れんくに舟に  
乗て山の巔いたゞみのに上ると云句を出した世間せけんに無理むりを聞きぬ事を山やまに舟ふねを乗やうな事じやと  
云いまざる是こゝに和わを付くみましましたいか様付やま悪難あくなん句なるを是こゝに去者きしやか付くましたり

田子たごの浦波間うらなみにふじの影かげみへて

何とよく付たでいござらぬか舟ふねに乗て田子の浦うらに魚いさななど釣つながら下を見れば富士の山  
の影かげがありくとうつりて其上そのうへに舟ふねをうかべた時に舟ふねに乗て山の巔いたゞみのに上る心がま  
すまいか池いけにのぞめば天脚下てんかつかと云句も此心こゝろと同じ事兎角物うさぎかくものには感かんをなして見たり聞た  
りせねば見た内うちでも聞た内うちでもない月花つきはなを見るにも月つきのいつも丸まるき物と斗たう覺かくへ花はなはい  
つも咲さて居ると思ふは本の目まなこで斗たう見たと云事也月影花つきかげはなも散ちと云事を合点あてするを心こゝろと共  
に見ると云物でござる此心こゝろを以て邪淨じやじゆんを戒かへたがよい夫おつとはあせに申すに器量きりやうのよい男  
が女おんなを見るにも只美うつくしや執心しつしんやと氣きをうつす目めでばかり見ると云物じやが心を添そへて  
見ると云ハ彼女かのはいかな美目かみめよしで己おのの心か何とやらとさめきすれどもはやあの方に  
は主ぬしが有あによつてならぬ兎うさぎや角思かくしふまい主ぬしある者に心を懸かるは生盜人いまだすいどと云ものなれば

其証據しやうこには罪つみに行いるゝぞとじつと分別ぶんべつをして非道ひだうなる事を止とめるが心を以て見るとい  
ふ物じや扱あつか此心こゝろをたさめてから見たりとも科かにあらず滅めつもせぬがとてもの事に此心  
か有あからは見ぬがよい筈はずでもとても母ははが明あぬと男おとこの胴骨どうほねをきつと強く持もたしたのみ  
也扱物事あつかものこと仕つかそこないもなし侍さむらいハ殊更しゆぜい此強こゝろき根性こんじやうをさげぬは武邊ぶへんも功名こうめいもならず先まづ跪ひざまら  
しぬは見聞けんぶんから生なぬるゝ實じつの用もちに立たさうもなふ思おもふゝ兎うさぎに角詮かくせんあり事ことハ是こゝに限かぎらずあ  
ほうらまう涎よだめを流ながして見ぬがよい扱女房あつかひやうを山の神やまのかみと云咄はなしを目覺めかくに中ちゆうふ

世界の女房せかいのむすめは禍わざはひの山神やまのかみ

山の神やまのかみと云者ものに目めを見合あはすれハ其まゝ死しぬると柳人やなぎびとの云傳いひつたへて奥山おくやま深く入いて木きを樵しやうに  
山の神やまのかみらしい者が其邊そのあたりへ來きてわざと見みられやうで眞前まへにちらくすれ共見ると死しぬる  
によつて随分見ぬがよい若同わかしなじ山人やまびとでもちよつとまづどのやうな形かたちの物ものならんと思ふ  
て彼横目かのよこめをして少斗せうたうても見ると死しぬることが一ひととあや是こゝを忘わすれさせらるゝな世界の美  
い人の内義ないぎたちを常住山じやうじやうやまの神かみじやと思ふて見ると死しこそはせまいけれ禍わざはひの種くさねじやと思  
ふてちつとも見ぬがよい兎角うさぎかく見ると死しぬるとさへ思おもへば手てがつかぬ若衆合点わかしやうあてさせられ



たか夫よ誠まことに人の女房にやうぼうを今時の流行詞こころばに山の神かみのかみと云いまするは此やうな事から云いか  
 知しませぬが但たゞ悟ごもじがきづいによつて山の神かみのかみの如ごとくといいと云い事か夫は何もがよく存ぞん  
 てあらふ身み共ともがやうな法師ほうしの知らぬ事こと迷まよひの衆生しゆじやうの爰こゝが淺あまじう御座ござるぞ何なにをも  
 かでも見たみたがる一いつとして役に立たぬ事をひた物もの見たみたがる何なにばう心に合あ点てんまて居いるかうの  
 見みたり共何ともの大事だいじかとあだ事ことにも辨へん口くちをきかして蓮れんの泥どろより出いて泥どろに染しらぬ如ごとく心が  
 清しみ浄じやうなれば一心いっしんか極ごくてからはとまでは美事みことに云いけれど一切いっさいさやうにきれいに云程いんぢやうの人  
 の泥どろに染したも一心いっしんの極ごくらぬをも見て來きましたによつて先まづは眼まなこで見るみるに煩わづ惱なうさるる物もので  
 ござるそうな程ほどに今いまの山やまの神かみを忘わすれぬやうにして見みたり共とも夫おとこが小判こまがねを見みたやうに心得こころえ  
 てござれまたが今いま時ときの若衆わかしゆや氣きたいのよい親父おやぢ達たち笑わら止める事ことの後生ごせいで皆みな藏くらひらみのやう  
 な目めにならせられうと思おもふて氣遣きぢに存ぞんずるが後のちには世界せかいに生なれて來きる程ほどの人目ひとめが横よこに  
 睨にらみやうで御座ござらふと思おもふて可笑おかしござる夫おとこに付つ邪淫じやゐんの報話ほうわを見みて聞きせませう  
 御手洗みたらしの流ながで染しる人心しんじん  
 昔都今出川いまでかわの邊へに色好いろこのみある男おとこが或時あるときの比くらは水無月みづなづき糺ただの森もりの夕涼ゆふらやううち開ひきたる河原かはらに

飯茶屋いかり二三さん千せんも立並たてならび京中きやうぢゆうの上下じやうげうつして御手洗みたらしの流れながに汗あせをすぎ暑あつさを忘わすれて歸かへ  
 る時分ときぶん西山にしやんに入るいる口くち四五尺斗四五せふと残り殊更ことさら比叡ひゑの山やまふるしも冷々れいれいと心こゝろよく未いまとある茶屋ちやに  
 腰こしを掛かて休やすらふ處ところに今出川いまでかわの方かたより大勢たいせい來きるうちにも被衣へいゐの襟深えりふかく風俗ふうぞくのよきが年  
 老おいたる姥うば只ただ一人ひとり運はりて來きるようと目を離はなたず遙詠はるかめてゐたれば間近まぢかく來きて此男このおとこが掛かし  
 茶屋ちやに先まづまばし暑あつやとて姥うばがいさめも開ひらき水を飲のんで片蔭かたかげの方かたへひたと顔をふりてお  
 らるをを見みれば日比執心ひひしやくしんに思おもふたる人の女房にやうぼうじやまで是こゝは夢ゆめか現げんかと思おもひてろろりと  
 近所きんじよへ立たり是こゝはよう社御參詣しゃごさんぎといへばされは最前さいぜんより其方そのかた様さまをも聞及きかびて居います  
 れど御存ごぞんの通此方とほこのかたの人は大い世話せわやきな人ひとにてか様さまな所ところへ參まゐる事を嫌きらわれまする參まゐり  
 度は御座ござらぬ妻つまの里さとへちよつと往ゆて參まゐらふと申まをして横よこにきれて參まゐりました故誰ゆゑたれにも逢事あひじ  
 が否いなにて夫故詞おとこごしをも掛かせななんだといへば此男夫このおとこのわたくしの能知なまかりて罷在まかり然しから暮くぬ先  
 に神前かみまへへ早はやふた參まゐりなされたままのた出いで此裏このうらに見みへし飯屋いひやの人の見みぬ所ところなればあ  
 れにてゆるゆる御涼ごすずみなされて若日わかしゆか暮くたり共私ともわたくしがた供たぐひを致いたし御里ごさとへ參まゐれば別義べつぎなし  
 御師ごしに必かならずよりなされよと云いを開捨ひらに女房にやうぼうの神前かみまへへ參まゐりたるうち男婦おとこく茶汲ちやくみ吸あひ今いまの



八たのしたらばともくどめて玉のれと云うちに早只今歸ります最早日も人て暗ふなりてきまずと云時茶屋の喉むりに袂をひかへてまづお茶ひとつと差付て彼奥の方の仮屋座しきに引する所を男出て最早私も歸りまをと止めて酒の素麴のといふうちになんなく口も暮すましければ此女房もかねて此男が心あるよし見請しにや婿の主の喉と物語するうちにつの間男に成て扱夫より親里迄送り道すがら行末の落合ふよとみを早談合して誰知す其夜の暇乞して別れたげにござる世には性の悪い男も女も有事なるに人の心は染るに色を増じや夫斗ておく事か二ヶ月三ヶ月たつにまさりて親くなり互に心を通ず折柄東山の邊に此女房の家いつも齊にたまやる出家の袷を洗濯にこされたを是も後生と念佛片手に縫仕まいあたり視の有に任せ此座を立ぬうちに彼男が方へちうと文して音つれんため重ね鼻紙其まゝに一日二日御遠々しく懐しく彌々また近きうちこそんじよそこにてお目にかゝりて緩緩と語りなぐさみ積る物語り神かけてなど細々と書てきりくしやんと結ぶ所へ亭主何心なく來りしに南無三寶と顔に血をあげながら縫たてし洗濯物の袖にちやくとをし入しを亭主是を見届け乍左もなき貌にもて

あし間近くよりて飛かゝりまづ洗たく物を奪ひ取彼文を取出し女めよ是はと開き見るに女房たまらずすがり付をつき倒して何々お懐しく床しくと讀に最早包まれずと奥に走りこみかみそり取て咽笛かき切倒れける亭主是をも知らずふみ二三べん讀返し名書を見るに某より参ると斗有に扱此洗濯物の主坊主めにまがひなし袂に有社不思議なれ扱もく蓄生めと女房を引立見れば早息絶たり是はえたりいよく堪忍ならずと其比の太守に訴へけれの坊主を召て問はせ玉ふに更に覺へなきよし曇りなき通りあきらかに申譯すれ其既に其坊主が袷の袖に入て遺社證據なれと終に云譯立す引渡されて女の骸と共に木に上せられ死たる淺間しき扱も前世いか成因果がありて今再發したりけん過らずして斯る愛目にあひぬらん人の身にいつ報がめぐり來らんとも知れぬの現世に覺へがないとて油断となりませぬぞ此男科なき法師を殺したる因果の報にて其身果たる事ながくしき咄なれとも申聞まじよう

報も早き女敵の太刀

扱此男日比の本望になりて一人も居られずして早速餘の女房を向ひ取暮しましたが此



女房に子なして年としの十二三年も家いへ繼つぎなきを人の命いのちに知れぬ世よなるに親類しんるいのうちより異見いけんして手かけ足かけ成共なりこしらへ責せて男子おとこの一人も作る分別ぶんべつせられよと勸すすて去方さかたよりの肝煎きんせんとして土手町邊どてまちのへらにかこひ置しが又また此本妻ほんさい死しなれたによつて直ただに此この手かけ殿とのを内へ入置いれて一年いちねん経ぬに早速さそくお腹はらが常とこあらず終すまひに安々やすやす平産へいさんあり取上と見れ玉たまのやうなる和子わこ様さまが出来できて是こゝは末すえの初物はつものと一家いけ一門いっもん祝いわひ悦よろこびお袋様ふくろさままでお達者たつとにていつしか殿とのを様さまに直ただして奥様おくさまについなつてうへみぬ女おんなとなる然しかるに此この手かけ始めはじめ親望おやさまの手てに居ゐられたる時取結とびしたる男おとこが有ありしに貧福ひんふくは知れぬ物もの不仕合ふしあははて渡世わたりよもなりがたく一先いちま江戸江戸へ下りて稼かせへしとて四年よねん前にあかぬ別わかれを告つて夕ゆふつけ鳥逢坂とりあさかの關越せきごて東あづまに下り三年さんねんの間東路あづまぢも仕合しあはしからずして便音信たよりなづねもあし其後親そののちの内うちに脊丈せぢやう延のびたる女子おんなを抱かかへ置事おきごともあらずとて爰こゝに奉公ほうこう分ぶんに出いしたるに斯かる仕合しあと娘むすめのかげ嬉うれしがりしに彼過かのりに比ひ江戸江戸へ下りたる男おとこ今年ことし上りて尋ね暇いとまも遣やらぬ女房おんなをと苦々くくしくねだれか、れど三年さんねんは待まちたるにまがひなしとて取上とけす此この男おとこ元もとより身袋みふくろ不埒ふらち故外ゆかりにははや足あしもためられず何なににかゝりて成共なりと思おもふ處ところに今の男いまのおとこの身袋みふくろよしあれば彼かれと云い是こゝと云い女おんなめも悪わるしと彼處かゝ

へ行いて段々だんだんを語りもつとも私音信わたくしなづねさる越度こゝろによつてかやうに手を下げ申事まをあれば始はじめの女房おんなにまがひなし只私ただわたくしに返かへして玉たまはれと云いに亭主ていしゆ何が秘藏ひさうの新内義しんないぎなれば念ねんもあし事こと遣やべしといわす然しからうひかゝるから覺悟かくご致いたした程ほどに氣色きしよくをるを手代中間てうだいちゆうかん共とも寄合よりのあひたゝき出てやつたじやまでされ共とも此憤このいらいり底心そここゝろに徹とおして無念むねんなれば今日けふのはたしにかけ込こ晩ばんはさし違ちがへると沙汰さたするを一門寄合いっもんよりのあひ談合だんごして扱あつかひなり命いのちが有ありて社しゃと銀十枚ぎんじゅうまいより小判せうばん十兩迄じゅうりやうにて堪忍かんにんをまやれといふを一貫目迄いっくわんの思おもふ心が有ありて生中堪忍なまぢゆうかんにんをせずまた亭主ていしゆも命いのちに代かる事ことなれば一貫目いっくわんや一貫目いっくわん遣やたるとて身みの害がいに成事なりもなければ出いして濟すす可べが然しかる可べに少すこしの處ところがしん坊ぼう兎角うぐいす右みぎの通とほに堪忍かんにんならずハ兎うも角かく分別ぶんべつ次第しだいとつきひなしけるに然しからば覺悟かくご致いたしたとて宿しゆくに歸かへりました扱あつかひ其時そのとき分ぶん東山とうざん近ちかき邊へらに萬日まんにちの回向えがうがはじまり貴賤きせんの参まゐり下向引げがうひも切きらず群集ぐんしゆの中なかより脇差わきさしのさや外ほかして打うて出る者ものは今の男いまのおとこめなり然しかに彼亭主かれのていしゆの参まゐりたるを見掛みかけての事ことなればやそれと云い間に廻まわる何なにが此段このだんにありては内の者うちのもの共ともあたりあたりに近付ちかなんだ時彼以前そのときの間男折節まをこをりし参まゐり合あはせしが此亭主このていしゆとは近付ちかなり送おくる中なかにかけ隔へだり投なんとせしを突退つんぱひ難がたなく袈裟けさに切倒きりたし女敵おんなたかを覺おぼへたと其上そのうへ



に腰をかけて見事に自害して果ました

何と報たか〜過りもなき出家を無實に殺した報ひが此様にめぐり来て其身もあやま  
りもなくして殺された扱彼間男めも己が命を太事につゝしみ黙り居て出家の死を他所  
に見て己が咎を譲りても何の報もあふして今迄居たるに此節に來かゝり取さへたるに  
甲斐なく結句餘る太刀先にて胸の邊を手負しが當座に死ぬる迄もなく百日斗も惱て  
腐り死に成ました何と悪因の業果報申たり其後此話をは一のはじめに紘の茶屋で取組  
たる時付てかた姥めが咄て申た此姥もうばで彼坊様の越度にありましたれはこそ何の  
穿鑿もなく私が命も助りましたと語り申たが此姥めも出家を殺さしてよくも己が命を  
かばふて居た事じや何もよく聞しやれたか此段々の因果其當分〜に目に見へぬと  
自然黙然と此やうに終には追詰らるゝ死ぬると因果とが同きもので若いうちいつ年  
がよつていつ死ぬると云事を未遠やうに覺へ遙手の届かぬやうに思へと兎や角とする  
うち一日たち二日たち今年が去年になり去年か又去年に成扱來年が今年になりて一  
つ〜年がよる程に〜十といひしが廿になり夫から後は月日も早くめぐり心もせ

しくなつて來る三十六遍をくるよりの猶速に早正月か是へまたり又盆か節供か朔日か  
晦日かと云うち暮ての明て玉手箱ついで白髪しらげの雪を感いき越方こしかたを思へは夏の夜の夢より  
短く市太郎長松にはや子が五人三人又其孫にも子が咲枝が茂り扱冬枯の時雨定めなく  
片端よりとろり〜と死ぬるを送りて歸る人もいや空くわくなりてあるはなく無なの數添増  
る世界に見知たる者ハ皆何所へやら往て見ぬと思へは彼未來とやら來世とやらへぐは  
らり〜と果行程に最早地獄も極樂もつまりてうら〜借家も立たれまいかと思ふに  
違ひて無量無邊に廣國かして一人も詰りて居られませぬとて歸りたる者なし其所へ行  
者ハ澤山に彼所にも生れ爰にも天巻してぬらり〜と産出すは一日の内に國々村々郷  
々に何萬何千何億にもせよ此世に生れ來る程の者ハ皆死なれを叶ぬ者なれ共いつか  
〜と未遠事みだごとのやうに思ふて居る如く因果の道理も一度の報りひを叶ぬものなり餘所  
の人はあれ程惡事またるはなけれと今に達者で息いき戈がにて仕合もよふてぬらるれば報ふ  
者でもあいかと必思はしらるゝあと申事じや夫は〜運まが早か是非に參ると心得可扱  
今の物語の有様を聞て合点し玉へたま〜淫欲いんよくの少い人あれはまた妻子こらしを疎そにして邪



見の中る者もあり斯る者は狼中より來ると説かれて狼の生れ替り也或は淫を好物語を  
 悦び人々に愛せらるゝ者は鸚鵡の中より生を受或は邪淫をせぬ者はまた巳が女房にの  
 みほだされて親に悪くあたり不孝になるは結句淫の罪より又深し是らの者は斬舌地獄  
 に落て苦を受とも説せ玉ふ誠に三界に人を齧ぐきづなり此淫欲なれば何も止玉へまか  
 しなから止まらぬは此色道なれば方々往生成佛あり申まいかと存侍ふ昨日申たる如  
 く其戒を保ち威儀を正して申す念佛にもあらず成佛もたき所の各々我らを助玉はん  
 どの御智なれば邪淫をまたり共救ひ助けまいとは聊思召ね共願は少しにても御苦勞を  
 掛奉るがうとまし又巳が積犯の惡業強ければ自己引下りて晋の網にもれなんも淺ま  
 しけれ二百戒五百戒はたもたず共先差當りたる所の御法度の邪淫を犯してあらぬ耻  
 をさらし玉ふと申事なり惡ふ聞せ玉はす共少しにても惡しきことをせぬやうに心を  
 持扱其上の念佛題目はいよゝすぐれて佛も嬉しと思召へし只種の字に今の因果の種  
 木の實にて有と日頃合点してござれ是迄にて邪淫の沙汰は濟ました其内また話申さ  
 ん穴賢

知恵に纏絆されし女の徒

唐土に林茂先といふ人有しが學文者なれ共前世の因果か如何にしても貧に暮されしが  
 其隣に大きな分限者の文盲なる仁の女房我男の不學なるを氣の毒かり彼の隣の林茂  
 先が才覺に惚れて有夜密かに忍び來り學文の窓をほとと音づれたるを誰ぞと思ひ  
 て差覗けばどふしてこうして執心で御座つて袖に餘る涙包兼てかく彷徨ひ來り侍ふと  
 深く思ひ入たる様にて口説かりけるを誰ぞと見れば隣の内義なり器量人に勝れ殊に  
 金持の奥あれば我やうな貧なる者が此方から戀にしたとてあるまゝ今時は後家さへ唯  
 居るは無きには是は忝なき事御意は重し下地は厭忌ともあひ事夢か現か最早人靜まり近  
 邊に誰を憚かる者なし翌日の閨浮の塵ともなれ愛の時宜に及ばぬ處何んと若ひ衆此  
 やうな時はいやがなり申まじ宜處で御座るまいかさあ十人が十人ながら取り亂すま  
 い物で無し然るに此林茂先とつと心を静め暫く物も云わなんだが流石學文者と言わる  
 程こそあれ皿程な目を剥き出し彼女房きつと睥睨付け去連り其方人間でない夫一人  
 侍て居ながら斯る仕方の邊まじや天地が覆かへる共道に有ぬ事は先某の致さぬぞ早く



九十八

歸れよと窓を礎と閉る時に女房涙を潸然と流し是程に申す事徒勞なくも歸へし玉ふかせめて一夜と嘆きて立やすらひぬるを林茂先走り出李下に冠を正さず瓜田に履を入すところいへまだあまぐらきぬ口説ごととて小腕取て引立しかハ力及ばず愁然くと立歸りぬ此の林茂先其明る年終に官位に經あかり榮花に榮へける何んと道を守る人の心いかふ差ふみ居るでないか今時は物を讀ても道を聞ても耳と口とに覺て居ながら不義なる事に結句文盲なる男の律義に劣りて悪事をする勝なり是を世話に論語讀の論語知らずといふに此事ならん皆方も朝晩口で結搦云ハせられんが其は又世話知りの世話知らずと云ふ物ぞかし面々の身の上の棚に打揚げ置きて人の噂ハ云ひ易い物で侍る又利口そうに申拙僧もそれの同事なり人の身の中で賢い物ハ上下二世の唇斗り云ふ事は遅くとも大事な事心と身とにまづ行ないせられよ此心か萬事に通る肝要の處で侍る或る經に人とありて他の女を盗む者は鴨に生ると説き玉ふ何たる因縁ありて鴨に成ぞと問へば去れば難の雉のといふ物は面々に雌鳥を一羽づゝ抱いて道を正し鳩と云ふ鳥は別して其様なる事の殿しぬ物にて都にハ無い事田舎では飼鳩

と云ひて種々の羽色の見事なるを集めて家を作り並べ置くに若し雄鳥の餌を拾ふ内にも隣の鳥留守の内に鳥渡覗くを見ると其儘飛び上りて其男鳥を喰殺す程にせちがひました我女鳥も啄き廻りせちがひ如何様隣の男鳥の覗くからは合点の行かぬ仕方と云ハぬ斗夫ハ少しにても其けふらい成る事もならぬに鴨と云ふ鳥めハ池や陂道に夥多事むらがり居るに是は誰が女鳥は誰れが男鳥と云ふ無も事く常住ながれを斷つる様に一日に男鳥の十羽や二十羽と云ふ數知れず男も亦女鳥の五疋も三羽も持つ是此身に成ものハ何が成と思へハ彼の密夫たる者女房を盗みたる者か昔此鳥類に生ると知り玉へ此様な者に生れたくハ好色の悪い事を折角して思ふ儘に不義をなされハ御満足で侍らばん誠に些少なる樂みに永劫の苦を儲くる事ハ餘り悪かなれば過た事は歸らず今より思案して見給ひ別して替る事もなし刹那の淫樂に現世後生を取り失ふは痛ましき事と一分別して見やうならば此處じや夫れに付き去所に男女寄合ひ訝しき墮墜せられた話を云ふて聞せませう

男女徒 評判柳の枝に雪折のなし



此頃町を通りなしたれば四五人打寄りて何やらん穿鑿したるを聞ば世の中に不義をして浮名流したる者の事を詐判して一人の男がいふ様は世に女徒らな者は無し一人の夫に定まりて居ながら不義なる事をしたがるは油断が成ぬ世界じや七人の子供なす共女に心放すなどはよう云た者といへば一人の女房腹を立ていや〜それは悪ひ量見で御座る男と云ふ者程淺謀な徒者は無い我手前に女房一人持ちて人の女房を盗みたるは正眞の活盗人じや其僻に男の心と川の瀬は夜に七度かゝるとは是もよう云たものと云ハ彼男少性急ていや〜男と云ふ者ゝゝとけにも云てみる物ゝやに合点をする女が徒ものと云ふ詞の下より何とまた女の方から盗で下されと云ふ女房が何所にか御座るぞうでも男が悪ひ否女が従者と互に大きな喧嘩にありて其近所がもや〜熱歸りました是埒の明ぬ詮議では侍うぬか何程男が口説たとても女が合点せねば成らぬ事なり縦令如何様なよい男が火を食へと云へばとて食はせまいが下地が嫌で無き故に御意の善しと終ひ埒も無い事になつて除るさすれハ云懸る男が一人悪ひかと思へハ女も悪し世の中はなまた成程律義なる男に女の方より文など遣りて口説懸るがあれハ夫れも一概に

は話難し到底處はさちらへも片付て疵は付られぬ二人共に悪ひと云が好きた簡と云ふ物ぞかし是程に無き事さへ二人で埒を明いで叶ハぬは兎に角互に心を一にして謀合ねハならず千人萬人の中でも彼と思ふ事は我心一つで嗜み易し此境を能々合点すれば何方が善惡の穿鑿ハ成らぬと思ひ玉へ然れども人に唆されぬ様に心を持つ者は稀なる事なり形るゝ心の浮氣なるハ耻を晒す高も低も身を持ち損ひ耻辱を儲る事ハ皆此様な虐溺き非義なる心より起る事なれば若衆ハ能く合点召されて大事なると思玉へ女の心持は上ハ梅柳の優美き枝に春の雪積る如くよは〜と饒めき心の中は石銀より堅く持玉ひて假借に婀娜なる 振舞もせぬ 様化粧物としにも氣を付たが宜しと去る上つ方の教訓文に遊バしたるが眞實なれ共今時ハ皆倒まにして上は堅く見せ内心ハ弱く心得るハ僻事の第一を扱女義に善惡の心持を申し聞せましよう

賢惡の女心の持用

去所に生れ付の美しき女房衆有しに亭主の留主の内に行か〜りしがない〜咲顔よき内儀あれば成べき事に思ひ好機會と吳々口説ければ女房何んと泣顔にて夫ハ恭なき御



熱心其内折あらば談合致す可しと云に男嬉さ限りなく此上は亭主を修し迄の事と前方より睦しく殊更亭主貪しければと無心も云わぬに金を此方より氣を付けなどしけるに男其心入と夢にもあらす後日の爲なれば手形を書申すべしと云に彼男隔心無き体に響應其方と此方との挨拶に其様な事はいらぬ貸迄もなし合力とあるなづりがまじけれ共唯遣り申可しとて金の四五兩も遣ひし扱二三十日も日數経て男の隙を心懸けて窃に内義に近付せんと申たる事談合せんと申させたる何と談合も今宵程の首尾も無しと靡だれ懸る女房聞き去れば談合と云へ御存知の通り私も男を持って居る身なれば我身乍も我儘にあらす此方の望の通り御亭主へ談合して見せしと思ひせんとより謂へん使も無く兎や角思ふ内遅なたり今少し待玉へ明日は談合して心に随ふ可しと云に此男驚き扱ひ此事御亭主に談合とや夫は何共迷惑なり此如くに懇切に語る者の不義ある事を云かけたかと嘲げられんも耻かし夫迄も無し餘程短氣なる者なれば我等が命も知れず最早其談合ならばやめにして玉のれ此上は少しも執心で御座らぬ命が有てこそ面白き事もあれと愛ひく宿に歸り其後此女房にも耻がしく成て何の氣も無い態して

來れ其平伏て貌掻げもせ居たりしが後々は終に道を切て懇切かもとしたとの咄し是は賢い女房と見へました又人によつて適々不義を爲まじと思へ人の害に成事も云はずたけりまはるもあり去年の冬で有た日頃懇ろに出入致す者が突然來て語りまするの夕去處にて二三人話ましたが火鉢の手斗り暖まり足の爪も離るゝ斗りなれば後は火燧に其處の内義と亭主と私と今一人足を不慮に踏込み四方の咄の内に猶一人の男籠相者にて彼の御内義の股の邊へ手か足かに鳥渡觸たそうなれば彼内義其儘火燧を鵜立と云ふ物に確立騒ぎ人の女房に手を指すは覺悟をして去るか他の女房の様に有まい處こそよれ男の在る傍ではは何としたるじたらくな胸の悪いうすををぬし人を見て其様も事は徒女の様に嬉しがらふかと思ふてはんに木に登りやるも大聲上て勝手に入りました此觸つた男誰知らねと自身に覺れば顔に血を上げ火燧櫓に額を押付け夢になれと迷惑がる私ハ傍で聞き寒に汗をたら〜かき二つ着て居たる布子一ハしつばと濡れ何共挨拶の仕様の無く狼狽て今宵程熱夜の御座らぬと云へば此亭主世間を廣ふ狭ふする人程有て其挨拶に想じて彼の女めが少しの事にも猛々しう御座る此の様に寄



り舉りて温るから手も足も觸るまひ物で無いを不器用なる奴にて喘の邪尸を申せし  
 適各の遊び玉ふに無亭主ぶりの兎角何れもかまひまやるな扱今の咄しの次の何うて御  
 座つたと云われしに漸々色を直して歸りましたが是は何んと賢女と云ふ物で御座かと  
 問ました此様な悪人な女もある世の中と語られた夫れ程に人に傷を付け迷悪がらせ  
 いでも女の道を立てふと思へ何の沙汰なしに我胸の内にて濟む事なるに如何に密夫  
 をせぬとて猛々敷有様是はまた餘り成る事なり能々合点して見れば此様なひんしやん  
 とはね廻る女か結句は徒ありと去人の云はれしも斯くあらん事ぞかし兎角女は物事静  
 に只心の内一を堅ふ持が道と云物で御座る爰を確乎と呑込んだが宜と心得可し成實論  
 の偈に曰く愛欲無厭鹹水を飲で轉其喝を増が如しとあるは此色欲に耽る有様の鹽  
 の辛い咽の濁く物を仰山に取込みてひた物湯水を飲む物の如く飲でもく飽くこと無  
 きは丁度其様な物又譬へて云ひて犬の枯骨拜むに均しと有は犬が飢るき餘りに死人原  
 に入て觸たか骨を食ふに堅き物なれば已が口中を破りて血の出るを知らず此汁は骨よ  
 り出ると斗覺に終に舌も咽も已かてに食破りて死すと云ふに似たり飢へたる時に後

前覺せず食ふの愛欲盛に成て堪忍ならぬと何の事も打忘れて主有物をも盗み慕へて難  
 無く捕へられて耻を晒し世の人に浮名を謠われて我身を我心で殺さへ此迷ひの一と知  
 るべし

戀の源の澄濁との戦

誠人の身を觀て見れば地水火風空假りに合し薄き皮を上張立てたる所の男女の  
 替有て美人あれバ醜人も有隔有れ共皮一重の下に貴も賤も不淨穢らはしき膿血の臭き  
 を包たる斗り霽屏に似たり壺に色々の彩色をして畫をかき美事なりと思ふ内に糞を入  
 たるが如く汚穢物との譬なり先男女の八穴九穴とある頭に目二つ是も脂といふ物が流  
 れ出年老に隨つて常に汗が出づ耳にも垢の出るを長崎療治と云唐人の姿したる男が何  
 やら陳文漢といひて誰なり共耳をよくして貰ふ時見れば異類異形の物か耳の中より湧  
 き扱も臭い穢ない物か出る是も不淨なり鼻からハ煤涕を垂らし口よりは涎の口熱のと  
 云ふ差向ひ話もあらぬ程なる臭い香ざる物も有り其外戀と云其みなりみを尋れば澄と  
 濁との貳に有て頂上より穴裏迄一として奇麗ある物はなし其れを只有難かり戀しが



て樂む凡夫の心を佛は見通しにて扱も可愛の血生や誠に樂みと云は此穢土を厭て極樂  
 と云國に生れて寒とも飢とも思はず暮す此所を厭事の無慚や何卒して救取りて遣たや  
 と思し召せ共名々我等ハ只此世界を見に煩悩さへるに戀をまして何時迄爰に遊び戯ふ  
 れ能事かまたしと斗り思ふより種々様々の罪を作りまたしても迷に迷を重ねて離るゝ  
 事がならぬは此邪淫と云ふ一より事起りての穿鑿なり思へば穢い物と云ひ少の間の歡  
 樂に未來惡道に墮罪して永き苦を受けるハ用も無い物ぞ扱邪淫と云へば人の妻を犯す  
 斗りかと思へば然にてなし子を孕みし女を犯すも邪淫の内乳祖母を犯すも邪淫或は非  
 處と云て寺道場の内在家でも持佛堂のあたり扱非時ハ盆や彼岸親の日や扱は我女房  
 など適々志ありて精進する日持齋の時きかぬ男何の大事が有ふとて犯すも邪淫又非犯  
 とて若衆を犯すも邪淫の内去る經文に佛の説玉ひた然らば今時の出家ハ男色を犯そハ  
 まだ手柄の様に人も思ひ其身も殊勝なる心指で有ると自慢えらるゝは少と台点の仕損  
 へかと思へば夫にハ取得が有ると云分可笑先此様を事迄邪淫戒と誡め玉へば覺て居  
 たかよし何と思もすきもならぬ御制戒是はまた輕い事戒門に就ハ其ハ四重四提二不

定僧殘滅靜舍陀單陀五戒ハ齋とてどうもあらぬ勤が侍る爰が了圓の付け所聞せ玉へ五  
 戒の事ハ扱置き一戒も半戒も此様ある六ヶ敷事なれば微塵もたもつ事ハ成らぬ然らば  
 佛にハ元なり難し此法師も説話しては聞かせますれと悟らぬ内ハ心もとなし扱經文も  
 ど見玉へ女犯は七百生三途に墮ち非犯は五百生惡道に沈むと有女犯と云ハ女を犯す事  
 非犯と云ハ若衆の事世界に人の數何萬何億有るか此二を犯さぬ者ハ有まい然らば一人  
 でも佛になる事ハ扱置き皆々惡道に墮ましよう中ハ落るに極まつた事如何と有るに  
 佛の誡め置せられたを破るからハ墮いで叶はぬ事定て惡道の責は往生要集其外方々談  
 義講談にも聞玉ふ可が勞い共苦しめともいやと云れぬ呵責に逢ひ申す思へば有處に墮  
 まいとて多年後世を願ひ寺參りをする事じやが兎角ハ我々凡夫の力で地獄に墮まいと  
 は云れず佛菩薩の有難いと云ハ大事の所成と然るに阿彌陀如來末世濁惡愚頓なる惡業  
 深き身の一戒も持たぬ惡人三世の諸佛の手を打拂ひ玉ふ凡人を救ひ玉はんと御普願  
 空しからず不取正覺と誓ひ玉ふ此南無阿彌陀佛を唱へ奉れば身ハ不淨にあらふ共戒律  
 をたもたずかゝる罪深き惡人を西方阿彌陀なればこそ助け玉ふ一心不乱に一念十念の



念佛の功德に依りては十億劫の生死の纏をらりと押切り弘誓の船に飛乗ると大悲  
 大悲の追手の風を帆を揚て刹那の間に極樂に往生するの何んと有難き事にて侍らぬ  
 か又此法花經に悪人の提婆を始め龍女は女人の手本を顯し乃至一不成佛と説き  
 玉へてたゞ一遍の南無妙法蓮華經に即身即佛を遂るは疑ひなし兎角惡業は斷せず共  
 只信心の一つで往生成佛の決定と思ひ取て唱へ奉るより外はあし能き種といふは此念  
 佛題目惡るひ種と云は此邪淫是にて種の字の心が濟みました亦のなしを致さんがあま  
 りの長事欠伸八百と留けり

惠心の僧都名利の貳つ

此頃ハ打續いての講談語りつめて此一柵が終りて侍る誠にか様に座を同うし詞をかは  
 すも皆他生の縁と申物咄す事も多く或の役体も無い物語に夜日を明し時を移すは同事  
 ながらつぬへ殊更如何に馬があふれるとて人事譏りて語り遊ぶは詮も無い事互に罪に  
 なりますれ共此様な講談説法の擬を致して一遍の念佛題目も唱るは先惡縁では無し座  
 興にも滑稽にも善い事の真似を随分したかよし悪い真似はなるものよい事は虚言にも

真似られぬ體然學にも此心を書て置れた通り譬へば氣狂が丸裸体になつて大道を走り  
 歩くに成程氣の遣はぬ人が彼の狂人の真似をして見せんと丸裸体になつて同じ様に走  
 り廻らば是も共に氣狂といふ者なり然も其心は違はぬなれ共形が動けば先誰を人に  
 まても亂氣で無いとは云はぬ假令内に惡心が有ふ共儘身の行ひ心の持やう物の云ひや  
 うを真似びて儒者の襟に身を持てば其儘儒者と云ふ者なり扱内心は俗で有らふ其頭を  
 剃りて衣を着袈裟袋がたちでも頸にひつかけ錫杖振つて虫も踏殺さぬ様に形を持てバ  
 御出家様なり誰か俗人と云ふ可し然れば惡の真似をすれば惡人善人の真似をすれば善  
 人と云者なれば兎角善い真似をすべし善い真似と申したならば身体の成らぬに善い衆  
 の真似をなされと云ふ事で侍らすせめて眞實より佛法は有難い物と心は發らず共身の  
 上に真似をして成とも善根を積む様の方術と申す事故に惠心の僧都は名利の二字を拜  
 み玉へて歌に

世を渡る橋と思ひてふみ見しに眞の道に入ぞうれしき  
 と讀せ玉ふ僧都も始れたゞ佛道を夫れ程眞からそこからの思し召さず彼禁中にゐい



て紫の御衣なき給はりし様なる事を手柄に人に學文者と云れたや知識となつて人に用ひられたやと偏に名聞利養に修行し玉ひたが何時の間にかやら誠の佛心に叶ふ心が浮びてやれ今迄は名利に斗り係りて一大事の處を取失はんとせしよと急度心を取直して見れば今斯の如く大道心の心が發るの既往の名利を求んくと思ふて修行をたるがもと成りぬれば世を渡る橋と思ひてふみ見しに其れが種と成て誠の道に入るぞ嬉しきとハ讀せられた此僧都さへ始は名利を心に掛けたと有る今時の各々何程後生を願立なされてもさあ今其方が首を切が夫れでも佛道が有難く思ふかと劔を振り上げたれば最早すぎと後世の願ひまをまい赦免して下されと申さん人の有まぬ去れば身命惜まぬ佛道者後生願とは云われず然れ共切支丹や伴天連の勸めは次第に榮るれ共如何なる事やら恐怖ともせぬと有る先はや今生から劔に身を裂るゝの修羅道をや斯ふ申す愚僧などなかゝ夫程信心は發りませぬ其位に成つても退かぬ佛道者は今時は珍らしき事殊に名利にさへ後世を願へと有れば兎角まづ命かける迄は遠ひ事名聞に成共佛道願ふ真似が宜と思し召しひた物談義寺参りも成されたが善し又聞敷さゝる事有らば施もよし心々

に叶ふ程善根の真似をし玉へ真似に就て話しが御座る

現の物真似曾我の夜打

有る人曾我物語の淨瑠璃綾釣を見物に行き彼の十番切の所が面白しとのみ思ひ込て五郎十郎が祈經を討た處が不斷目に見ゆる様に有た時日頃懇分なる者が突然來て酒に夜を深かしてつゝ其處に寝て前後知らず高窟して寝るにこの十番分好きの男晝寢に目が醒めて見られず折節彼の夜討の五郎十郎が淨瑠璃を思ひ出し昔の祈經か討たれしも此の如く寢入つらめ慰みに兄弟か討たる所を仕方して見んとふつと起て近邊に刀脇差有に任せ兩劔きめて其方は工藤では無が我こう曾我の某なり親の敵道さぬと刃をずらりと抜乍ら寢入たる者を打てば死人を切るに異ならず斯も寢る者が覺悟をせよと枕元の搦を跳上りて踏鳴らせば此男目を覺まし南無三寶と揮もせず迸り行きて次の間の屏風の間に飛陰れて震ひく差覗き去迎は人違ならん毛頭身に覺なし生れて以降鼠一疋殺したる事侍らずと掌を合せて色青く其興を覺せし顔を見て此男も可笑さ限なく是ハ綾釣の真似じやと大笑になつた各々に勸めるか此譬敵といふは八萬四千の煩惱の



敵劔の念佛題目の利劔なり彼の煩悩の中の大将無明や元品や塵沙や見惑や思惑の大勢  
 か群つて強き奴共の中へ信心堅固の鎧を着し頼み奉る所の劔を抱げて不借身命の願を  
 起し片端より風に木の葉の散る如く將基倒しと云ふものに真向にびたい水車雲手かく  
 なり十文字西から東北から南討平らげて安樂と扱それよりも古里の真女本覺の都に歸  
 る事何と目出鯛働で侍らはずや成ます働では成ますまい先此膈骨が定り申すま  
 い各々の成らぬが道理で御座る彼大将無明や元品と云敵めは聲聞や縁覺といふ修行者  
 さへ手に餘りまず況してこなた方の千人萬人の勇力ではゆかぬ事じや是がゆく位なれ  
 ば何れも人真似に成共名聞に成共後世を願へせられよ善人の真似をし玉へとの申さぬ  
 迎も夫れがゆかぬに依りせめて物事に善い真似をなされよ真似に成る共すれば今の如  
 く人違ひで御座らふと肝を潰す敵もあれば何所ぞで功を積み徳を重ねて名聞の中よ  
 り眞實の道理が現れて誠の道に入事が有ぞと申す事を悪心僧都も呉々仰置かれし事  
 なり扱真似にも物事さま／＼多けれ共此様に經文のしくれでも讀たり聞たりする眞  
 似か其中での善し少しでも悪真似をまたが悪い世話に佛の眞似はそれと人まねが成ら

ぬと云の金持殿や位高な衆の眞似己が分に似合ぬ眞似はならぬと云事じや今の眞似と  
 云は其様を結構な形姿の學でなし只心の内悪くもたず形に善き取り廻を移せと云事を  
 有歌に

賢きに移さばなごか移らざらん花の色なる山吹の色

と讀たる様にうつつさうず學ぶ可きと思へ、品形は面々の生れ付貧福は過去の業心はあ  
 とか賢きより賢きに移さばうつらざらん書中したるを能く心得て眞似をなされよと申  
 ことなり今の間まがひ無き様に身を持玉へ又眞似に付て可笑き嘲を申し聞ましよう

山椒に噎せる奴が頬髭

去座頭が餘處で山椒に噎せたる可笑きに噂えたれば賢し男其處に居合せ私その眞似を  
 まて見せましようと手元に幸い山椒盞が有たを手まめに蓋明けて二粒三粒つむ口元か  
 らにせて目を白く黒くにして舌を嚙る内此男誠に噎て息を内へ斗りまて水を／＼とい  
 ふさへ息出ずとろりと其處へ倒れて目を見詰たるに一座に有しあとの者誠に噎たるど  
 は夢にも知らず扱も似たり／＼扱も物真似が上手器用な男じやうつりますうつるいや



くと思めて最早短かよいに長々するよと思ふ内に爐の中へ倒け轉びたるにもまた側より真似と思ひたるに爐の煙にてこびんをやき剩る目録の類摺を烟となしたる体を見て是の誠さうなと皆々寄合引立水を飲せけるに息出まつ頭灰だらけなるを吹拂などして扱も真似じや〜と斗思ひしに嘸やちもつなからんと笑止かれれば彼奴まだ口が滅らず何と餘り以て面目灰にまぶし申たと秀句を大笑もて皆座を立其頃は近邊此沙汰の笑を催せり先此様な真似はいらぬ事今時の若ぬ衆何のいらぬ役者物真似同じ口てんがうと思ひ學ば、物讀のきれ端を彼處で一口爰で一口聞て庭訓の往來山高きが故に貴方に向て武道勝利を得ざる事子程子の曰く孔子は大學の古へのなんと取集めてわけも無く讀め共斯様の口てんがうの聞安し扱は謠でも彼處此處一町で十番程歌ふ位でも他の口吟よりハ聞よし苟且にも善い真似をなされよと申せ事なり

妄語の罪佛の誹謗の後世の大事

今晚の要義ハ妄語戒の大略講談致し述申さん妄語とハ妄に語ると讀て虚語つく事を戒め玉ふ經に曰く妄語の罪衆生をして地獄畜生餓鬼に墮して苦を受く遮人間に生るれば

二種の果報を得る一には多く誹謗せられ二には常に他人の爲めに誑らかさると有此心は虚言をつきたる者は地獄に墮ち扱餓鬼道に落ち扱は畜生に生る其間十年ならず三十年ならず百年二百年ならず無量無數劫といひて何千何萬年と云限無き間此三惡道を経廻り扱其より漸々這出適此世にて念佛聲經を讀む事を鳥渡耳に觸れたる功德に依て人間道に生れてやら嬉しやと思へハ今の二種の果報とハ誹謗せらるゝと云ひて誹もそしると讀み誹もそしると云字にて人にひた物誹謗らるゝ報を得二に多くハの爲に誑かさるゝとハ功のいた盗人めに何のかのと欺され句引されて手に持たる物も人に取られ當分我身の善き事と思ひて談合に乗る程の事皆街に逢て損をする又去ても身体を持損いては倒れ手に取りたる事も大ハづになり終に身をくつして路頭にイむ体となるを多人の爲に誑かさるゝとは説き玉ふなり何れも是を聞玉へ虚言をついて當分人を修すとの思へ共其報が皆已れが身に報ふて頭の上る事の無ハ皆大きな虚言をつく故に物事埒か明かぬ事なり假借にも偽を云はぬ様にし玉ふかたしなみ是に就て商をおしやる衆の不審が御座る虚言をついて後生が惡ふ御座らふなら私共はさうかみましますまいと有によ



り其れハ又何故に問ば去れば商ひ致すからは譬へば五十目いたす物も六十目も七十目共申阿房らしぬ田舎男かあれば此男目をぬかずハ抜く物の有まいと思ふて十奴の物でも一貫匁位に云懸て九百匁程に直を付ても又不足らしき顔を態と致し恩に掛けて負けて遣る態を致し扱同じ都同じ國同田舎の内にては商賣の功の行程此様な虚言を申かけ又其外人の知ぬ内説の算用合の處でも我なから是はかいて出る程な虚言じやがど存乍ら業の事あれば申さぬハ塚あかず扱今晚の様なる妄語の誠を承へれば怖い凄しい罪を得まするれば是ハ何共了簡にあたいませぬが何卒佛も爰をバ談合成されて下されませあんだかと云人が御座る此不審も無ふて叶ハぬ律義な言分で侍る此虚言が罪に成か成ぬかの穿鑿をして聞せましよう先虚言と云に様々御座る、此品々から申揃て一々道理を以て了簡いたす返す、此處が聞程萬事に通ずる肝文の處難けれ共心を沈めて聞玉へ各々の徳になつて永々の苦を脱る善根耳の垢を取て聽聞あれ先釋迦如來世に出玉ひて一切衆生に法を説て聞しめ玉ふ惣して説法の義式で先禪定に入て今ハ何を説く聞せた物で有ふと分別なさるに如來の御心にハ簡短に三界唯一心の道理を説て聞せ

んと思し召れ始に華嚴經と云ふ頓大の教を説て聲聞緣覺に説聞かさしめ玉ひたれば嘔吐の如く一切合点をせず其處で佛の思玉ふハ眞實の旨を説て聞かしめては結句衆生等が合点行かず去らバ氣に入様に何ぞ方便と云て佛の御心には思し召さねども先當分の氣に合して何成共つく、口に任せて端緒なる事を取付て無き事を有と説有る事を無きと説て見たり又有でも無し無でもなしを説く昔の物語を今の咄のやうに作り成して五十年の間御説成された今時の人も賢しき評判にも如何に佛の御説成れたとても是ハ餘りな虚言をつかせ玉ふと云人も有る虚言に種々有と云が爰を先佛の虚言とは今の様に人の機に合せて兎にも角にも衆生の爲の故に善かれかし佛になれかし善心が發れかしと善根勸の爲に御説なさる、虚言ハ虚言といひ乍ら其虚言の御蔭によつて三界の火宅を出る橋となり生死の海を越ゆる船となりて終に極樂や寂光土や實報土と云結構ある世界へ生れて苦を免かれて樂を得る爲の虚言なれば先是ハ結構なる虚言では侍らずや然るに世の中の虚言と云ハ人を誑らかして成とも街てなり共己が爲の宜き事斗り心に掛て先方は身体が潰れう共首を斬れう共構ハす他の害になる事を願みず其者



百十八

の氣の附かぬ様に虚言をつきて修すを世界の虚言と云ものあり虚言と云名の同事で大ふ心持の違ふ事は天地黑白の相違が有る爰を分別して見れば佛は人の善く成る様に虚言を説きねぬしの御身に係らず又凡夫の虚言の已を立んとて人を例すとの差あるの格別の穿鑿扱商人の虚言には先懸直の事但し是は何を買ふ者も見世に立寄から覺悟して定めて商人の癖懸直を云で有ふ程に此方からも宜い加減に直限べしと互に合点附なれば先にも少しか多加ぬかる事でなし然れば是は懸直と知り乍らの上なれば世の中の虚言の様に欺し誑かすとの違ふて有る世の虚言は是を知らせぬ様につくなり又或所の見世には合点付くの上なればこそ懸直なし空直なしと書付して置所も有其外の懸直が有るに極まる上へ少しも虚言と云物で無い程にかまへて虚言と思す共随分共懸直いふて利を得るが肝要あり何程正直に商しても利が無ければ妻子を養育兼或ハ丹那に損を掛け拂ふ可き所へも拂はねば其れが結局罪になりましようぞいかなふ人の恨を含む事で侍る斯く申てもみすく活馬の眼を抉る様の事ハ餘りなれば懸直と云程は面々商賣する人の心持有可きことなり殊に出家沙門を高く利を取れば珠數の身とて其儘かへ

百十九

りて其家滅す此明さ暗さを思案して渡世の爲の事なれば未來の事は氣遣なし惣て害にあらぬ事や人の爲になる事嬉しがかる事可笑敷事面白きこと心の和ぐ事は少しも罪にはならぬ程に兎角悪い虚言をつかせらるゝ杯の誠なり

武士の謀計は出世の本意

扱侍は殊更うろをつくは盗人と同じ卑氣あれ共敵を討つにハ謀計と智略とて種々謀事が有て随分色を見取られず謀つて討つ法なり討負せると其虚言もへに大きに名を上げ手柄者と呼ばれて宮祿に進むは美事な物なり丁度商人の懸直をいひても内を守り外に向て損を掛ぬハ手柄と名付廢れたる家をも立て人を救ふは却つて善根なり商にも種々有て已れ一人好くならんと利徳を心に掛け人の損失と構はず手前へ取込む分別斗りる者ハ一旦の依怙ありと雖終には月日の御罰を蒙る者なりとの託宣を忘れず我も仕合をし人をもよくなし平等に世を渡る可しと心掛たがよし人に損かけて已が仕合をするは色品ころかわれ二枘二秤をつかふも同罪なれば商の内にも是等の事ハせぬ事なり是ハ人に知らせず目を眩ますもハ買者も知らず買直ハ合点つくなれば人と知て直限る隠



すと現われて有るとの相違にて罪にならぬと云事明白なりとある是で御不審が濟だと云物なり人間といへば同じものかと思へば人間にもさま／＼品位が違ひ都媚妓と云へば誰も美しくしひが思へば田舎にも劣るも有り佛と云へば一佛に限らず十方の菩薩佛にも五十二位の差別がわかれ其外にも名は同じ事でもさま／＼違が有る是を同名異体の法門と申す又申さば五逆と云は佛の身より血を出す科も其内ぢや釋迦の身より血を出したる者は彼提婆と云ふ悪人大きな石を投げて御足の指より血を流し其故に地獄に落られ其れで悪い者をバ提婆と云ふ事なり然るに釋迦如來入滅の時提婆と云醫者何卒も一度蘇生玉ふ可きかと思ふ療治の餘り針を御足にたて、血を出したさあ提婆か悪も同じ様に地獄に落可しと思ふ所に案に相違し詰句血を出した功德によつて上へ生れて勝妙の樂を得た爰を以て合点したがよい尤も佛の身より血を出した事は同其事なれ共提婆の佛を猜みて血を出し提婆は御命を惜みて血を取りたり血を出すは同じ事で心が格別な依て地獄と天上との違ひ出來た先其如く虚言をつくは同じ事で善い事のため人の爲め善根の爲につくは同じ事でもよいと云事を示させられうが爲め

一 休 鯉 を 服 し 引 導 の 事

に提婆をば地獄に墮し提婆をば天上界に生さした者じや是は先經の心じや虚言をついてもつかいでもの事につかぬが善し随分と律義に勤めたは當分の偽り飾りたる様に美事に無けれと神佛の御心に叶へば現世に福徳を得後生には極樂へ目出度ふ往生し成佛を遂げて常樂我淨の四徳波羅密に誇り惜しや欲しや可愛やの念慮も無く常住不退に微妙の說法を聽聞し信心益々進み後々のつから又衆生利益の心も發玉ふ可しあら羨ましの境界や南無阿彌陀佛と云此度各位の望により五戒講談を荒増し述べました兎角大兆經の中の種と云種の字を忘れず悪い種を播ぬ様に善き種子を播せられよかし今一冊は愚僧が心見の法語なり皆人此文を見て邪見外道の思を直きに活佛となる教の書すて其善き事を知らしめん爲めあれバ文の誠を見玉ふ可し穴賢

一 休 和 尚 十 二 三 の 時 師 の 坊 に 使 へ て 讀 書 手 習 な ど して 在 せ し 頃 師 の 坊 夜 寒 の ま じ 乾 鯉 を 獲 物 に し 唯 一 人 参 り て 一 休 へ は 豆 腐 斗 り 参 ら せ ける 一 休 是 を 見 玉 び 凡 出 家 の 腥 ぎ 物 を 食 へ ざる よ し 佛 の 誠 め 置 かせ 玉 ぶ に 和 尚 の 乾 鯉 參 る 事 苦 し け ら ず ば 某 も 賜 は



らんと申され屍師の坊可笑く好き所の不審併し汝等が様なる小僧の身として腥物を喰ふ時は忽ち割當るなりと仰られける一休眉を顰めて暫く思案し問の玉は、同じ人間の身として小僧にのみ割當るや老僧こそ割あたる可れと嘲笑在せけれ師の坊宣玉く幼なき身として心長たる間やうかな去れば愚僧とて御救の無れ共我等の引導をして喰なりと有れば其引導は如何なる事やらん少と承りたしと有る扱く、和御前は小癩なるんや然らば引導して聞さんと一杯盛り乾鮓を箸に懸け述べて曰く

汝元來枯木の如し助けんとすれ共生て再度水中に遊ぶこと能はず愚僧に服せられて佛果を得よ喝と宣玉ひ

た物にりける一休熟く、と聞て又眉を顰め思案して夜の明るを待兼て急ぎ魚の棚へ行きて夥多なる鯉を一駄買とり來り味噌汁を拵へ彼の鯉をひん握り菜刀ふつ取伸べ細首ちうに打落さんとせしを師の坊見付け是ハ沙汰の限り昨夜も示せし如く幼き小僧の分として乾鮓だにも無用と云しに其生物の働らく魚を害して喰はん事勿体無しと戒め玉ふを一休少しも騒がず我等も引導して玉はれば苦しからずと曰ふを師の坊も呆れ果て

其れハ何と云引導をや若然らば赦して與ふべし示しに依て浮ますれば法に任せ逆さぬぞとれいへの一棒を小脇に挟み引導如何にと責め玉へば一休少しも恐れず去らば引導仕つらんと左に鯉の細首握り右に菜刀をまやに構へて曰く

汝元來生木の如し助けんとすれば逃んとす生て水中に遊ばんよりハ若かじ愚僧が糞となれ喝と鯉の細首水も溜らず打落しぐつゝ表て澤山喰ふて空嘯いて在せしかば師の坊是を聞き扱も善き引導ぶり手替りなる心得かな昨夜の我等が引導にては乾鮓か佛果を得ずして糞と成べし汝が鯉は糞とはならで佛果を得たり扱々活機なる人や禪僧なるや小僧殿とて彼の一棒をかりりと捨て舌を振ひて宣玉ひける三年になる鼠を今年生れの猫子が捕るとハ斯事をや兎角に汝ハ凡夫にハ有じと感じ玉ひける案の如く程無く天下老和尚と自ら言る程の活祖師一休と名を千載に傳へ玉ふ誠ハ凡夫ならずと物語まける

四休居士の事

一休諱は宗純と申せしが別號を一休と名付る或人來て一休と名付玉ふは如何なる御心



得て侍るやと尋ねければよくこそ尋ねや自ら一休に深き心も非ざれば語りて聞す  
可きやうきも無し聞玉へとて歌一首

百廿四

有漏路より無漏路へ歸る一休雨降ば降れ風吹かば吹け

とあそばしければ彼者聞て扱も面白そう成御歌や有漏無漏と如何なる事にて在しけ  
ると尋ねければ御側なる拂子を取て彼者の顔を撫玉へバ目顔皺めて俯ける一休拂子を  
引合点かど宣へばいや何事か成るゝと驚きたる斗にて何共心得ぬと有れば其何共心得  
ぬ所が無漏路なりと驚く所が有漏路なりと仰られければ彼俗肝に銘じて有難や即  
時に大事を授かりけると悦びて扱御歌の一休と心得候雨降らば降れ風吹かば吹けと  
何成御心にて侍しぞ去ればよ纒の道の事なれば雨も風も厭ふ事侍らずと仰ける扱も  
有難き御歌や恐れ乍ら只今授りし心を一首申して見んと申されければ其は奇特なる志  
やと有は彼俗讀めり

有漏路無漏路一休ぞと聞時の十萬億土寸先きと知る

と吟ずれば一休聞召し善哉〜とて尻餅ついて悦び玉ひて誠に斯る例唐土にも侍りし

四休居士と云人有けるに山谷と云人其四休の心を問ければ四休笑ひて答曰く麴茶淡  
飯飽即休補破遮寒暖即休三平二滿過即休不貧不妬老即休と  
申されければ山谷が曰く是安樂の法あり夫れよく少時は不伐の家なり足る事を知るの  
極樂の國なりと感じて親しく語りて四休の心を詩三首に作りて歌い樂みしとかや其詩  
に曰く

富貴何時潤三燭 骸三守錢奴與抱官 因大醫診得人 間病安樂延年萬  
事休

と侍りしに能く似り一休の心を問ひて今其方の歌讀む事實感じ玉へば彼俗申せやう一  
休の二字を尋ねて四休の四字を知る事誠に求ずして得を幸と注せしとかやと悦びける  
が彼の四休の内三平二滿とは如何なる事やらんと問ば夫れ其方等の内義の事よと宣  
へば合点參らず醜惡と云心で侍かと尋るいや左に非ずとこせの事なり誠に三平の兩  
の頬と鼻二滿の額と願よ扱も珍しき故事なり去乍ら女共に聞せなば一休様を誹り申可  
しと笑ひ歸る

百廿五



一休しの字の掛物の事

一休或時山姥の謠を作り玉ひし時廬山の中よき沙門有しが談合の爲め登り玉ひ宣ふは  
 佛あれバ衆生有り衆生有バ山姥も有と致しつるが此次の如何致さんと問へ玉ふを彼人  
 も流石の僧にて定めて柳の縁と成れつらんと有を一休も呆れ玉ひ扱もよく推し玉ふ物  
 かな柳の縁花は紅の色々扱人間に遊ぶ事と致し候とあれバさこそと云て興ぜられし誠  
 に同氣相求むなる志實耻かしく思はれける扱一山の僧一休の登山を聞て一休の兼て  
 隠れ無き能筆何にても書貰へんとて何れも視紙を持来り頼みしかバ一休思召やうは聖  
 道のあて字とかや定めて文盲成法師共ならむ何がな書て得させんと成程讀難き一書を  
 遊ばし遣はされける一山の僧集り斯る能書此山に來ること難かる可し後の代迄も寶物  
 と成る可き語を書かせ置く可しと云其中の老僧の云へるの先より各位書貰いけるは一  
 字も讀めず又語も短くて此山の寶とも成難し如何にも大文字を長々書てたべと頼まん  
 讀難き文字有ても詮なしと何れも談合極め一山共に望みけれバ一休是非無く然らバ紙  
 筆いか中く古大師の書き玉ふ七八尺の大筆有り紙の何程にても接ぎ申べしと有然ら





二 休 笑 話

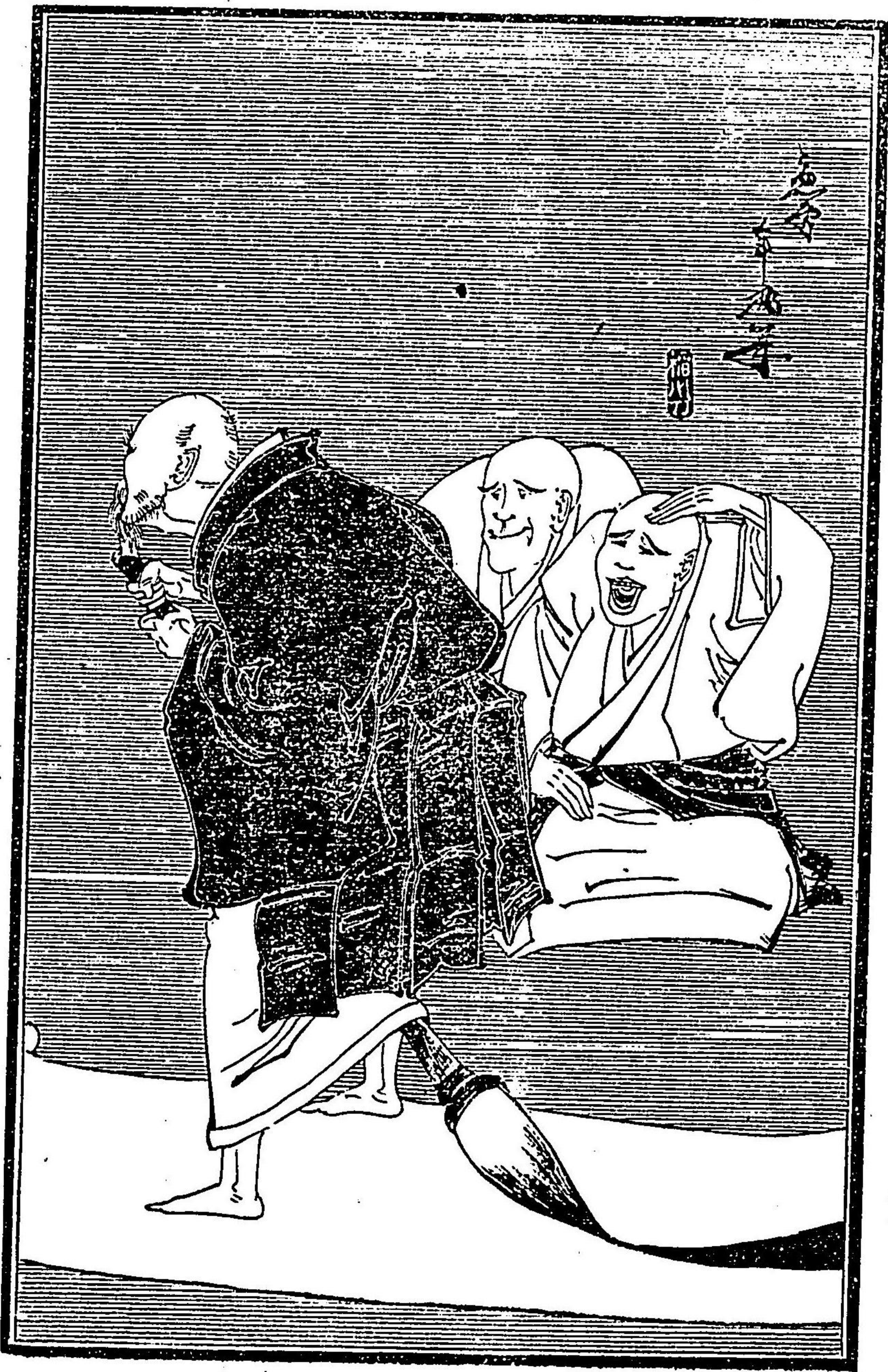
ば紙を接ぎ玉へと望の通り長々と接ぐ程に敷山の會堂よりとつ坂本の人家迄長々敷も紙を接ぐ去らば筆を染めんと墨湛浮と含ませへたと紙へ書付一山駈けて不動坂迄一筋に引かれて讀めるか法師達と問玉へはいや何共讀めずと云を又墨つぎて又不動坂より坂本迄一筋に走り引に引き讀めるか〜と喚玉へは一山の法師肝を潰しいや何共讀めずと答ふ是いろいろはのあさきの行に有しの字あり長々書て讀め易きは是なりと宣へば皆人興を覽まし扱も聞及びしより滑稽人かなと一度に咄と笑て興をける今の世迄も其しの字敷山の寶物と成て有る山法師達も望みしなればいやと云れぬ御作意と感をける

一 休狗子佛生の狂歌

或時一休丹那に狗子佛生の話を授け玉へしに此人狗子とハ犬の子なり是に佛性とは何共合点參らずと申ければ去らば聞て見玉へとて一休歌に

犬の子にあやかると人の所業こそ佛とも成地獄へもいれ

むかい石の犬子ハ又目が明ぬかた壺に飯入てころり〜やと仰ければ今日が明きてい叔狗子の處は漸々目が明き候へ共超州の有無の處ハ千年工夫仕りしか其愚智の我





等得道仕る事ハ成難しと申しければ一休聞し召し歌讀みて聞す可し此歌を常に吟じ心得られよとて歌に

無といへば無とや人の思ふらん答もぞまゐる山響の聲有といへば有とや人の思ふらん答も無き山響のこゑ

と遊ばしければ彼者暫らく工夫して然らば有共無しとも知れぬにて御座候かと申ければ

有無を戦する生死の海の海士小舟底抜けて後有無もたまらず

と仰ければ彼人此歌にて得心して一首

有無ぞ知る何思ひけん起列も無かりし先の犬の一聲

と申しければ一休聞し召しお靈に豆を一口入れけるよと笑ひ玉へば丹那も禮拜して歸りける

一休退剱の事

一休ハ金を山に捨て玉を淵になぐべくもあらん御きざしなれば元より一鉢の儲より兼

て時へ無し早や大晦日の暮方に成ければ元朔に何を参らせん様も有らず一僕悲しみ八つの木は一合も無く青き銅は一錢も候はずと手も力無く申せば一休聞召し夫れハ歎く事に非ずいざ出よと宜ひ一棒を振りかたげ山家海道へ出玉ふ折節土器賣通りしを適そまゑと逐駈彼者驚き一荷の土器を捨て逃げゝる扱こそとて召連れし僕に荷はせ是れを代なし初春を送らせ玉ふ誠に死するハ何時と限り無し去る大名果て玉ひけるとて一休を引導に請じけれ共参るまゑき御返辞何とて御出無きぞと尋ねれば錢さへ玉いらば行かんと答玉ふ安き事何程御用なるぞと申せば僅一貫は文玉はれと有畏まりしと持來りしを受取り彼の逐剱去玉へし處へ行き土器の籠に錢を括り付け札を建てられける

先月大晦日の夜追取せし土器の代一貫八文但し一枚に付一錢つゝ帳消玉へと書き付け傍に一句貧の盜ハ偷盜戒に非ず如何となれば戀の歌も邪淫戒には有らざる證據有慈鎮和尚とて尊き聖人よめる歌に

我戀ハ松を時雨の染め兼て眞葛が原に風騒ぐなり

と侍りけん然らばとて邪淫戒を破りたる人とは云難し我も貧の盜なれば偷盜戒を破り



りたるを云間敷きなりと書き置れ扱引導に出玉ひて曰く

人六道錢とて六錢出す汝の引導錢とて一貫八文三進か一十扱は汝人に一貫二文勝れり  
十方に道あり行きたい處へつとへ行げ成佛正に疑い無し是如何とならば地獄の沙汰も  
錢がそると宣へば皆人驚き扱も滑稽人やと感づける

牧溪の繪に一休讚を書く事

或人牧溪の御筆なりし靈照女の繪を持しか一休の活機ある事を聞き人頼みして讚を云  
ふ何より安き事と彼繪を詠めて筆かつ取書さらくと書き玉ひ彼の人に渡さるゝ有難  
と戴きて友達共を呼び寄せ扱も一休老の氣の輕き御僧日頃の繪に讚をなされし各々拜  
み玉へと頓て床に懸け各立寄見るに

汝が親の策作り馬祖に欺れん寶を海に捨る阿龐居士が娘

と遊ばしければ皆人横手を拍ち扱も滑稽たる御事かな庸居士も靈照女も唐土にての賢  
人と言傳へし定めて左様の心を遊し玉はんに格別なる御事かな誠に天下老祖師なりと  
笑ひ覺

一休布袋の御勸の事

一休御母義の淨土宗にて有りしとかや一休常に假名草紙の法語を書て遣はし又の水鏡  
と云草紙を送りて佛の道を教玉へ共まか御悟も無く明暮只念佛をのみ申過し玉ふ  
有時一休來り玉ひ色々の咄に一段の思入念佛にて佛にならせ玉はん事疑ひ無れ共此御  
處より愚僧か庵室へ御出有んに常々道を知らせ玉へバ苦も無く虚々と歩み玉へても庵  
へ來らせ玉ふは何の疑ひ無く御越あらん又遙か田舎の人我庵を尋ね來らん如何程道  
に迷ひても尋ね逢なり併其尋ぬる迄の心苦しき迷ひなれば一休が示めしを悟り玉へと  
有れば然らば何にて仰せられよと宣ふとあらば一旬申して見んとて

目なしとち〜聲についてまじませ

皆人其悟る習始の父母も無くどつと以前の我身の何成と申に知ぬ事か申さる可かと云  
を何物ぞと雖と云ものを知すと答むる者も知らず然れば釋迦彌陀はよしなの問ず語や  
と云者の問ず語かと云ければ一黙して居りけり此心を見玉へと仰られければ御袋の歌  
に



云ば云すいのねハ胸に騒がれて思のね先や佛なるらん  
と遊バしけれバ一休悦び給ひて取敢へず一首

今ハ早や心に掛る雲もなし月といる可き山路無けれど

と遊ばし法語水鏡を興へ玉ひ彌々御工夫ましませとて我庵へと歸り玉ひける

夫嫁争い世常の損耻

扱も月日の経過ハ手間の入ぬ事暮かと思へば明て晝にゐる又ハ時七時の鐘ハ諸行無  
常と響きぬるを餘處に聞事かな兎角此無常と云事をさへ一心に忘れねば餘り後生に遠  
き事ハ無れ共世ハありと千年萬年も有通しと思よりあらゆる罪業を作る事なり能  
氣を付て見給へ目に見に耳に觸ハ事一として存命止まる物で無し人の死別れ行は昨日  
迄語り慰む男女今日ハ空敷なり頓死ハ物を云乍も息絶様の事ハ世間に多き事なり櫻の  
散木葉の落露霜の消へ雲煙の行衛水の流の歸らず泡の果敢無く淵は瀬にあり或は山も  
崩れて海に成り川も陸地となり長明が方丈記を見れば地震火事に幾度か幾千萬の家居も  
滅し主と家とを朝顔の露に譬へて書たる如く一物として常住なる物ハ寄さばるもの事







皆無常なれば我命も頼まれず何れ野邊の土と也煙と昇らん然れば放心と何時も十三月  
 に思ふて暮内に彼無常の刹鬼か攻來時俄に周章騒て詮無事なり兼て臨終の用心か第  
 一じや談義説法も明日の日は有と思ひ油断して夕を待て死したる時の悔ても甲斐無き  
 事と常々合点し玉ふがよし或人の歌に

あす有と思ふ心に纏絆てけふも空しく日を送りけりと

云にて驚かれよ知れぬは人の命談義を聞も今日か限なると思へば一事を聞も大切に思  
 ふ道理なれば此心得かよし切談義話打續いて大悲經の文の中の種の字に心を付咄まし  
 た昨夕の彼人を殺し子を殺せし事に付て殺生の報を申ましたが洵もの事に殺生戒より  
 序に五戒の姿を話せとの懇望もへ今晚邪淫戒の處大体大略申さん惣じて戒律に就は五  
 戒八齊戒二百五十戒五百戒十重禁戒四十八輕戒とて異類異形の戒などの梵網四部律等  
 と夥多なる中に儒にへ五常を以て國を治め佛法にへ五戒を以て惡を止めさせ其意は  
 同物なり先此邪淫戒と云文字へ邪に淫を犯すを誠ると書我妻に有ぬを妻にする事を邪  
 淫戒と申侍る去程に此戒を在家戒共中なり出家には用ぬ物かと思共出家にもささく

二 休 笑 話



有是は唯各の身の上と思玉ふが善い等の事妻といふは女の手前から男を妻と云ひ男の手前から女を妻と云は男女通ずる詞なり地獄判官の妻の方へ文を遣しけるに女の方より返事の歌に

さなきだに重か上の小夜表我つまならぬ妻な重ねぞと

讀て越たる何れも覺の有事此様なる不義の事を爲る故に昔今の代まで有れぬ死をする事で侍る京大坂に殊に繪草紙に賣らるゝ者數多有り何國も同じ色の不義現在に耻を曝すの朝間敷ことなり扱未來の事は經文に邪婦の罪尻生をして地獄餓鬼畜生に墮つ若し人の中に生るれば二種の果報を得る一には婦貞良ならず二には二の妻相争て己が心に隨はずと説給ふ始に婦貞良ならずとは今生にて人の女房を盗みたる者後生にたまゝ人間に生れて女房を持て共其女ひと又餘の男にひて我心に隨りぬ様になり其故に腹を立て又其密夫めを押して括てと心意の焰を燃様あるを婦貞良ならずと云義なり是皆報様の品を現す物二に兩の妻相争てとは或ハ本妻の妾を妬み妾は本妻を猜み釘を打たり毒害などして猜妬みたるは大なる禍となる誠に國に讒言の臣下あれば君必ら

二 休 笑 話

一 休 笑 話

す亡ぶとの聖人の詞下々に多き物の夫婦争なり大きな聲をして括合やら泣やら取銀を鼻に掛て後耻しき事を忘れて常の隠す事も嘘さちらし近處近隣の外間も褒貶も顧みず咎も無き錯を割やら釜を投ふるやら道具家財溜つた事であし何事かと思へば彼情氣より事起ての騒動是は早や逆も堪忍もせまを又添れた時宜でも有まをと思へば何時の間にかやら啼寝入してたつた一夜の内に中直り何の氣も無い顔して居る折角人のあつかひ中直しの時角も生る吉相して明れば其に引替小咄有の扱も可笑しい事と人の指差をして笑ふを知らぬと云其人も己が非は見ねぬものにて何處の夫婦争も皆似たる事是等の者終ひ口舌か有れば面々家職を怠りて如何程損の立つ内證のつぶれやと云れず然も度々有故に終に家の亡ぶる端相と何れも思ひ當り有る可き事なり夫れ迄は遠ひ事先此邪婦戒と云事は天下の御法度なれば道を志し義理を立んと思ふ程の男は念も無い是等の非道に爲ぬ事や一心さへ亂さねば某迷の止と云咄を申さん

一 休 遺 言 自 畫 自 諷 事

去人紫の御寺へ参りて一休遺言共を拜まんと沙彌小喝食をこま付て自畫自諷拜み侍り



しに頭べに長髪にして眼を急度見出し薄赤き衣を召丸竹の柱杖をつき椅子に腰を掛侍りて殿に柳は緑花の紅と遊して一首

行脚事畢今日時節折主丈子燒六月雪

廬堂之再來天下老和尚一休宗純未後書之

と遊しける此遺言の奥に我死て百年過て唐士より禪師來らば我再來と思へ又二百年に當る年我死骸を土より掘出て見べし若形朽たらは言置し語共火中すべし大方死骸損ねまじとの給ひ置しと也其後隱元禪師來朝なり百年餘りと仰せられしに相違なし隱元の一休の再來かや

一休の木像大徳寺に移し作りける其頃諸且那或の弟子衆迄一休和尚の御剃髪を守袋に納め持けるが彼の木像を作りし時御長髪ちやうはつの躰なれば直の御剃髪を御髭眉を御髪に佛師が植けると也誠に百八十年の余其毛の色替り給へねは御死骸を掘出して見迄もあし一休常の御志を見奉るに寒山子の風狂に替る事あし寒山子の詩に曰

我心如寒月 秋水清無底

一 休 笑 話

と侍りし一休の道歌に曰

我心其儘佛生佛波をはあれて水のあらんや

と遊し給ふ是寒山の詩の心也寒山ふんざんの文珠なりといひ傳し一休の定めて普賢成べし誠に有難示しと聞人感じけるとなり

一休弟子林月が事

一休の弟子に林月と云し御坊雅時ごぼうみやま子塩鹽の口を切て夜々盜祇られしを和尚見付給ひて如何に小僧若年にて是をなむれに必ず中風を煩目口喘手振ひ物書共かゝれず書物讀共よまれず御身は物讀手習の半なれば堅く無用也とて寢間の奥に隠し置給へん幻心に怖く思ひて有るなど工る折節小僧腰を打でと仰せられけるに彼于塩の意趣を解バやと思ひいや中風が起り候やら手震ひなへで中々打れさうにも候はず其體何處彼の所も也がみたりとて目口を擧て見せられける一休腹を居兼棒を以て追懸給へは遙々逃延て一首  
毒味嚼を舐て嚼しは只身のひしは知ぬ故なる

と口吟門柱に抱付て泣れたりしに和尚も此歌に涙を流し一棒をからりと捨て天晴活氣

一 休 笑 話



の智者候を許申とて内に入せ給ひ其後膝元に呼付仰せられしは重て我意を背ならば丸裸になし里へ送り候べし今日の許申ありとて歌一首

岩のなになねねたる松の木直に延ねは用にたりざる

斯の給ひければ痒々涙を袖に拭ひ折落て見にけるに此跡なき有様悪からねは一休も望し于搦紙させ給ふ所竹齋御見廻の爲一つの器物に封を付有る無かと書付持参せられしを一休林月が發明を御覽せん爲中成は是如何成物を御弟子傍より書付を見て曰去ば有無の二つは元是一味成べし有に寄て曰ありの實也が無に取ての時あらん梨成べきと答ふ竹齋舌を振ひ然者其數の幾箇と問七ッ八ッ有べし偕の違ひ候也とて蓋を取れば梨十五あり先々數は合ひ申さずとて笑ふ林月の曰何と七ッ八ッ有べしと申たるを違ひたるとや七ッ八ッ合せて見れば十五成すやと有れば竹齋も手拍てを笑ひなから一首

言葉に花の咲いの七ッ八ッ青い我らにいふかひもなし

斯稱美して肝を潰し殘る所なき大智者の玉子成かれ誠に一休の御弟子にいさもこそ有べき柳積の二葉よりと申も此御方の事成べしと賞慰み有内庭前の植込より熊蜂幾箇共

なく飛出たりけれん林月竹齋に梨の追報せんやと思召しされあ蜂の有所の幾何竹齋聞て去の向ふ成梅の木成と云去バ見て參らん逆竿竹を荷擔走り出彼木を二ッ三ッ打て是にての非すと云然らん櫻成べし又打ても是にも非ず去ば松の木にて候べし急て御覽候得と云いや此にも非ず我を騷り給ふか逆づか〜と走り寄征ぐらを取へて答へ幾何と問竹齋にくこと笑ひて或謠の本に曰出其時の蜂の木は梅櫻松にて有しよな逆昔よりも慥に知ざる程にと云たりければ怔ぐら放し其返報に顔へ梅干とて肴に出せし鹽梅を投付て逃入給ふ兎角頓作成生れ付とて尊みける

林月餅を服し絶入の事

一休和尚或時竹齋が所へ林月坊を遣に遣はし給ふが折節夜るの事なれば闇きに迷ふ道の邊物凄じくも過給ふに或家の軒下に男女二人立忍て密々物語せしを怪しく思ひ差覗し給ふに衣迦たる様常ならねの彼者大きに驚き穴怖や入道眞黒成化者こそ來れとてわつと云て逃去ける其跡に重箱と思しき物を打捨置たり林月怪しく思ひ蓋取みて服を抱へ獨笑て夜中甚怖かりしに天道の御恵にや斯るあづき餅の四五十も得たり此儘置たれん



迎よも取にへ戻り侍るまじ道すがら賞翫し餘りたるをば飢たる非人に與にん物をと衣の袖を負ひ片角より手を入れ取食々人め忍ぶのなま咬選しく吞込れし程喉に結て有と不殘作意秘術を盡し吐出さんと損とも更に出も入もせず既命も危く大神の厨子といふ所の木戸の片傍に弾かへり齒を嚙はり目をむき出しうめき給へば夜番の男是を見付倒者ぞと心得未息の通内に何方へ成共追やらんと種々云て引立れ共一切返詞をし番太郎もすべき術なく町中の人呼出ける程に大勢出立寄見てさまで死する程の事も有べからず熟柿くさければ半醉なるぞ是非に引立追やれと口々に云程に後へ棒を取直し林月の背中を澤山に打たりける時成かれ鬼に腰といふ世話の如く喉成餅は棒の響にて三尺斗向へ飛出ける是にて胸ひらき夢の現たる心地して仰せけるは儲々危きめに逢申せし我ハ紫野の邊に草結せし鉢ひらきの坊主成が持病の痰さし起り既に死なんとせし所をあらけさき打擲に逢てこそ不慮に吐出したれ先々是も名々御影と宣ひけれハ人々先何者成を顔を見よと挑灯差上見れば大徳寺一休老の弟子林月坊にぞ有けるこハ思ひ寄らざる御事にてまたハか棒を負ひ給ひし也何と痛ハ無候也いや少も痛み候らハず先程より

申通り兎角御影也我棒を負たる事元より身に大き成科の有故なれば誰を恨みと思ひ侍らすと仰せける人々扱何をか科をなし給ふ去バ去所にて是を盗たる故なりと彼重箱を出し給へは何れも興をさましてこハ何たるさもじき事を成れたるを扱は此餅を咽に結給ひたるに相違なし夫其所へ飛出たる物みよや連尋ね出し見れば輕子成になつて有り能も偽給ひ持病の痰などハ宣ひしぞ實一休老の弟子例の輕口を宣しとて大笑したりける林月坊聞扱ハ偽と思し召しけるか此坊主は慥に餅と存する也我常に咄せし人某を持病もちの痰持の杯といはれ候得バ餅と痰と別に替らぬと心得侍りたると仰せけれバ何れも尼の命也思が通へバ口がへらぬと横手を拍額抱へて笑ひける其時林月坊斯宣ひて歌一首

喰程の數さへなくば中々に人をも餅も恨みさらまし

新運ね給ひ耻しげも無歸り給ひし何に廣き御心也とて感しける跡に拾置給ふ餅ハ番太良骨折の勞はらしと終夜喰込腹太くして思ふ儘なれば兎飲の虚言も心慰めとて

あたら此餅と小豆を同くはあはれひもぢき人に分ばや



林月坊冥途の旅

林月坊は一休弟子の中にも頓智の學者活人成しか或時風邪の心地と難み遂に本服をく身まかりけり覺束をらぬ冥途の旅三津の川に差かゝれ獄卒來り娑婆去りし林月坊此方へこよと引立闇魔王の前に連來る見れり左右に胴舂はなく赤白の所二ツ有扱の聞及ぶ見る目艱鼻御座めりと例の即時に一首つらぬ倒成罪人の耳に鮮明入けり其歌に人間の邪正を見る目嗅鼻を犬にまたらば天下一もつ

と言を嗅鼻早く聞取何條林月坊我々を犬に譬る事奇怪也夫畜類は三世の諸佛十方の隨垂に疎まれ鼻眼の有れ共臭ものを身知らず飲食し淨き所を思はず糞尿を落し人にても心臭を犬畜生といへり某を其類に譬ふる事悪しと目を見出し怒る林月坊生たる心もなく赤面し申ける御説尤も去ながらけた物に擬ひ甲とても下心を含みて一首つらぬ申也夫を如何にと申に獸の中に犬こそ人に愛敬あれ人重寶がられ高位高官に交り候得者こそ代々の帝爰彼所の御狩に犬社先達奉る夫故御鷹の鈴犬の鈴と申あだにも申候はず鳥にては鷹獸にては犬に上越物なし又用心の爲に犬を飼置候得ば聲せぬ夜半の一

一 休 笑 話

一 休 笑 話

眠宮寺堂の門の内外殿が伏家の廻り迄人を咎むる里の犬聲凄じき夜るの道去ばにや昔紫式部と申せし女官の作し源氏物語浮舟の巻に宮の御馬にて遠く立給へば里びたる犬共の出で罵りるもいと怖しと隠れし也唐土にては貴人秘藏し犬一疋に五人十人飼を添紅の綱を付絹布を着せ起臥しぬ犬なれりこそ事無持離され候此心を以て連ね申せしと口賢く申ければ鬼神の王道なしとやら向後嗜み候得と云林月坊物をも曰す口を浮物と思ひ一口の中にて人の愚癡の知る物なれり深愼むべき事ぞ何としてか林月坊疎忽或狂歌を詠嗅鼻にまかられしぞ去ながら人毎に必ず有る事也人の上を種々惡善をいへ共我身を知ず論語讀の論語續すと云事もあり或歌に人の上鏡に掛けていふ人の我身の上は何曇るらん

頓死豹虎之事

都二條邊に乙戸源助と云草細工有ける馬の鞍褙同鞆又鞆杯品々毛皮道具致す物なれば虎の革豹皮熊獺虎其外何にても毛草其數多く持たる者頓死して地獄に至りぬ鬼共是を八苦堂にて見付小腕な引立連て行其鬼共の腰元を見れば奮たる虎豹の皮の毛脱たるを



腰巻にして居たり源助之をみて扱も〜悔しき事かな是程と存候は、持參皆々様へ進上申べき物をと吳々悔しさうに獨言をいひける鬼共聞爰成男何事に左様にいひけるぞさん候某の都二條邊に靴屋源助と申て隠なき毛皮細工にて虎豹の皮熊獺虎其外毛皮共澤山持候を各々様と程重寶に思し召せりこそ舊び破たる迄腰に遊し候左様成は然も多く持下々に取せ候斯斯様の事に候ハ、土産に持參申べきにさんばう悔しき事と申せば鬼共聞て源助が袖を引片削成木影へ連行小籠に成夫は誠かと問源助聞各々様へ何か偽り申さるべきせめて一撈持參せば御腰巻の十四五も御座有べき物をと小鬚を搔て悔ける鬼共聞然らば沙汰なしに此者を懸らせ彼毛皮共取寄せんと相談しける併夫と誰とに知らせずハ若後悪しくや有らんと少上手成鬼二人密に呼云々の様子委しく語れハ一段よき才覺急ぎ蘇生させよ逆死出の山三途の川をも鬼共五六人手車に載地走してハ苦堂迄送り小竹筒に持來る酒印籠成肴取出し思ふ儘に饗應をしける程に源助殊之外過分がりて此御地走誠に淺からぬ御事なれば拙者力に及たけ持て候ハん少なく共三四十枚は御座有へしと申せば鬼欲には迷ひ虎の皮毛色の照たるを我にと云源助聞其段は

某に御任せ候得と申せハ殘る鬼兎角は取來てからハ面々見欲も起べし今彼善惡數分をして置べしと手に取らぬ欲心こそ可笑源助申けるは彼の數三十枚程とハ申たれ共拙者頓死にて參り候故力はあまり落申さず候程に四五十枚持て參るべし其内皮の善惡見分て其上名々服用次第圖にて御取有べしといへば此義尤とて鬼共急源助を戻し遙に見送り頓々といふ名殘源助娑婆へよみ歸二度妻子に合扱も〜あぶなき仕合かな某皮細工にて無かりせハ何事にか懸らん是に懲ぬ物有じとて萬事を打捨一心不亂に後世菩提を願ひける程に大善人と成にけり其後程經て往生し閻魔王御覽是は大善人也急ぎ安樂國へ送れとて赤紫冥官に仰せ付られける冥官受給り傍を拂つて送り出る唯今極樂への往生人こそ有れよとて鬼共出て見物す彼の鬼共立出何人成らんと見れば彼の虎豹の毛皮を取に身らせし源助佛也扱も〜と思ひけれ共右隠し遺たる事なれば其沙汰もならすせめての事にも思ひ密に側に寄御身ハ日外毛皮を取に娑婆へ歸したる人にては無か左様に妄語云ても佛に成かといひけれバ去バこそ娑婆へ歸り地獄に赴きし事悔しさに各々へ偽り云たる科送り皆々すきと濟し佛化成就の大善人と成て唯今極樂へ往生申



と云すて、白雲に乘遙の空へ上り行を餘りに鬼共腹立悪しとや思ひけん立寄て聲々に源助の皮虚言佛返々も皮虚言佛と悪口いひて腹を醫けるとかや此様に可笑き名の佛ハ未聞すところ申つれ其中間の鬼こそ思ふ子細有のこ悪口しけれ殘る鬼共其意趣をば知す何事を云たると問ければ云々の事共語夫程聞傳へ地獄の中の沙汰に源助が賢き計事也夫程に知恵成らずは佛には成難譬惡を去たる身成共後悔し道心せば成佛すべしと説給ふ兎角地獄も欲の世の中

一 休 往 生 の 道 歌

阿彌陀佛悟れは即ち去此不遠迷ひは遙の西にこそあれ  
三國の法の品々多けれど釋迦の教にまされるぞなき  
儒釋道三つの教の別ならず善に善報惡に惡報  
昔より智恵有人の佛道ハ二世安樂の教とぞしる  
三國の世々の賢き君臣に釋迦の教を仰かぬハなし  
三寶に歸依する世々のためしみよ國土安穩士民福樂

一心に誠の道に入人の其行未は子孫繁昌  
公家武家の菩提信ずる手本にハ餘足大臣多田の滿仲  
道に人未繁昌の鏡をハ藤氏源氏の家を見てしれ  
武士の遁世修行の手本にハ西行法師さてハ熊谷  
遁世は不遇の人はさもあらめ名とげて菩提入は優曇華  
熊谷か遁世修行功德みよ音信平等自他の成佛  
家に有て不忠不孝の輩ハ遁世修行をあやしかりける  
親主に忠や孝有人々の家に有ても菩提たのものし  
千丈ハ忠孝たゞし遁世を實にたくひなき若武士  
世をのがれ修行の道は別になし智者愚者共に座禪念佛  
今も又十緇八素の友哉とろさんの昔思これぞする  
大唐の如滿禪師と樂天もともに其念佛座禪とをさく  
四大五蘊皆空にして申せこそ誠の念佛座禪ならまし



成佛の異國本朝諸共に宗に寄ず心にそよる

法の萬法行も萬の事なれ心々に道をつとめよ

貴賤智愚僧俗男女別なれと菩提の修行も文におうせよ

今びくの其身の罪は扱置て人の道心破るうらめし

世の中に我ぞ悟と自慢して名利もとむる人の多さよ

名と利とを求るは扱くげんやな人に遣れ財に遣れ

財寶は身の仇なりと聞なから猶もたくのふ心はかなき

つらつらと名利求る人みれ二世の苦患を作こそすれ

戒保座禪念佛つとめつゝじひ有人は佛ならまし

一念の慈悲眞實ぞ種となる九品の蓮華開けこそすれ

當來の三會の春の花も又現世の慈悲ぞ種とならまし

正法の花園山の草や木を昔の春とあすよしもかな

今とても天地の道のかはらねば末世の我等も菩提願し

釋迦も又阿彌陀も本は人ぞかし我らも形の人には有ずや

惡念の起り安くて慈悲心の起し難きを者うかりけり

極樂も地獄も心に有あれば惡念起らはやれと思ひよ

人の非は知安けれとを我非をは智者も知事難きと思ふ

道の只世間世外の事共に慈悲眞實の人にたつねよ

我氣には鬱入さることなりと人の勇へ頓てまたがへ

何事も人の心にさかふこそ佛法世法の障りなりけり

身を捨て鳥獸をまきひしは釋迦の因地の修行とぞきく

煩惱を即菩提とあやまちて罪を作れる人ぞいたひし

煩惱を即菩提となす事ハ一念廻向の内にこそあれ

本來は無心無相の眞佛も五欲にひかれ凡夫とそなる

辨有て凡夫心になかりせば本來空の無相眞佛

眞佛は有相無相にかへとらず口相なきこそ無相也けれ



賣僧して物取くわれいする沙門必ず地獄の敷と社るれ  
くわれい成沙門をみてハ皆人の加者也と云ぞ可笑き  
今時の僧ハ中々俗よりハ因果菩提を去らぬ佛たら  
戒保座禪念佛つとめてハ心悪きは造地獄業  
物毎に執着せざる心こそ無相無念の無住なりけり  
皆人の貪瞋愚癡の悪水は三津の大河の流れとハなる  
六根に作るさいくわの散果る死出の山路の高ねと成  
極樂の月侍夜半の念佛ハ雲きり拂ふ秋の西かな  
老の身の月日をおくる所作ハ只香花とくじ座禪念佛  
妙にして神有者は心哉天地に渡りみぢんにも入  
心より四聖六凡出ぬるに何とて悪業の業作るぞ  
何事も今日の觀樂過ぬれば必ず明日は苦患とぞ成  
現在の苦修善行と種となり必來世ハ安樂のはな

苦も樂も現世の事は一刹那迷ハ來世てんよう業  
罪障の露霜ふかき身には只座禪念佛惠日ならでは  
松島や湊の海も極樂の池水と同じ法の陸奥  
十方は唯心の淨土と聞時は衆生もつとめハ已身彌陀佛



一 休水鏡増注

君の千年を經事も天津乙女のは衣よなふ萬世まじませいはぶがうへ

注に曰君とさしたるは我本心の主人公也千年を經んとは不生不滅の譬なりもはら  
千年に限るにあらす千年といふ大數を擧ていへり天の羽衣とい彼のなづとも竭ぬの  
心を以て本心の君をいふ也萬歲まじませとい本心ならば何時も有へき事成共悟  
時は佛心迷ば凡夫心と成へ佛心にていつ迄も坐ませといへる心也猶いとふといへ  
るは佛道修行の譬なり

我見も久しく成ぬ住吉の岸の姫松幾代經ぬらん

注に曰古歌によみし姫松を以て本心に譬たり句の心の心は我見ても久しくなりぬ本心  
の道理なれは未生以前の經世をか經ぬらんと也猶我見てもといへるは色相の眼を  
以て見にあらす心眼を以て色無所を見る心也

目なし遠々聲についてまじせ

注に曰迷へる一切衆生を以て目無達といへり爰にいへる目も色相の上の眼を以て

云に有す聲について坐ませとい一切の經説又々我云教へ成べし

抑も皆人達の悟とやらん云事を悟る習ひ初めに父母も無とつと以前の我身何者ぞ言聞  
んといふ何として知ぬが事中さるべく候やへんてつも無者也と思べし譬へば吉野初瀬  
の花紅葉色々に咲て散て又素の様に返が如し

注に曰父母もあきつといせんとい父母未生以前本來面目也素の様に歸るとは儒宗  
に明德を明にして本然の善に歸るといふが如し愚案するに吉野初瀬の花紅葉は無心  
成故を以て又素の様に歸れり此間の工夫有べし或人の曰然らば惡を成たる身は本  
來に歸まじきや答て曰善を成て本來に立歸事の工夫は尤也惡を成て本來に歸らぬ  
事を工夫するは醫師驗無樂の方を習が如し

本來も無古への我なれは死行先も何もかもなし

注に曰四つのもの字に猶深き心有すべて此無の字の工夫大事也尋無とのみ心得れ  
ば上王公を敬す下萬民を侮て禍を招く又僅に無と云も其無といふ者殘れ本來の無  
に有す逆可空諸所有不可實諸所無といへれ共猶強是をいはゞ其又所



無を實にせぬ者又々實を成べし十の物を三つに分たん様の如くにして何時迄も本來  
 に至事なしさればはや又無俱に遣といひて常に有の上居て無をする工夫有さ  
 れども有無共に遣と云斗にては又無の見に近しい此段工夫いとむづかし莊子曰  
 視之無形聽之無音於二人之論者謂冥々所以論道而非道也  
 注曰冥々無也知有之爲無不若并與無々之  
 世の中嫁が姑にこやなれば人も佛に成はほとなし

注曰是も仮初に聞ば凡人も其儘佛に成と云に似れ共其本意然んば非嫁の姑に成  
 といふにて知るべし嫁といへるは姑を順道也佛道修行の人の佛果を得修行無人の  
 佛果を得ざる事一代嫁せずしては百年を経共姑にならざるが如し猶衆生を人の  
 娘に譬嫁を佛道を來る人に譬へ姑を佛道に安座せる人に譬たり猶爰に人といへる  
 佛道を求人といへり並ての人をいふに非此歌も聞まかへば無の見に落る歌也若又  
 佛道修行無人も佛に成といふばかりならは世中の夜が晝にも早成は人も佛に成は  
 程なしとこそ縁へきに嫁姑といひ稽したるに深心あり

行水にかずかくよりもはがなきは佛を頼人の後の世

注曰爰にいへる佛の心の外に求むる佛をいへり人々具足の佛性をいふは非頼  
 どの内より外を求るをいへり彼列子か風に乘て心よく大空を恣に翔といへ共猶風  
 を外に待所あれは彼至樂の郷に神遊する者にはまがすとといふが如し

問曰不言問ねばいへぬ達尸殿の心のうちに何か有べき  
 注曰祖師の心の内の謀難佛道の玄妙にして中々言句を以て言難き事をいへり又  
 曰何か有べきといへるも無といふ事也何もかも無といへ即無一物也不思議不思惡の道  
 なり

らうをつぎ地獄に落る者ならば無事作る釋迦いかに爲  
 注曰此歌は儒書にいへる權の道也權の道とは譬ば兄嫁の水に溺時は手を取て引  
 揚助くるが道也其男女の禮義を背事し輕くして命を助くる道の勝れて重きといふ  
 心也今の世にもうそを突て成共衆生を助くる道有ば妄語戒を破るに妨げ無のみに  
 非百戒具足の智者たるべし彼我親の羊を盜しを顯したるは正直の道に似たれ共仁



孝の大道に差と孔子の給ひしと裏表也益無うそ一ッ突ても地獄の種成べし此間辨難し

世の中の人の心の佛あれば釋迦や阿彌陀の晴渡すかな

注の曰爰にいへる晴渡を哉といへる事覺束なく侍りしに或人の曰腫わたす哉といへる心也と猶訝く侍りしを我友舟木氏の何某の曰晴渡かなど、猶參會するといへる心にやと語侍し尤其理を得たり人の心の佛なればといふ心は即儒書にいへる性の字也是を人々具足箇々圓成性也を悪き者といふ説ハ世の中に悪き者は多くして善人の稀成故を以て悪きと知也といへり又性に三品有といふ説ハ人に上中下有故を以て三品といへ共猶孟子の性善の説といふは譬ば如何程僻々敷者も童などの井に落いらんとする時に可愛と思ぬは無是も其子の親の知人にも無又慈悲心有と人によく思はれんと思ふにても無只彼性の善なる故成といふ心也儒釋莊老共に此理を用る事也猶盜人も大將を敬ひ同類をおもふが如し極樂も地獄も知ぬ思ひでに生れぬさきの者と成べき

注に曰二つのもの字甚た深き心あり僅に極樂に生るといふも其極樂と云に着する心有り其極樂も共に忘るゝにハ然らず地獄極樂と二つを揚て云は二つを云のみに非森羅萬像皆此二つの中に諸余が座禪の句に

無いちもつか花も香もなき犬さくら

と仕奉しも花も香も無きといふハ當れども猶犬櫻と云者残りたれハ其心に叶ひ難

くも侍らんなれども愚意には犬櫻といふを以て本來に譬侍りし猶不除妄想不

求眞といへるが如し

人死ると否や焼もし埋めもし除て無成と思へば又も無成らずして魂といふ者來世とやらんへ行あら恐しや閻魔の王が手に渡なバ沙婆にて作る罪を黒金の帳に附て置て鬼に見せて是程の罪人也呵責せよといふ時五色の鬼殿が受取て曰に捨殺して又箕にて挽人の舂に成て沙婆にて罪の重き程かしやくすといふ

注に目此だんも別心なし前にいへる七首あまり懸離たる頓語の歌なれば衆人の無一へんに落入ん事を恐て又方便の道をいへり猶前後に心を付工夫綿密にし永く味



ひ審に翫ぶべし

又去者のいふは毒藥返きて藥と成なれば罪の重きは佛にやあらん

注に曰此段も前後あまり小乗の教なれば又放下して着を放て教の外に遊ばん事を示したりされども和尚の本意にも非他人の語に託していへるにて其心を知べし作置罪のしのみ程有なれば閻魔の帳につけ所なし

注に曰彼かこを盜者は誅せられ國を盜者は諸侯と成といひし而影有民一人を殺しなどするものは法度に逢一度謀反を起し天下を顛し萬々人の命を斷無量の堂塔佛閣を亡者は我願を叶へ一天下の主となる其後國に掟を垂る業いふも事新し能物を案するに地獄も遠からず鬼といふ者愚鈍なり

注に曰怒まじき事に怒心の鬼也叶はぬ事を願心の地獄なり然らば何ぞ遠き事あらん  
一代藏經の皆人間を痛爲

注に曰痛めんとは人を冤る方にてはなし人を誠心をせめまむる心也代或は作太に

あらにくの釋迦殿や

注に曰あらにくとは心にくの釋迦殿やといふ心也又曰最愛の釋迦殿やといふべきを打返していへる也是も通すべし

種々の虚言を囑て於て夫を離問ばよしなの問す語りや

注に曰種々の虚言とは一切經の方便の衝をいへり一切の子たる者に親の諫をいふも子の方より諫を受んといふはなし皆親の方よりいへる事也故に問す語と云去るにや一切の衆生を子の如くに憐み給ふ佛也由無との由來なきといへる

釋迦出山之語曰一佛成道觀見法界草木國土悉皆成佛草木さへ佛に成といへば人間はいふに及ばず昔々あつたと

注に曰草木國土悉皆成佛といひて別に草木に光さし其外奇特有佛に成にあらざる各其所を得るといふ心也下に柳の緑花の紅といふにて悟知べし一佛成道し給ふの本來の無に立歸給ふ所也猶いひ難し

釋迦も阿彌陀も皆佛じやといふたまたが虚言をつかれたとなふ



注に曰釋迦も阿彌陀も佛をよとは一佛にして二佛無事をいへり  
歌ふも舞も法の聲柳は緑花の紅あら面白の春の氣色や

注に曰歌ふも舞ふも法の職とは本分の田地を能知ての上の事也拍子聞の間違ひ亂  
拍子の曲とて人の面白がるが如し柳は緑花は紅といふ土走れは猿木に登る山は是  
山水は是水金銀桂馬飛車角行を掌の内に握るといへども將棊を指ざる時はよき  
馬とも見えずあら面白の春の氣色とは唯嫌棟樑の心成べし  
本來生死を放れたる身成ば來る所も無去る所もなし三世不可得なり

注に曰來る所も無く去る所もなしとへ出るに門なく入に穴なしといへるが如し三  
世不可得といふは思唯計校の及ぶ所にあらざる事をいへり  
混沍を何所とも無出ぬれば父母未生以前本來もなく夢々佛法とやらんいふ事も知ず何  
とならんと案すべからず何共知ぬ所が佛也

注に曰何共知らぬ所が佛也といへる所に多の僧俗共に迷ふ所也專何共知ぬ所を  
佛といはゞ世俗にいへる癡者也いかでか佛是非を知らざらん若又是非をだに知ぬ

佛ならば求て何の益あらん若又何共知ぬといふは我一心に好て成所也といはゞ鹿  
を追獵師の山をみぬも佛成べしや爰にいへる何共知ぬ心を知らんと思はゞ六祖の  
不思不善思惡を工夫すべし出家も爰を手の附れぬ所也と種々に着語し且那もいふ  
に言れぬ所也と悦ぶの知れぬが何か嬉ぎぞや只隣の寶を讚たるが如し若又いふに  
いはれぬと斗り袂句せば一大藏經其外祖師の語の何ぞや云にいられぬと云ながら  
云るころ猶不言詞成べし

其佛と云者の有にも非無にもあらず悟ぬれば有共無共知ぬ事なり

注に曰有にも非無にも非とは一切の有無ともに放れたる事をいへり有共無共知ぬ  
事とは有無を知らぬと云にはあらず此心を

有無ともいやり梅は法のこのみかれ

一切八萬餘經を見に佛に成らんとする心は少しも無兔角舊曆なき同事也

注に曰教外別傳不立文字也或人の云舊曆とは一度見ての叶はぬといへる心にや只  
其經に若すべからずと云心成べし



橋なふて雲の空への上るとも愚鈍の教を頼まれもせず

注に曰悉く書をえんぜんは書をからんにい如きと云るが如し

釋迦といふ徒者が世に出て多くの人を迷はするかれ

注に曰鳥は黒し鷺は白し何ぞや釋迦の教を待たん一代の説法に縛れ愚成人の外に、佛を求るの迷ひに非えて何ぞや

是は是非は非にして置生は生死は死花は花水は水草は草土は土

注に曰和尚常に生死一致の理を云のみに非爰に至て是非を生死より先にいへるは天下の禮義國の法度を能守れと衆人に教を垂給ふ心の内知ずんば有べからず或人の曰此段の八つの着光世間の是非を能辨へ次に生死の理を知次に花水草土を斷ぶべし其次節悉く見るべしといへり義以て道すべし

雨霰雪や凍とへだつれと解れ同じ谷川のみご

注に曰解ればと云を死の方に取れ無の見に近只解脱の方成べし此意を答て

雨水雪や霰と隔來て解ずは如何で谷川の水

我は何者ぞ頭上より尻迄探べし探られめ所我也

注に曰爰に探られぬ所といふ心也

心とは如何成者を云やらん墨書に書し松風の音

注に曰墨書に書し松風は即ち無の字也

死ぬれば空々として有やらん又渺々として無やらん

注に曰空々渺々二つとも手の下難所是も一つの無の字に遇す上には有やらんといひ下には無やらんと云別に爰に有無の兩字に差別なし自然に有無一致の文法成べし

有の實も梨も一つの木の實にて喰に二つの味ひなし

注に曰別に心も梨の本の味に巴鼻作る者も誰か有のみならん或人の曰くうを空に添たりとせんさく成義にや侍らん

已れさへ熱氣拂はぬ不動めが惡魔降伏無用なりけり

注に曰人を治めんと欲せん者の先其身を治といふ心也不動めがと惡くいひしに別



に心なし只一首の曲也

亡跡のいしが形身に成ならば五輪の代に茶臼きり桶

注に曰五輪など美々敷する者の爲にいひしと見たり是も名聞苦き人を制めたる心成べし

朝露は消に殘てや有ぬべし誰か此世に殘はつべき

注に曰一度生受たる者の滅する事は朝露よりも甚だ消安きことなりを云兼て彼延はり難き命を神佛に祈家に萬々年の貯をする者を制め一大事因縁を勵せんとの心成べし

堀らぬ井に溜ぬ水の波立て影も形も無者ぞくむ

注に曰ほらぬ井に溜らぬ水は本來の面目影も形も無者との心なり

目にい見て手には取れぬ月の内の桂の如き君にぞ有ける

注に曰君との本心の主人公也

萬法を見る人毎の咽喉干きかもはで水を一口に吞

注に曰萬法一如の事は誰身の上と草子にあらまし書侍し人の萬法を信する事へ猶活せる者の水を求むるが如し去其萬法を能見ざる者は猶濁江の水を一口に吞者に

同し 釋迦近海の所に任せて佛になると云印なし兎角不明也

注に曰佛に成に若記有らぬ眞の佛にあらず衆生は澁柿佛の膿柿不明とは猶玄々妙々不思議といはん如し

死すれば我もなし人もなし釋迦彌陀も見れば本は人の用を受つゝ地獄にぞ居る

注に曰本來空にありなば我に我なし人々我なし何ぞ人有事に渡らん生を受つゝ地獄にぞ居ると釋迦彌陀も涅槃ならざる先は猶人界に住まといはんが如し此土を以て地獄に譬たり多本に居るを入に作非也

終夜の道を尋ねれば我心にぞたつぬいりぬる

注に曰古歌に汨川な水水を尋けんもの思ふ時の我身也けりといへる心ばへ也去共聊差もあり



思ひ入ば人も我身も余所ならず心の外に心なければ

注に曰心外無別法の心にや猶一人の心は千萬人の心也といへるが如し甘草日本人の口に味く唐人大和の美女を慕

心とてげに心の無者を悟は何のさとりなるらん

注或人の曰げにとは外には也心より外に心の無ならば何をか心といへん然らば悟の何の悟ならん血を以て目を見る耳を以て耳を聞猶一則の話也

何事も空しき夢と聞者を現ぬ心をなげきつるかな

注に曰別に心なし猶邯鄲の枕をして漆園の籬に遊べし

我法をいはでぞいらぬ春の花も開て散て土にこそなれ

注に曰一切の法は僅に言葉有と第二義なれば言句不通の所こそ正法玄藏涅槃妙心の根元成べけれ共猶不立文字を放れずなれば我法をいふべし彼心なき春の花も一旦開て散て根にこゝかへれとなり

一休水鏡増住終

一休笑話

明治二十三年十一月九日印刷  
全年全月廿日出版

東京々橋區南大工町九番地

發行者 井ノ口松之助

發行所 魁真樓

京橋區築地壹丁目九番地

印刷者 吉田榮治

印刷所 東京印刷會社



東京大賣捌 辻岡文助 大川屋錠吉 金櫻堂 春陽堂 上田屋榮

三郎 山口藤兵衛 大倉書房 井ノ上勝五郎 明進堂 辻本九兵

衛 目黒書房 長島書店 金鱗堂 府下各勸業場書肆稗史小説問屋

三府各縣書肆大賣捌



# 魁眞樓新書出版目錄

岡本半溪先生著  
 ●月琴 清樂の栞  
 ●雜曲  
 第五版  
 美製折本全一冊各  
 正價金三十錢ツ、

●月琴 同 續編 四  
 一帖ニ付郵税二錢

此書ハ清樂ノ獨修書トモ云フヘキ良書ニシテ唐韻長崎各流ヲ論セス掛ハチ附詞譜ニ唐韻ノ和解ヲ附シタレハ初學ノ人ト雖モ師ナクシテ解シ得ベキ好書ナリ但葉歌大津繪ふし二上リ三下リ本調子軍歌唱歌はやり歌ノ調譜等ノ弦ル珍書ナリ

風月堂主人題字 岡本純翁著

●支那 菓子製法獨案内 全一冊 正價金卅錢 洋裝美本 郵税私辨  
 ●西洋 菓子製造ノイタル其業ニ在ル者ト雖モ百般ノ製法ニ富メルモノ少ナシ然ルニ此一書ヲ熟讀スルキハ題名ノ如ク支那西洋ノ珍菓ヲモ造出スル眞ニ容易ナルノ好冊子ナリ

正四位伯爵勝安芳君題字 柳原健吉君 校閱并版  
 正四位男爵山岡鐵舟君序 松廼舍井之口先生編述

●兵法 柔術劍棒圖解秘訣 全一冊 第五版 正價三十五錢 郵税四錢

此書ハ兵要柔術劍棒及半棒木刀ノ仕合方法等ヲ詳述シ加フルニ圖解ヲ施シタレバ眞ニ手ヲ以テ教示スルカ如ク且種類ノ多キコト一百二十有餘ニ至ル其他早繩當身九字等ノ法ヲ記シタレバ軍人警官出身ノ御方ニハ最モ必要ノ良書ナリ

勝安芳公題字 柳原健吉君校閱 田子重信先生教授 井之口松廼舍著

●水線 早繩 圖入 正價金五拾錢  
 ●弓矢 刀拔 武道圖解秘訣 全一冊 郵税六錢  
 ●活法 長卷 美製 一名柔術劍棒圖解ノ後編  
 此書ハ兵要武術ヲ拾ク蒐集シタルモノニテ每條其奧蘊ヲ極メタルノ良編ナレハ世ノ武術ヲ心掛ル人一タヒ之ヲ繕クトキハ不虞ニ備フル護身ノ銳鋒ヲ得ヘキナリ

●圖解 毛絲編物教授本 正價金卅錢 郵税金二錢  
 此書ハ教師ヲ得スシテ目錄ノ通り速カニ獨習スルノ良書ナリ 大略目錄(鈎針編之部)脈留



類、帽子類、涎掛類、手提類、座敷靴、肩掛、枕掛及椅子掛、窓掛、机掛、座蒲團、花物類、襟飾類、飾編數種(針編之部)長靴下、半靴下、手袋類、シヤツ、股引、チヨッキ、ズボン、胸衣、下衣、襟卷、前掛、手煖め袋(前書に漏タル物よりレイス花物女子帽子の類)手提等六十有餘其他數種)

守能健吉郎編輯 安達吟香畫

洋裝美本 全一冊

○正史續繪本太閤記

正價十錢郵稅四錢

○實傳續繪本太閤記 ○此書ハ關ヶ原軍記以下大阪落城ノ後眞田後藤等薩摩へ赴クマテノ實際ヲ委ク記述セシ好書ナリ

○新撰養蠶獨案内 頗美洋製 圖入百有全一冊

○世ニ養蠶ノ書アリト雖モ多々贅語等ニテ實業ニ適セサルモノアリ今此書ハ簡便無歎ニシテ實ニ絶無ノ良書ナリ

佐藤保先生著

平カ ナ附 全一冊 刻近

○醫者ノ 萬病獨療治 美製

此書ハ流行病ヲ初萬病ノ心得又手當等ノ事柄ヲ記載シ都會ノ地トイヘ共急病ニテ醫師ヲ向ニ行迄ノ心得片田舎ニ醫者二三里モ有地方ノ者ハ不申及候得共萬民ハ此一冊ヲ常日心掛置タレハ至急病大疵等ニ至ル迄ヲ各軍醫先生ノ校閲ヲエテ出版ヲスルノ良書ナリ

伊太利公使館書記官カイテ一氏序 岡本敬二著

○和英對譯記事論說文例 洋裝全一冊 定價四十五錢

○此書ハ岡本敬二君積年英學ヲ研究セラレ英國公使館書記官アストン氏ヨリ示教ヲ受ケ編ラ成セルモノナリ牀裁ハ一葉ヲ三段ニ別テ上段ハ萬民必要單文ノ會話ヲ和英對譯シ中段ハ日用往復ノ文章下段ハ和漢洋ノ記車論說文例ヲ和英對譯シテ錄セシモノナリ各中小學校教師生徒ニハ必ス座右缺ク可ラザル寶書ナリ

南柯堂夢笑道人戲著 近刻

○法律 明治騙拐裁判 洋裝美本寫真 石版畫 全一冊

○此編ハ奇術ヲ逞フシテ他人ノ貨財ヲ騙取スル奸物カ法官ノ眼光ニ照魔サレタル裁判ノ記事ニシテ新珍ノ一編ナリ諺ニ法嚴ナレハ奸智益猛ト云フモ此書ヲ緝ケハ法官ノ任ノ至重精妙ナルヲ知ルニ足ルベシ



泉岳寺舊老僧題字並聯

赤穂夜討譚

極彩色洋裝美 全二冊

此書ハ大石良雄等カ復讐ノ顛末ヲ記シタルモノニシテ從來世上ニ流傳セル誤謬ヲ正シ專ラ實蹟ヲ編録シタル書ニシテ實ニ頗美本エテ四十七圖畫ハ以テ婦人童子ノタメニモ好キ良書ナリ

田島象二君圖書併録

大本 頗美製本

全三冊

壹冊ニ付正價金四拾錢ツ、郵稅四錢

右三冊御求メノ節ハ郵稅私辨

明治中興 凌煙圖錄

明治 偉臣 金玉音譜

本書ハ今上天皇御宸翰光格天皇御眞跡各皇族諸大臣有名ノ眞跡畫鑑併ニ寫眞像畫ニ傳記碑銘等ヲ全三冊ニ追々出版ナ仕タル所製本ヲ久ク品切之所今般弊店へ板權并ニ木板不殘買入候ニ付大特別全三冊ヲ以テ金五拾錢ニテ當分ノ内賣却仕候也

河鍋洞郁先生畫

曉齋百鬼畫談

極彩色 折本全 壹帖

正價金五十錢郵稅六錢

大雅堂畫法 彩色摺 大形大本 全貳帖

六ヶ月間英語卒業書 大本 全貳冊

正價金六十錢郵稅八錢

化學 染色法 一名 色圖譯 獨案内

此書ハ必六ヶ月ニ語學卒業ノ出來ル萬國一ノ良書ナリ 金一圓卅錢郵稅八錢

實験 染色法 一名 色圖譯 獨案内

諸願届書式獨案内 全一冊

定價一圓廿五錢郵稅六錢 此書ハ化學ヨリ染物法ヲ御婦人方ノ必ス一讀スベキ良書ナリ

正價金拾五錢郵稅二錢

實地 獨習 商業簿記學 全貳冊

遠州 插花濱名の海 半紙本 全三冊

定價金七十五錢郵稅六錢

正價金四十錢郵稅六錢

遠州 插花柳の緑 半紙本 全四冊

正價金五十錢郵稅八錢

市川團州題字岡本半溪翁補筆 春風亭柳枝校閱春風亭柳條演口

小夜嵐吉原奇談 彩色畫十 葉入 頗美製本 全一冊

正價金三拾錢郵稅四錢



岡本半溪翁先生著

○ 琴三味線 音曲 獨 稽 古 ○ 近 刻

月琴詞譜

○ 此書ハ琴三味線月琴譜等ヲ如何ナル御方ニモ此本ヲ一覽スレバ又獨リ稽古ニナル事ハ師匠マカセノ良書ナリ

○ 珍事 一 休 笑 談 ○ 彩色畫二拾一葉入

○ 奇聞 一 休 笑 談 ○ 頗美製全一冊

○ 正價金卅五錢郵稅四錢

春風亭柳枝亭、燕枝、五明樓玉輔、桂文樂、同文治、柳亭燕路、今輔、枝太郎、年枝、朝枝、鶴枝、禽語樓小さん、里朝、紫朝、扇歌、金之助、燕洲、猫柳、琴柳、一柳蝶柳齋、春風亭柳條、惣集柳家泉女子編輯

○ 音曲 柳 の 譽 ○ 近日出版

笑譚

○ 此書ハ落語話師家柳連惣有名の者昔咄今様軍談並に柳橋、大津畫ぶし木やり葉歌清元長歌義太夫流行歌手品都々逸同文句入退分節新内音曲の類は不殘諸君方へロハにて進上す只は只々に版元本を求め御方に進呈す枝女子柳枝等の席亭にて隨引にて諸君へ進呈す外の者も柳派を諸君の御引立を蒙る御禮をなす者なり此本は面白くて臍の西國するほどの者通人の必一冊は入用の者也